

凱旋紀念帖

人の巻

210.652

R52g

(W)

002286-003-5

210.652-R52g

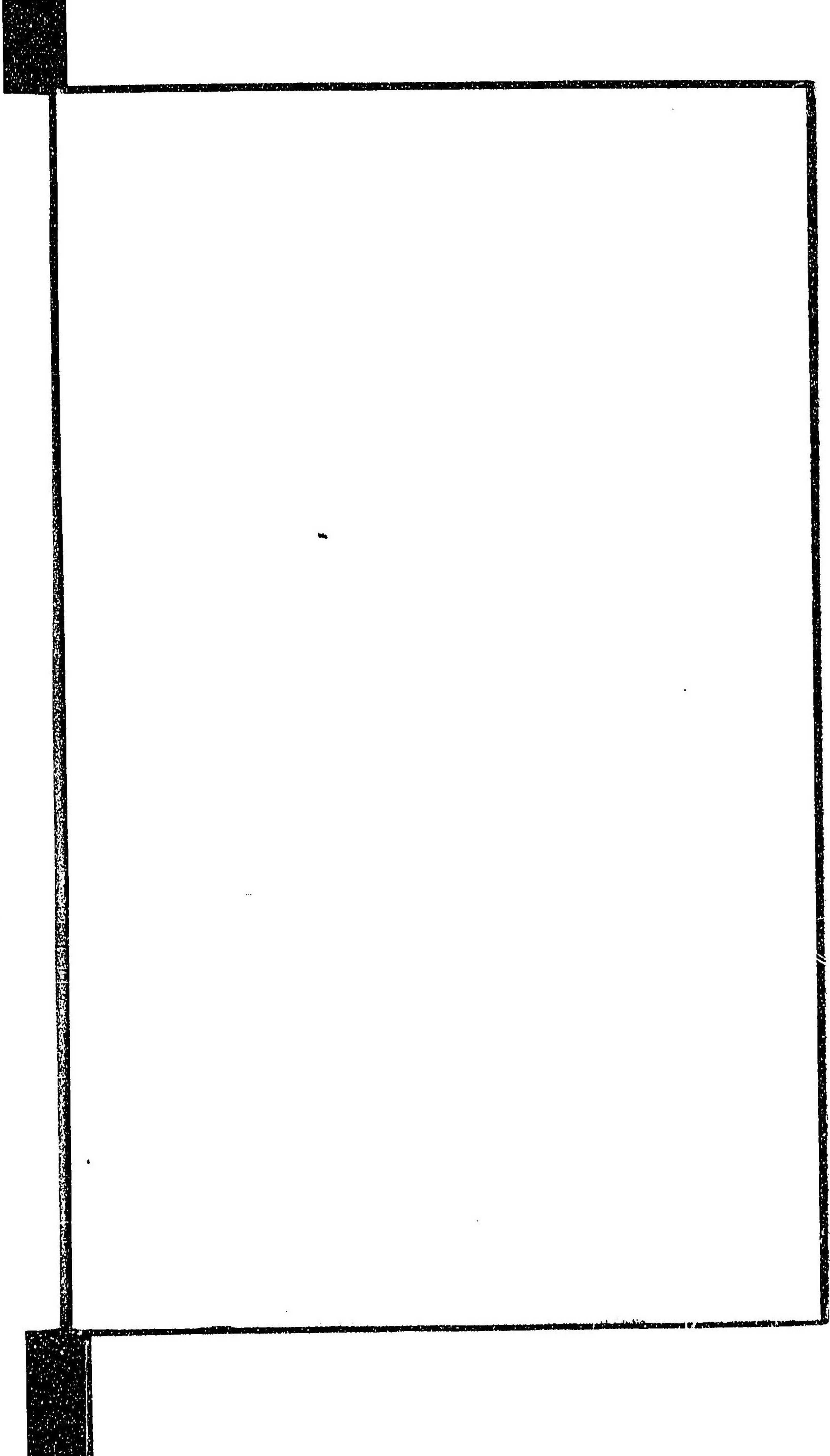
凱旋紀念帖

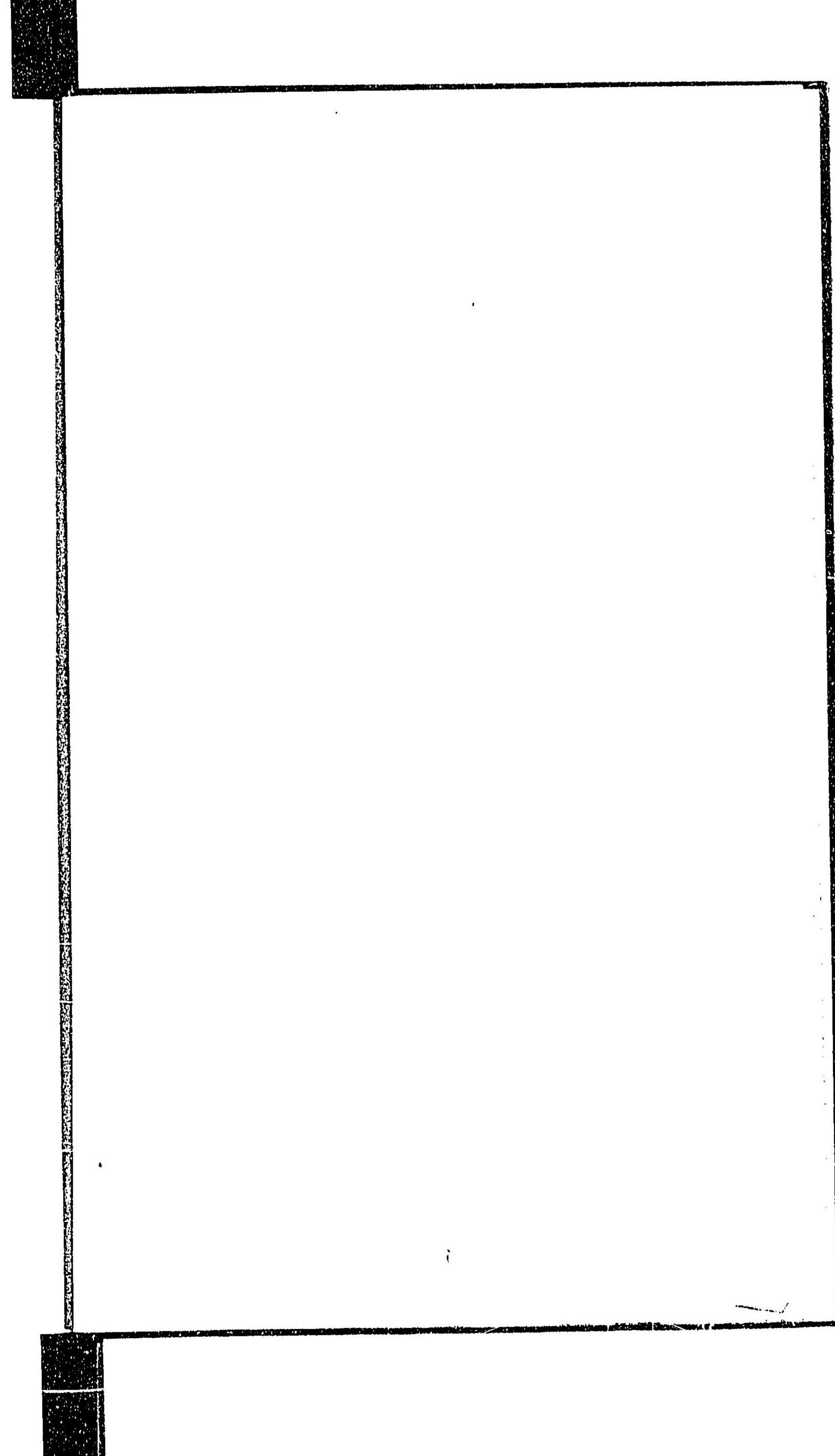
陸海軍士官素養会

M28

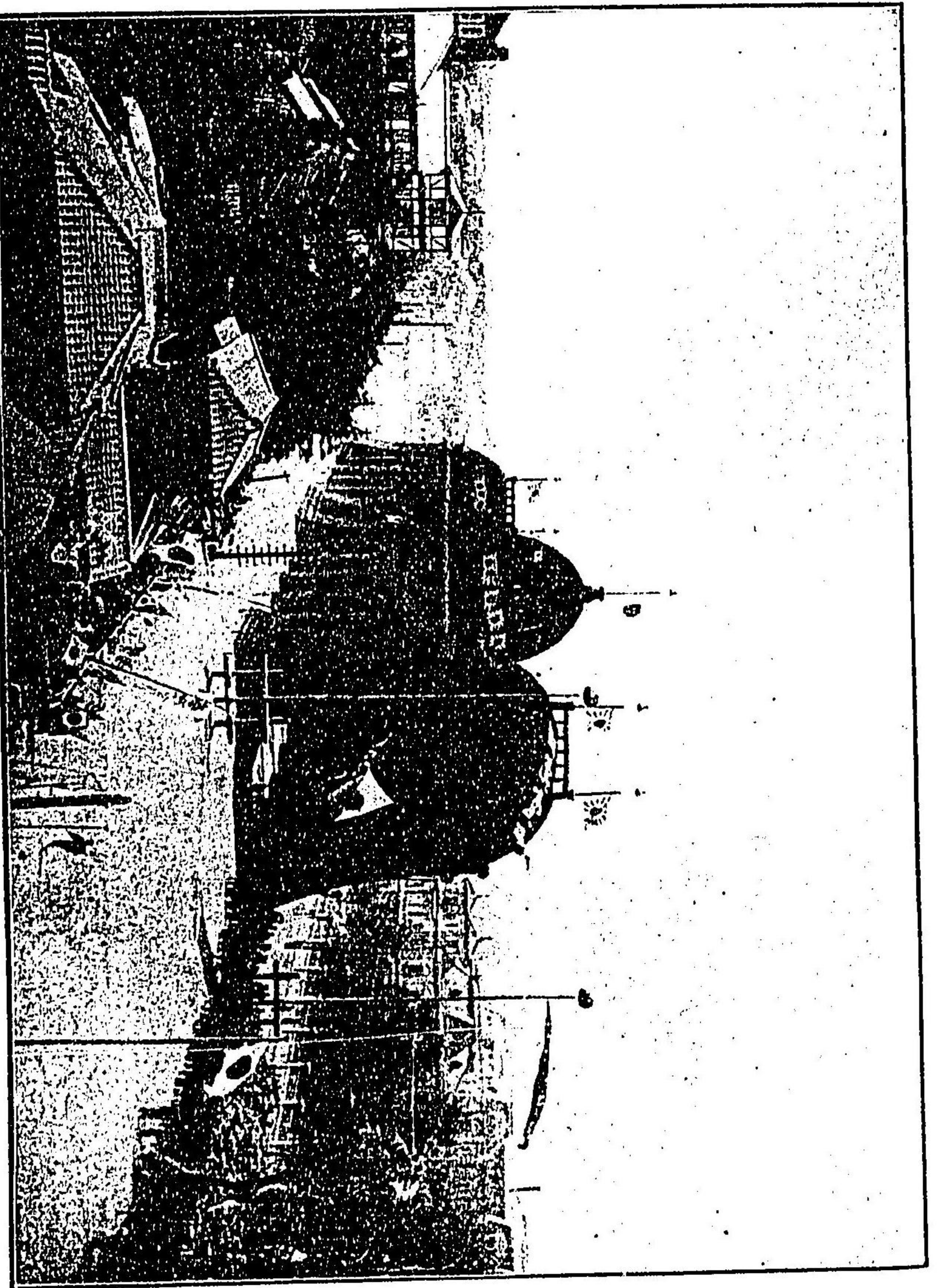
ACB-5658







日 比 谷 凱 旋 門



小川一真寫真影刻銅版及印刷

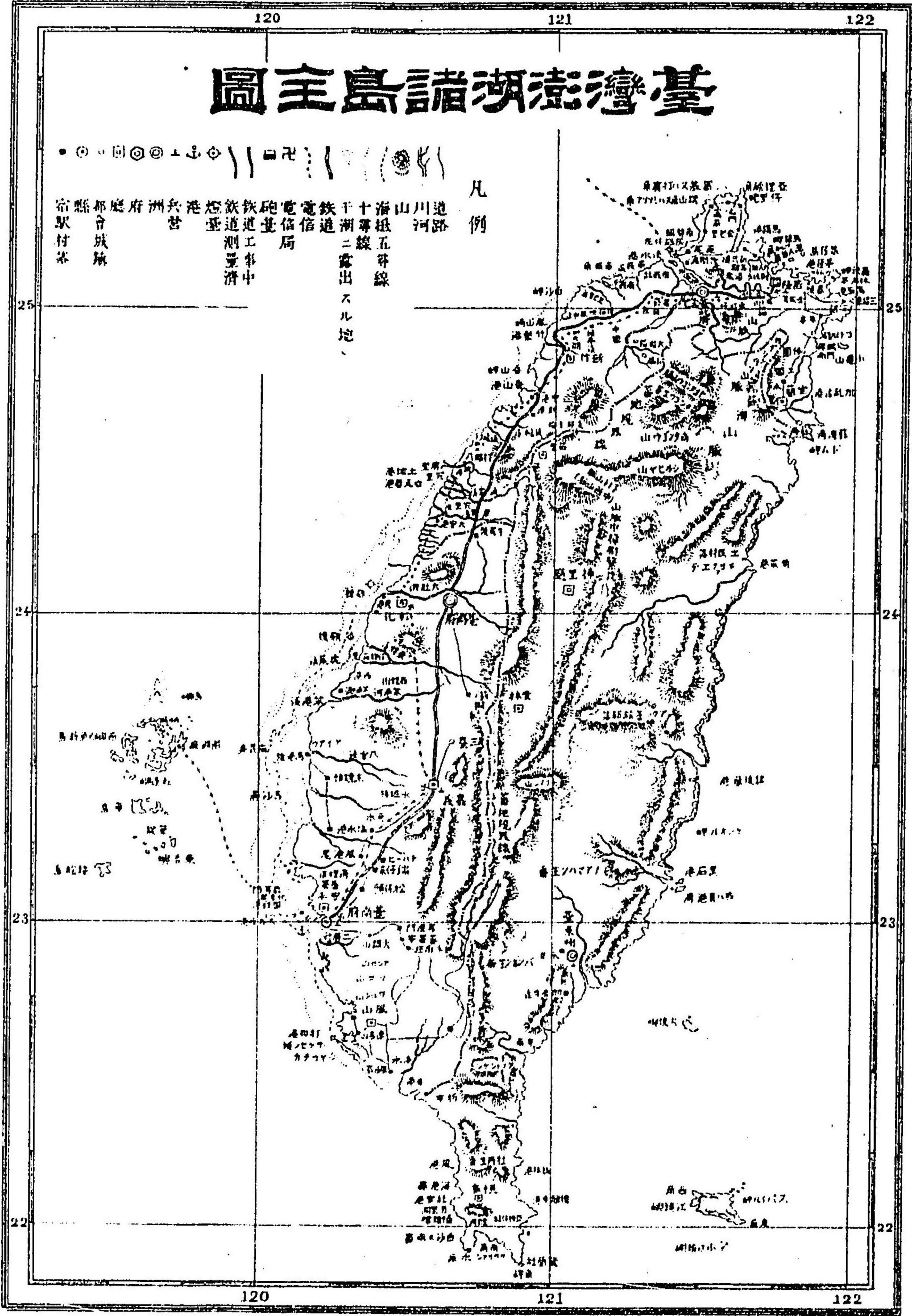
三年甲子の夏

つ肩未道下

臺灣澎湖諸島全圖

凡例

● 縣城
 ○ 府城
 ⊙ 州城
 ⊕ 港
 ⊖ 燈塔
 ⊙ 鐵道
 ⊙ 電報局
 ⊙ 電信局
 ⊙ 干線
 ⊙ 十線
 ⊙ 海峽
 ⊙ 山脈
 ⊙ 川流
 ⊙ 道路



日
 本
 報
 社
 代
 理
 人
 小
 坂
 正
 介

210.652
R 52g

凱旋紀念帖目次

◎人の卷

本記

第二十一	栃木城の逆襲及附近の敵情	丁數
第二十二	牛莊城の大進撃	一一
第二十三	營口の占領	二二
第二十四	田庄臺の火攻	三五
第二十五	榮城灣の上陸及榮城の占領	七八
第二十六	威海衛の大戦	一一三
第二十七	北洋艦隊の全滅	一四三
第二十八	澎湖島の占領	一八九
第二十九	總督府の前途	三三三
第三十	媾和談判	三九六
		四二八



凱旋紀念帖目次 人の卷

513614

參 照

皇后陛下病院行啓記事	五一一
英船益生號の捕獲	五一六
媾和談判往復書類	五二一
小山豊太郎判決書	五二九
占領地總督部條例	五三一
金鵒勳章年金令	五三二
傳 記	別 一
奉公記	別 三三
頌贊記	別 四九
凱旋記	別 八一
臺灣誌	別 一〇九
以 上	

凱旋紀念帖 人の巻

本 紀

第二十一 栃木城の逆襲及附近の敵情

海城に於ける第三回の逆襲を撃退せし後も、清兵は尙ほ未だ其附近を離れず、我隙もあらば乘せんとす有狀にて諸所に運動せり。之が爲め我海城なる軍隊は、毎に戦闘準備を嚴にして、或は門外に整列し、或は前哨線に進行することを例とするなど此風雪嚴寒の候に、駐營の艱難なる、歩哨の凍傷斥候の遭害、舉げて慘憺の事ならざるはなし。吾人深く以て想察せざるべけんや。

三たび海城に敵軍を撃退せし翌日、即ち二月十七日は、六花空に飛び、東北の風さへ烈しかりし折柄、城外近く砲聲の聞ゆるあり、明に敵の近村に在ることを知れり。此朝敵兵早く來らざれば、我より進んで敵の營地を攻め、一舉に之を逐攘せんとの軍議は、忽ち我が師團司令部に洩けり。前夜敵の主力の舍營したるは、即ち二臺子なり。今早朝臨甲山下、城外家なき所、烈風雪を

敵兵近く

野中進軍

捲て飛ばし面を向くべからず。其寒苦殆ど言語に絶したり。敢て進んで大洋河邊に達す。河は一面に凍りたれば、歩行自在ならざれども、去年清兵の架け置きたる土橋あれば、故に氷上を涉らざるも、以て行くべきなり。徐に橋上を渡り、黃龍屯を經、蘇家堡に至る。我兵は斯る寒氣を物ともせず、銃を往來に組み置きて、人家の内外に徘徊す。是今朝早く海城より來れる者なり。藤甲山上には、大迫少將・塚本大佐・兒島參謀等、風を巖に避けつゝ、二臺子の方を打ち眺め、頻りに敵狀を偵察せり。又他の巖陰には、頃日野戰砲を九連城より曳き來りたる、豫備砲廠の士卒、雪を冒して蕭然佇立す。更に巖角を攀登すれば、其上の小平地に据ゑたる野砲數門は、車輪雪に埋もれて、掩堡も半は隠れたり。進んで敵地を望見するに、數町の外は、糞糊として分明ならず、僅かに千米突餘の距離なる團山子の絶頂に人あり、之を俯瞰するも、其敵たるや、味方たるやは、風雪の爲に判然たらず。聞く敵は今朝早く二臺子を去りて、何れの村落にか去れり。是に於て、我諸將謂らく、敵新に去る、必ず重來襲撃の事なからんと、議乃ち歸陣に決す。蘇家堡に至る比ひ、轟然野砲の山上に震ふを聞く、幾か一聲にして息む。既にして、海城の西北なる白砲陣地に當りて、又數聲の砲發を聞きたりしも、是亦暫時にして中止せり。後にて聞けば、此日十二時過ぎ、大島旅團第十九及び、第七の兩聯隊中の二個大隊は、二臺子に向ひしも、敵は既に去りたる

砲聲一發

敵橋木城に涉り來るに砲聲の報

戦利品

後なりしかば、其儘に引回へし、且其自砲の射撃は、此隊の進入を掩護したりし者なり。此日早朝、敵又橋木城に薄り來る。我兵撃て之を斃すこと二十六名、其狀況は、某士官の報告書に詳かなり。曰く、本月(三)十七日午前七時、敵軍一千、當橋木城を襲ひ、接近すること約三百五十米突、我一個大隊(第六聯隊)逆撃す。約四十分にして、敵蟬洞谷の方向に敗走せり。其即死二十一名、負傷者捕獲二名、退路に於て死する者八名、負傷者は翌未明途に死す。旗・彈藥・銃槍銃等戰利品多し。小官は、兵站司令殿の命に依り、部下六名(大坂の兵一名あり)を指揮し、一面兵站部附軍夫七百名を整列せしめ、一面倉庫の取締りをなさしめ、戰鬪酣なるに當り、同司令官の指揮に依り、部下を督勵し、七百の役夫を率ゐ、戰線に進む。交戦須臾、敵敗走するに當り、部下を整へ引揚げたり。間諜の言ふ所に依れば、同日敵軍の總員六千にして、朝(三)五百、高(五)五百、成(七)一千、馬(四)五百、揚(八)一千五百、砲二門あり。橋(三)騎將にして一千五百、内二百騎兵、診(四)五百人を率ゐたり。以上七將中驍勇の名あるは、胡橋の二將にして、即ち橋の軍一千、而して橋戰死以下死傷百一名なり。又團練會三千五百は、黎臺溝にありて、徐順之を統率し、未だ清軍の用をなさずと云ふとあり、以て其戰況の大體を知るべし。

十八日、海城方面に時々敵砲を聞くのみ、敵は我前哨線に來らざれば、城内の我兵は進發せざり

敵兵の進行運動

しかど、尙警急舎營の狀に在り、且前哨には、大隊を備へたり。十九日、敵砲北方に響く。士官の言に依れば、敵は今朝早く來り、双龍山を襲はんとせしも、其手の前哨中隊の整然たるを見て、忽ち退却したり。過刻の砲聲は、即ち此敵の發したりしものなりと。廿日午前、敵は牛莊街道より前進すとの報告あり。然れども、例の如く遠方村落を徘徊せしのみなり。

二十一日、敵兵は唐王山と、雙龍山とを占領して、明日海城をも乗取らんとて、例の方案を作れりとの通牒あり。双龍山と、唐王山と、南北の西端なるを見れば、謀略は一舉來らんとしてにや、城外西北隅に當る一村、羅家堡の西北なる驢軍場、沙河園兩村に至れば、既に遙に敵の砲煙を認めたり。此所は、今日我中央陣地たるを以て、桂師團長は、やがて司令部員を從へて出て來る。既にして臼砲も、例の陣地に就けり。尙前方甜水溝にありては、銃聲をも聞きぬ。此時味方は未だ散兵するに至らず、其銃聲は敵の艾塔堡子に來りしもの、頻りに小銃を放てるなりけり。甜水溝は双龍山を距ること約六七百米突、路は斜に敵を受く。山の絶頂に兩祠あり、一は自然石造にして、一は煉化石造なり。我將士先づ之に據り、巖角に身を隠して敵方を望見す、敵は艾塔堡子に隠れ、時々小銃を發射せり。暫くにして、石頭山なる敵砲二門は、前三里橋に進み來り、我陣地に向て發砲す。初めは彈丸高く山頂を越えて、斜に後方の立子村端に落ちしかど、漸くにして百

敵の彈道漸く正中

米突許宛近づき來りて、今や山頂に落ち掛らんとす。忽ちにして、敵彈我第一砲車の下に落ち、砲兵軍曹一人之が爲めに即死せり。他に尙負傷砲兵一人を出せり。既にして、敵は我砲彈に恐れて、深く芥塔堡子の村内に入込みて、更に出てす、唯西方より來りて、双龍山の遙前面を通過して、東方一帯山脈の下に入込みり。敵兵は無慮一萬許、騎兵あり砲兵あり、人々之を見て、歩兵勿論、此多衆の、恐らく山東を回りて蕎麥山の前面に來らざれば、必ず直ちに來りて、栃木城を衝かんものかと評し合へり。此日唐王山に向ひし敵兵は、藤甲山なる我兵と相會せり。茲に石橋子より歸れる佐藤大佐の枝隊と、兩面より夾撃して之を懲さんと、兼て待ち設けたりしを以て、敵の佐藤枝隊の南方より來るを見と均しく逃げ出しぬ。されば、此策終に行はれざりき。此日敵に與へし損害は、多く藤甲山の野砲と、双龍山の山砲の力なり。敵に二百の死者ありしと聞も、明かに之を確むるを得ず。前に東方の山路に入り込みたる敵兵は、果して栃木城に向ひたり。栃木城の我軍は、直に之を桂師團長に急報す。師團は乃ち夕刻援兵を急派したり。

此間の事情は、第一軍第三師團に對務せし某氏の書簡に詳なり。身其衝に當りし人の肺肝より出でたるものなれば、其文眞率喜ぶ可し。曰く、

〔前峯〕、我等出征軍士に於ては、國民の非常なる敵愾心と、我等兵士を犒はるゝの厚きとに

三師團某氏之戰況書信

は、誠に感銘致居候、夫れに付ても、誓つて國民の好意に背くならんことを、日夜相期し申居候。

我師團、當城占領以來、已に三ヶ月を経過仕候、日々寒威の凜乎たると、雪風の肌を裂くことに抗するのみにして、未だ一回も愉快なる戦闘らしき大活劇は無之、徒らに當城に冬籠致居候、併し斯く永く一地に止まりあるは、亦大に謀略のあることにして、而かも其計畫は、已に熟し候由に候へば、驚天動地の活劇を演ずるの期も、漸く近づき、快報の本邦に達するも、亦其内に可有之と存居候。

本月出會せし當地の敵情、大略左の如くに御座候。

二月六日、六聯隊歩兵中尉山縣駒喜氏は、我前哨線より、兵卒二十名を引率し、午前七時より、將校斥候として、小馬頭に至りしに、俄然敵兵四百名民家より現はれ出で、我斥候を圍み、亂發注射するも、山縣中尉の豪膽なる敵兵の數十倍なるをも、物の數ともせず、大刀を打揮ひて激戰數合、敵の數人を仆せしが、身も亦彈丸二個を受け、二名の部下と共に、空しく戰没の不幸を見る、他の兵は、辛うじて血路を開き、以て退却せり。今此豪膽なる一將校を失ひしは、實に痛悼に堪へざるのみならず、我一軍の爲めに大に惜むべし。部下の兵士は、言

山縣中尉
戦死

ふまでもなく、一軍皆其復讐を爲さんと、切齒扼腕、開戦の時を待ち構へ居れり。

同月十六日午前八時、健氣にも、敵兵二萬來り襲ふ。我中隊の急援に赴きし左翼前哨の唐王山方面は、徐邦道の率ゐる約ね六千人の兵、不相變業々數數百の旌旗を押立て、勢ひ張りて山下に逼迫せしも、第十八聯隊石田少佐の率ゐる三個中隊と、第六聯隊の第四中隊と、都合一個の大隊と、砲兵一中隊とを以て、之を撃退す。敵の死者十名、負傷必ず之に倍從せしならん。此役我兵即死一名のみ。分捕品、旗銃及彈藥等澤山ありし。右翼即ち第七聯隊の正面は、約ね一萬の敵に對せしも、二箇の歩兵大隊と一中隊との砲兵とを以て、之を撃退す。敵の死者約ね百四十、中央は第十九聯隊と、第六聯隊との方面へは、敵兵五六千人來りしも、先回に恐怖せしか、今回は毫も近接せず、只彼我の砲撃ありしのみ。此方面敵の死者三四十名ありし、此日我軍は、將校一名負傷下士以下死傷者二十名内外なり。此役捕虜二名あり。其捕虜の言に、吳大澂は、半莊に在り。其部下三四千人を率ゐる居ると。又昨年十一月以來山海關を経て、滿州應援に來りし清兵は、都合百營、人員五萬人、銃は何れも「モーゼル」銃にして、彈藥は各人二百發、依將軍の兵のみは百發を所持すと。同日敵は我前哨線の前面にあり諸村落まで退却せり。

吳大澂の
消息

二月廿一日午前八時、敵兵大約一萬七千、我前哨線の兩翼に來れり。中央にも四五千來りしが、敢て近かず。右翼及中央は、只砲戦に過ぎざりしも、左翼兵は、敵兵稍優等なる勢を以て、唐王山の左方へと、生意氣にも迂回運動を取り、我退路を遮斷せんとす。我方面の兵は、僅かに十六日の通り、第十八聯隊石田少佐の率ゐる三個中隊と、第六聯隊の一個中隊及、砲兵一中隊とは、歸來の命令を受けしが、其際唐王山方面に差掛り、殆ど右の來襲せる敵の側背に出で、猛烈なる射撃を行ひし爲め、敵兵狼狽遁ふ々々の體にて潰走せり。此方面には、敵の死骸八十、捕虜(傷者)二名、外に分捕品も多少ありたり。午後四時頃、各面の敵は、前日來宿せる柳公屯、大小馬頭三四臺子等の各村落へ退却せり。

此日敵の來襲せし目的は、彼れの事とて、那邊にゐるやは詳ならざるも、前日我間諜の言によれば、敵は唐王山、藤甲山を奪略せんと云ひ居れり。思ふに當日我右翼に向て劇烈なる砲撃を加へ、前進の狀を示し、我兵を此方面に集め、其處に乗じ、我の中間を突き、諸山を占領せんと計りしならん。然れども、我は如何でか斯かる拙策に陥らんや、彼等は嚴格なる我配備を見て、藤甲山附近に集まりし二三千人の敵は、僅か計りの砲撃をなせしのみ、其意氣地なきは、例の如くにして、近接して一發の小銃をも打ち得ず。千二三百米突の村落より、

一步も踏み出す氣力なく午後四時過ぎ、何ごともなく孤鼠々々として退却せり。藤甲山にある我野砲隊は、之を見て戯れ半分に榴霰彈をわびせかけしにより、敵は命からしく支離滅裂して退去せり。

是より先き、敵は一千人許り橋木城を襲ひしも、第十九聯隊の林少佐の一大隊にて、苦もなぐ之を撃退す。其遼陽方面より大舉して、同城を攻撃せんとする情報ありたれば、當城より第六聯隊、第二大隊騎砲、各若干を附して、昨夜(二十二日)八時急に出發せり。

牛莊及、遼陽、營口の間には、敵兵五六萬人は居るならんと噂せり。我々對する敵は、少くも三萬に下らず、彼等は人員の多きを頼み、我前哨線前の諸村落を、毎日馳け回り兵五六員に砲二門位を備へ、恰も示威運動の如き、兒戲をなし居れり。甚だしき時は、二三千人位密集して、餌食を得られぬ、盜猫瘦犬と同じく、彼所此所へまごつき居れり。斯かる運動は、是の目的に出づるものか、更に解し難し。

昨年十二月十九日、缸瓦寨の逆襲より、一月十七日、廿三日、本月十六日、廿一日、都合五回御苦勞にも亦殊勝にも慈姑様の頭数を頼みに押し寄來るも、毎に大敗し、夫にも懲りず、我前哨線附近に迂回突回る清兵の無感覺なるには、呆然たるの外なし。去りながら、所謂兵驕る

ものは敗るとあれば、我とて多少彼に對する警戒も成さねばならず、誠に蒼蠅拂へども去り難く、起ちて陣頭に彼等の生肝を潰して遣るも、間近の内にあるならんと、軍中皆勇み切りて相待居候、

氣候は、先月末より猶暖氣の様に覺えり。殊に本月九日より五日間程は、珍らしき日和にて、晝夜少しも凍氷することなかりしが、其後又俄かに寒威相加り來り、一昨夜より今朝へかけ降雪積みて四五寸、前日より降積りし雪を混じて、概ね一尺位の嵩みなり。十二月一日來の寒氣に、兵卒は前哨勤務中、目も鼻も口も開けられぬ有様、其困難は言語の及ぶ處にあらず、誠に内地に在りて聞くときは、法螺の様なれども、例へば髻の外套襟に凍り着き、之を取るの難きこと、驚くに堪ふ。又面白きは、馬の足下凍結せし氷柱は、歩む毎にがら〜がちがちと、誠に勇ましき音を放ち申候。

只困るは、敵の警戒上より、毎日朝晝の二食は、不時の辨當として『ガメートル』に詰り置き、氷飯を食すること、毎朝五時前後には、出發なし得る準備に忙はしく、商賈で申せば、店の繁昌すること故、困る處ではなし、誠に難有存じ候。

衣服は充分にして、官給と國民の寄贈とに係る手拭、煙草等は、各自持ち切れざる程給與あり

馬脚下の氷柱

り、巻煙草の如きは、一人にて、殆んど五六百本をも有せり。巻煙草大盡と云ふも可なり。恩賜の巻煙草は二回賜はり、皇后陛下より眞綿を賜はる。全軍皆 皇恩の洪大無窮なるに感激罷在候。

當時は、人夫に至るも、何にも不自由を感せず勤め居り候間、御安心可被下候。當地には、過般來本願寺派、淨土宗派あり。布教、或は征軍慰問として、三四名の僧侶出張し、戦死者の葬祭等に力を盡せり。又各部隊交互に、二回宛佛教演説有之候。

當城の各營兵は、寸時も早く奉天、或は北京方向に進撃せんと、鬱勃に堪へず候。

廿八年二月廿三日

大日本占領地海城に於て 某 再拜

先是本月初旬、田庄蒸及び、營口方面の敵兵は、我第二軍守る所の蓋平城を攻撃して、之が恢復を謀らんとすとの報告は、海城に達せり。因りて第三師團長は、同五日に、佐藤大佐をして赴援せしめんとし、之に第六聯隊の小野寺大隊及び、第十八聯隊の牛島大隊を附して發せしむ。其後に至り、更に橋本城より門司大隊を大石橋に派遣して之に合せしめたり。佐藤大佐は、初日に坡廠八里河子に赴きたるとき、敵は却て海城を攻撃せんとするの報に接し、其夜は同地に一泊して、翌日鉦瓦寨に至り、更に轉じて大石橋に赴き、其附近を固めて、十九日まで同地にありしに、同日

敵軍蓋平を攻撃せんとする報來る

海城に於ける追

第一師團長は、西旅團長と共に、葦平まで進軍せしを以て、同日大石橋を發し、二十一日は海城に歸り來れり。翌二十二日午後は、我軍葦平山の絶頂に於て、我戦死者の追出會を行ふ。雪花繽紛百米突の外を辨せず、爲に我海城軍を擧げて、此法會に列せしむること能はざりき。然れども、桂師團長以下數十名の將校と、數百名の下士卒とは、之に來會しつ。此法會を執行したる者は、即ち前記の各宗派出員にして、淨土宗の荻原雲臺、岩井智海、眞言宗本派の香川默識、木山定生、東派の伊藤大惠、秦敷江、曹洞宗の坂上宗詮、日吉全識、天台宗の林賀覺定、眞言宗の山縣玄洋、岩佐某等にして、皆布教、或は慰問の爲めに來りし人となり。

是時に當て、營口の敵亦來り、頻りに我第二軍の城守する葦平を伺ふ。葦平より大石橋を経て、海城に至る道路の東南は、一面に山地なるも、其西北は渺茫たる大平原にして、其間只一山の突起を見るのみ、山は即ち太平山なり。敵は既に此山を占領して、今や熾に攻勢を張る。初め海城の警報第二軍に達するや、一月十七日、第二軍乃木旅團は、其部下に令して曰く、在海城桂師團よりの電報に據るに、敵は本日遼陽、普賴屯、中庄の諸方面より同城に向て攻撃し來るとあり。最も營口方面の敵狀に就ては、敢へて變る所なし。是に於て諸隊は其夜に出發の準備を急ぎ、翌十八日午前七時、葦平城の東北に集合し、隊列を整へ、徐々として間道〔本街道の東方〕より進む。

乃木師團の命令

即ち此日の前衛は、第一聯隊第一大隊、第三大隊砲兵第二大隊及び、工兵一中隊より成り、乃木少將自ら之を率ゐ、隱岐大佐之が指揮官たり。又秋山騎兵少佐は、獨立騎兵一大隊を率ゐ、營口本街道を前進し、敵狀を偵察して七里溝に至り、太平山の北方に於て、本隊と合す。歩兵十五聯隊第一大隊長齋藤少佐は、部下一隊の兵を率ゐて、既に大石橋に在りしが、此日同地に一小隊を残し、午前八時其宿營地を發して、七里溝に至り、同じく本隊と會せり。又豫て海山架附近に駐在して、營口街道を扼したる第十五聯隊長河野大佐は、第二、第三の二個大隊を率ゐ、本隊と同時に宿營地を發し、本街道を直進し、七里溝に至りて齋藤少佐の隊を收め、自己の聯隊を形成して、以て本隊の命令を待つ。午後四時頃に至り、其目的地たる大平山下の村落に着す。乃木少將は、此夜本隊、即ち第一聯隊、砲兵第二大隊、工兵中隊、衛生隊及び其他の諸部隊を纏て、同地に村落露營に就く。獨立騎兵及び第十五聯隊は、七里溝及び三敷子に宿營し、何れも二道河子方向に對して警戒線を張り、共に敵狀并に斥候の報告を待ちけるに、午後七時頃に至り、一片の報告飛び來る。曰く、敵は韓家學房より白廟子、大水塘及び、五臺子に亘る一帶の線路を守備し、我軍の至るを待つ者の如し。是に於て、乃木旅團長は、夜の第九時、第一第十五の兩聯隊長に對して命令せり。一に曰く旅團は、明日先づ此地にありて敵狀を偵察せんとす。二に曰く、騎兵大隊は、明日

後家油房及び、高判方面の敵状を搜索すべし。又其一小隊は、大石橋を経て海城方面に派遣し、第一軍に對する敵状を搜索せしむべし。三に曰く、第十五聯隊よりは、二中隊を出して、韓家學房附近の敵状を、第一聯隊よりは、同じく二中隊を出して、大水塘及び、其西方の敵状を搜索すべし。四に曰く、各隊は明日六時三十分宿營地を出で、出發の準備をなすべしと。營口方面の敵状已に斯の如くなりしかば、此夜は敵兵の襲撃を慮り、すはと云は、直に切て出づるの準備をなし、以て十九日の曉を迎へたり。同拂曉、各隊は篝火の下に結束して、何れも其宿營を出で、太平山下西南の畑地に休憩して、進軍號令の下るを俟つ。又乃木少將は、同山麓の一軒家に、隱岐聯隊長を始め、竹中・香川・今村・松本の四少佐及び、各大隊副官等を集めて、軍議を凝らし、且つ諸道に派遣せし斥候報告の來るを待てり。午前十一時三十分頃、在海城桂師團長より忽然一片の電音は傳はりぬ。曰く去る十七日、我軍隊の守備せる海城に向て、襲撃し來りたる敵兵は、同日午後全く撃退したりと。又此時斥候隊が齎らし來りたる土人の言なりと云ふを聞くに、曰く、宋慶は十八營の兵を率ゐ、營口及び後家油房一帶の地に、又張振臺は八營の兵を率ゐ、白廟子附近一帶の地に屯營し、蔣某は三營の兵を率ゐ、營口附近に出沒して、日本軍の動靜を偵察しつゝあり、其他田庄臺に入營と、其附近に洋式の訓練を受けたる兵若干あり。但現今清兵の重なる勢

太平山下
に陣する
乃木旅團

方は、白廟子に在るもの、如しと。以上の諸報告に接するや、乃木少將は隱岐大佐と商議の上、正午十二時を以て一命令を出せり。一に曰く、本旅團は、朱家甸子より前嶋虹嘴の間に停止して、牽制の任務を繼續せんとす。二に曰く、第十五聯隊の一個大隊(齋藤少佐之を率ゐ)は、破橋子及び、其近傍に屯し、營口方面に對し警戒をなすべし。三に曰く特に一部隊(騎兵一小隊を附す)を南太平山に置き、且つ大石橋の我派遣隊と交通すべし。四に曰く、第一聯隊より一部隊を藍旗廠附近に派遣し、營口街道を警戒せしめ、他の諸隊即ち歩兵第十五聯隊(一大隊を欠く)、騎兵大隊は、白露堡・破橋子・三家子・朱家甸子に、混成旅團司令部歩兵第一聯隊・砲兵大隊・工兵中隊、其餘の諸部隊は、前後嶋虹嘴・飛雲寨・青岑市及び、其西部に在るべしと。かくて各部隊の場所は定まれり。是より先き、即ち同十八日拂曉、第一師團附參謀内山砲兵中佐は、第二軍混成旅團の命を仰みて海城に赴き、桂師團長に面し、親しく照會の事あり、其議の要点を洩れ聞くに、乃木混成旅團は、元來第三師團の沮礙物たる蓋平の敵を撃退するの任務を帯びて來りし者故、其營口并に其他に進軍するは、素より其命令以外にあり。協心戮力以て目前の敵を攻伐するも、亦敢へて辭せざる所なりと雖も、混成旅團は、遅くも二月十日頃まで、一旦金州に引揚げざるを得ざるの事情ありき。されば營口を乗取り、田庄臺を攻落するの曉、第三師團自ら同方面に守備隊

第一軍と第二軍と相互に聲援す

を置き、以て北方を塞塞するの覺悟ありや否や、倘し我旅團をして、却て此守備に充てらるゝが如き意見わらんか、是俄に手を下し難しと云ふありしが如し。既にして大平山下の混成旅團は、今や蓋平を去る五里半、營口に至る約三里の地に在るのみならず、前記の如く已に部署命令の下りし上は、何時まで斯くてあるべきにあらざれば、即ち十九日の午後一時頃より、前日行進し來りし沿道より一齊に背進運動を始め、(隱岐大佐は、合營地司令官となり、川崎副官を隨へて、一鞭直ちに右の諸村落に先着し、各部隊の合營に充つべき家屋を撰定す。)四里強の雪路を急行し、漸くにして點燈の交、各其指定地に到着したり。(混成旅團司令部及第一聯隊本部は、共に飛雲寨に在り。)斯くの如く、當時第一軍と、第二軍とは相互に聲援を假しつゝ、ありしなり。抑も此背進運動たるや、乃木旅團長の深き軍略に出でしものにて、今回の舉は固より山地師團長の命令にも非らず、又桂師團長の依頼ありしにもあらず、只敵兵我海城を興ふの急報に接せしを以て旅團長は即ち其手兵を營口方面に出たし、以て大に敵の手足を牽制せしに止まるのみ。言を換へて之を云へば、敵に後顧の虞を興へて、我海城に對する、彼れが襲撃の勢を殺がんとするにありき。故に其出陣は、最初より本道を取らず、又捷路にも依らず、其中央に横はれる一の間道より進みたり。其意蓋海城に應援するが如く、又營口を攻撃するが如くに見せ懸け、彼に進退を

敵の進退を迷はしむる計策

迷はしめ、其機に乗じて一舉之を蹂躪せんとせし計略なりしと云ふ。然るに、敵は既に桂師團の撃破する所となり、早くも北方に退却せしなれば、敢へて故らに危険を踐んで進軍し、若くは敵の戦線に接して、宿營するの必要を認めず。されば、かくの如く背進運動をば取りしものなりとぞ。然れども、敵は我第一第二の兩軍が、兎角依違として、海城、栃木并に蓋平城を固守して進まざるを見るや、數々挑撥跋扈の狀を呈し、我背進を機として、二月中旬前後に至り、更に太平山を占領して、暗に虚勢を張る。是に於てか、乃木混成旅團は、再び飛雲寨より、山地中將は新に金州を出馬して、共に營口方面に向ふ。而して此行第一師團獨立して、戦を開くべきか、將又第一軍第三師團と連合の方針を取るべきか、是蓋し兩軍の打合せを要すべき問題なり。即ち二月廿一日を以て、山地中將は蓋平より、桂中將は海城より、共に一二の參謀及び、若干の騎兵を率ゐて、舩渡州街道なる湯池に會合し、夜更くるまで軍議を凝らし、翌廿二日の天明、馬首を東西に分ち、各其宿營地に向て歸る。此大軍議果して如何なる形を以て發現せられたるか、廿四日第一師團は、進んで敵を太平山に撃破し、其地を奪へり。即ち前の交渉は如斯運動とはなりき。同日又我第一軍は、敵の尙は栃木城附近に彷徨するものを攘斥して、同城を距る東北約七里の地に至る。敵の兵力約三營にして、屍體十三を戰場に遺し、其主力は北方指して逃れたり。而して

第一軍の運動

第二軍の運動

第一第二兩軍の大軍議

我軍の進行

海城附近の敵情は、依然尙前日の如し。宋慶の徒、我軍の久しく動かざるを見るや、謂らく海城の重圍の中にありて然るなりと。是を以て到底行はるべからざるの愚策を墨守し、漫りに我に迫り、兎角此方面に戀々せり。我軍智勇の將、雲の如く精銳の士、林の如く南北に雄視しつゝ、九旬餘の日子を冬營然として、徒過するの大理由あるを知らざるは愚なり。今や我南北二軍の議は決定し、此九旬餘の潛勢力は、將に爆發せんとす。即ち第二軍は營口に向て歩を進めたり。而して太平山の敵は、既に破られぬ。第一軍も亦二十八日、其先頭隊たる第三師團は、先づ進撃の手始めとして、前面の敵を蹂躪せんとす。同日拂曉を以て海城を進發し、右側枝隊は、内藤少佐之を引率し、夜の全く明け離れざるを期して、射撃を堅く禁じ、銃鎗突貫を以て、我双龍山に對する敵の、石頭山の砲陣を占領して、攻撃隊の援護となり、攻撃隊は大島少將之を統べ、海城の正面に當る沙河沿と、長虎臺とを占領し、大迫少將の五旅團は、殊に我左翼に在りて大富屯の敵に當ることに決したり。而して攻撃隊及び、大迫旅團の敵は、稍々手強く應戦したるも、遂に守りを失ひ、退却したるを以て、第五旅團の一部隊は、攻撃隊と共に沙河沿より、長虎臺に迫りけるに、敵は又も遼陽方面を指して落ち行きぬ。午後桂師團長は、參謀及び副官を従へ、馬を進めて長虎臺に立てけるが、砲銃の聲絶え、諸隊の敵を追撃する頃、馬を旋らして内藤少佐の占領したる石

東煙臺の取

頭山に赴けり。夜に入りて、師團司令部は、頭河堡子に營舎し、五旅團は双臺子街道に一泊し、大島少將の六旅團は、長虎山より逃ぐる敵を追撃して、東煙臺に於て之に追ひ付き、砲彈十餘發を放ちて之を占領し、其地に宿營せり。東煙臺は海城より遼陽に出づる第一程にして、海城を距る約我二里なり。此役我軍の死者十名、傷者八十名、内將校一名、敵の死屍約百五十を見る。戰團の目的は、遼陽街道より、牛莊街道に連絡したる敵勢を兩斷するに在りて、其計畫は十二分の結果を奏したり。

乾線堡の敵逆襲す

茲に月改りて、三月一日、我先鋒軍たる第六旅團は、雪を冒し、第三師團に先ちて遼陽街道を猛進す。東煙臺を出で、半里程も進むや、前方に銃聲を聞く、數十發、然れども飛雪溟溟として、敵の所在を知らず。乾線堡に近くに及で、敵兵七八百、村端の土壁に據りて、我に逆襲を加ふ。我は乃ち道の左側に放列を布き、村端の土壁を目標として榴彈を放つ。飛彈十餘發、敵は堡障を棄て、後方に退却せり。我將士の敵に向ふや、毎に愁色あるが如し、愁ふる所、何事ぞや、即ち敵の走るに勇なるを病むなり。既に乾線堡に至れば、村舎一空、唯、柴狗の聲を再に吠ゆるを見る。出で、前方を眺むれば、敵は鞍山站と、乾線堡との間に分屯し、北山外二山の山嶺に密集して、遙かに我軍を瞰下せり。桂師團長は、大島旅團・大迫旅團・開院宮殿下及び、參謀副官等を従へて、村

電信隊の功

外の路傍に出で、野津司令官と共に、敵狀を察す。夕陽に至るも、北山其他の山嶺に蟻附して去るの色なし。此日第十九聯隊の二大隊は、乾線堡より湯河（前方半里程に在り。）を経て、尙二三百米突の前方なる湯兒河に進む二大隊は、即ち當日の我前兵なり、初め此隊の湯河に至るや、村内に五六百の敵ありて、我に射撃を試む。我は僅に二中隊を展開せし間に敵は早奔散せり。而して逃げ後れたる敵は、北山に續きたる一の山嶺に密集し、我兵の湯河と、湯兒河との間を往來するもの、二人或は三人を見れば、必ず砲彈を放ちて之を妨ぐ、所謂雞を割くに牛刀を用ふるの類なり。而して我死傷は五名に上らず、我第三師團司令部及び、軍司令部は、乾線堡に合營す。二日乾線堡より湯河に進む途中に於て、我電信隊の電信架設に従事するを見る。素より電信隊は、戰團員にあらざれども、數百里の戰團區域なる我軍隊をして、何時にても緩急相應するを得せしむるもの、其功決して輕からず。其工事の迅速なるや、師團司令部の未だ進まざるに、電信隊は早くも海城より架設し來りて、約我四里餘の地に在りき。其架設の方法は、先づ電線を巻き詰めたる管二臺を駄馬に載せ、馬の歩むに隨て、自ら管を離る、様に仕掛けたりしものにして、一管の線は、百三十米突、即ち我一町餘に布くを得べし。通常軍用に供する電信は、山澤は只、土地に垂たる計にして可なるものあれども、若し電線の宜しからざるか、或は積雪の障礙あるとき

は、已むを得ず、高粱の莖幹、或は楊柳の枝を以て、線をばもり揚げざるべからず。故に通常我六里間の延線は、容易の業なるも、今や障礙の多き土地に遭遇したる爲め、漸く四里の延線を作るに過ぎずと云ふ。此談話は、當電信隊長吉田大尉の言に係り、大尉の部下は、輪卒を合して百十七名と聞ゆたり。

鞍山站

さて北山其他の山嶺に密集したる敵の大部隊は、昨夜已に悉く退却したり。湯兒河より約二里劉家臺に入る、戸數、百に充たず。是より前方約半里程、左右二山、路を擁す。所謂鞍山站は、即ち此兩山の間にあり、市街戸數五六百、嘗て敵は鞍山の地勢を利用して之に據りと聞きしが、至れば即ち此事なし。蓋同地は城門の左方山脚遠く亘りて、兵を配するに足るも、僅々二大隊の兵を散布するに足らず。是れ敵の棄て、守らざる所以なり。此日第五師團は、奥中將之を統べ、二月廿六日鳳凰城を發し、小燕溝、立道横子、赫家堡子、黃花甸を經、三家子の小敵を攘ひ、右折して山道谿路に入り、而して此日を以て鞍山站の附近、東岡子に來り、先頭は我第三師團の行進を目指すや、馬を早めて飛び來り、大聲を放て第五師團聯絡を叫べり。我軍一舉、敵は悉く遁逃して、遼陽若しくは牛莊に走る。是に於て牛莊城を除くの外、鳳凰城及び、鞍山站以東滿州の地、皆我占領に歸したり。

鞍山站以東皆占領す

第二十二 牛莊城の大進撃

今や我第三師團は、柞木城に歩兵一中隊(一小隊を欠く)を、小孤山に同一小隊を、海城に歩兵一聯隊(一大隊欠く)、騎兵一小隊、山砲一中隊及び、臼砲七門、分捕砲二門を駐め、又第五師團は、岫巖に歩兵一中隊及び、第三野戰病院半部を、九連城に歩兵一大隊を、鳳凰城に歩兵四大隊、騎兵一小隊、山砲一小隊、工兵一中隊并に、第三野戰病院半部を、其他香爐庄、湯山城、高麗城等に守備兵を遣すの外、餘は悉く振旅して前進す。是より先き第五師團は久しく九連城に駐在して、頗る無事に苦のり。二月十七日其司令部は、突然鳳凰城に進む。次で湯山城なる奥山大隊も、亦北進の途に就けり。是時に當て、南北の我兩軍、皆運動を始む。將士等命を聽て、躍然躍起す。而も未だ其向ふ所を知らざるなり。二月十九日、歩兵第廿二聯隊は、隊伍整を鳳凰城を出づ。時に午前十二時に垂んとす。立見少將馬を頭臺子に立て、送る。午後四時西臺子に着す、翌廿日全軍雪を蹴り進み、午後五時幸じて、康家堡子に入る。此日沙子崗を過ぐる比ひ、騎卒嶮崖を指して曰く、驍角猛虎の足跡を印するもの朝々、此邊、或は虎穴あらんと。以て其深遂險難の状を見るべし。廿一日、康家堡子を出で、新關嶺の坂路を過ぐる頃、小銃の音は、遙に後方に響けり。是今朝

鳳凰城に
向

第廿二聯
隊鳳凰城
を起つ

我側面行進を掩護するの目的を以て、康家堡子西方の三叉路より四門子に向ひたりし騎兵中隊の、敵に觸接して戰鬪を交ふるならんと。既にして聞く奥山少佐の半大隊は四門子なる敵方に向て背進し、小黃溝附近にありて、本隊の側面行進を掩護しつゝありと。即ち一場の小枝隊戦のみ、此日一直線に横道河子まで進み、廿二日行程三里、老爺廟に着せり。翌くれば二十三日、鳳凰城及び岫巖より來る各種の兵の、黃花甸に會合すべき時期あり。此日雪深きこと數寸、北風之を鼓して斜に飛ぶ。既に黃花甸に至れば、岫巖よりせし武田大佐の歩兵二個大隊及び、四宮少佐の砲兵隊も、亦相前後して黃花甸に入る。是に於て第五師團の戰鬪部隊は、悉く當地附近に集合せり。即ち

第五師團
の戰鬪部
隊悉く黃
花甸に集

- | | | | |
|------------------|-----|----|----|
| 第五師團司令部及び屬部 | 司令官 | 奥 | 中將 |
| 歩兵第九旅團司令部 | 司令官 | 大島 | 少將 |
| 歩兵第十一聯隊本部 | 大隊長 | 仙波 | 少佐 |
| 歩兵第十一聯隊の第一大隊 | | | |
| 歩兵第廿一聯隊本部 | 聯隊長 | 武田 | 大佐 |
| 歩兵第廿一聯隊全部(一中隊欠く) | | | |

- 歩兵第廿二聯隊本部 聯隊長 富岡中佐
- 歩兵第廿二聯隊(三大隊を欠く)
- 騎兵第五大隊本部 大隊長 木村少佐
- 騎兵第五大隊(二小隊を欠く)
- 砲兵第五聯隊本部 聯隊長 柴田中佐
- 砲兵第五聯隊(第三大隊を欠く)
- 工兵第五大隊本部 大隊長 馬場少佐
- 工兵第五大隊の第一中隊
- 各縦列及び衛生隊病院

第廿一聯隊黃花甸を發す
我先頭騎兵隊に遇ふ

二月廿四日、第五師團は、歩兵第廿一聯隊の二個大隊及び、砲兵第一大隊を前衛として、午前九時黃花甸を發す。武田大佐之が前衛司令たり。師團の縦長は四列行進を以てするも、殆ど里許に達すべきに、此間山峽の難路、全く積雪を以て蔽はれければ、一列行進すら、尙且つ容易ならず、高地に上りて、遙に後方を望めば、樵路蜿蜒たる所、隊伍も亦蛇行す。蛇行連續するもの數里、渺として際涯なきが如し。既にして、銃聲前方に起る。是我騎兵大隊が、龍頭寨に於て敵の伏兵に

龍頭寨の敵敗北す

陥りたるなり。之を騎兵士官に聞くに、當時騎兵の先頭が、龍頭寨に向ひたる頃は、敵兵閃爍として、毫も發火せざりしが、其後尾隊が、集團家屋に入らんとするの一刹那、敵は不意に其背後の山頂に現はれ、急射撃を以て、我に迫れり。爲に斃るゝもの、馬匹數頭、騎兵は一時敵の包圍中に陥りぬ。然れども、勇悍なる我騎兵は、如何でか屈すべき、徒歩之に應戦せしに、間もなく我前衛歩兵が、敵の側面高地に現はるゝや、彼遂に支ふること能はず、三家子指して敗北せり。我前衛之を追うて三家子に至り、同夜は其前方を警戒しつゝ、同地附近に村落露營せり。當日の敵兵は、其數四百餘名なりと云ふ。而して師團は、龍頭寨に一夜を明かしぬ。翌廿五日、師團の後尾部隊たる仙波大隊は、前衛前兵に代りて、摩天嶺方面の敗兵を制肘し、前衛及び本隊は、依然として側面行をなせり。當夜富岡中佐は、九溝峪の民舎に宿營す。二十六日の行軍は、軍の右側枝隊たる、第五師團に於て、最も困難を極めたり。我前衛部隊が、人面山の西麓を過ぎ潘家堡子北方の坂路を攀ぢんとするや、敵兵數百名、山の中腹に現はれて、我兵を狙撃せり。我騎兵大隊及び、前衛前兵は之を蹴散して興隆勾に至りて此地に前哨を配布せり。當日師團は興隆勾を以て、其宿營地と豫定したりしに、偶然にも戰鬪は此に開ければ、宿營の配當は、一切之を改定せざるを得ず。然るに人面山附近は、僅に數棟の獨立家屋の存するのみにして、到底大部隊の宿營

を許さず、因りて師團の大部隊は、東大嶺を越えて、柞木城の道路上なる、柳子峪、黒峪等に之を
 求むるの已を得ざるに至れり。時に暮雲東大嶺を鎖して、四面暗濛たりき。二十七日、我前衛は
 興隆句を發し、吉洞峪を過ぎて、前哨警戒線を其前方に張り、師團本隊は柳子峪より間道を経て、
 白菜嶺を越え、吉洞峪附近に宿營す。白菜嶺は、羊腸の鳥路、雲を攀ぢて躋る、中に三個の土窟あり。
 是れ即ち清兵が急造せし哨兵小屋なり、此土窟より遙に山麓を望めば、柞木城街道一帯の中
 中にあり。哨兵小屋の位置としては、甚だ適當の地點たるを覺ゆと云ふ。翌二十八日も、例に依
 て降雪霏々、所謂人は鶴裘を衣て立ちて、徘徊するの光景あり。吉洞峪を出で、隆昌州に至り、
 將に什司縣に入らんとするや、一隊の騎兵は、雪を蹴て北より來る。而して之に長たる者は、甘
 露寺中尉なり、曰く、敵は把會寨及び、其附近の高地を占領して、我小隊を狙撃せり。土人の言に
 依るに、其數殆ど二千に達すと。此時我騎兵大隊及び、前衛諸隊は、已に什司縣に向ひ去後なれ
 ば、與中將は此報に接して、更に新前衛を組織し、富岡中佐を以て之が司令官となし、入江大尉の
 山砲兵一中隊、甘露寺中尉の騎兵一小隊をして、之に附屬せしめ、直に把會寨の敵に當らしむ。
 富岡中佐乃ち進で金廠に達せし比、又中尉の報告あり。曰く、敵は已に八般嶺方向に退却せり
 と。是に於て此手及本隊は、同夜金廠里に合營せり。

把會寨附近の敵情

八般嶺頂の敵射撃を聞く

古廟嶺山に小戦を開く

三月一日、金廠里を發し、把會寨を経て、八般嶺に向ふ。既にして我騎兵小隊の嶺麓に達するや、
 敵兵數百嶺頂を占領して射撃を開始し、小戦闘は此溪谷中に始まりぬ。敵は例の檜槍及び、克虜
 伯山砲を發して、頻りに我を襲撃したれども、元と是れ潢池の兒戲のみ。如何ぞ能く我を沮せん
 や、前衛前兵は、直に之を逐ひ散らして、其數名を斃し、檜槍十數挺、榴彈五十餘個を奪へり。既
 にして、轉じて廟嶺に向ふ。恰も好し、此際我騎兵大隊も亦來り會せり。是に於てか、第二の小
 戦闘は廟嶺山腹に於て開かれたり。此所尖山二座、砲臺として勁松天を摩し、鞍部低き所、蟻道迂
 曲するもの三十六回、嶺頭一碑あり。記して古廟兒嶺善嶺碑記と曰ふ。即ち知る左右の兩山は、
 是れ兒嶺及び善嶺なることを。而して、其廟の何神たるを知らずと雖も、定めし古事來歴あるな
 らん。蓋し廟嶺の名之に原す。敵は其勢數百、例の二人持の檜槍を携へて嶺上にあり。彼等ハ
 我騎兵を見るや、一時に火蓋を切る。然れども、花火煙硝と均しき、彼等が緩慢なる射撃は、到底
 我速射の敵にわらず、剩へ彼れが檜槍は、照星も照尺もあることなし。斯くの如きものを、我に
 擬す、其中らぬこと常然なれ。左れば我前兵は、苦もあく之を撃退して、下石橋子に至る。
 廟嶺より以西、土地開豁、一望千里、是に至りて雪海始めて廣し。此日前兵の爲に捕はれし敵の
 言に據れば、廟嶺を守し敵は、其以前興隆句を占領せし敗兵等にして、程、劉の二將之を率ゐたり

敵の嶺を逃ぐ

しが、把會塞を退くに及び、八般嶺と、廟嶺との二方に分れたり。當初は其兵數一千なりしと。此言の實否之を確むるに由なしと雖も、其戰場に放棄しありし糧槍の數より推すとせば、必ず兩嶺共に三四百名には下らざるべしと云ふ。

軍令

翌けて二日、軍中令あり。海城なる我第三師團は、軍の第二縱隊となりて、本日鞍山站の敵を攻撃すべし。第五師團は、軍の第一縱隊となり、同地に向て出發すべしと。而して此行第三師團の運動は、既前記の如し。かくて第五師團の前衛、早くも長嶺子を超ゆれば、恰も搜索騎兵の齎らしたる報告に接す。曰く鞍山站には、一の敵影なく、軍の騎兵は、已に事なく同地を占領したりと。我將士相見て茫然たり。此夜軍司令部は、湯崗子に、第三師團は鞍山站附近に、又第五師團は、湯崗子附近に宿營せり。鞍山站は、海城、遼陽間の一大村落にして、曩に遼陽なる敵の來り集團せし中心に當れり。是に於て人々皆疑へり。鞍山站既に我手に入る、即ち是より軍は北して、遼陽を衝かんか、將又南して牛莊城に向はんか、未だ軍の畫策する所を知らざるなり。

我軍の向ふ所

第一軍牛莊進向を令す

二日夜半、忽ち令あり。曰く、我第一軍は、明三日拂曉を以て、各其營を徹し、牛莊城に向て進發すべしと。衆始めて其方向を知る。是時に當て、牛莊の敵劉・徐・魏等の諸將、兵勇萬餘を以て、我を防禦せんとす。其快戰の狀、以て想ふべきなり、是に於て野津第一軍司令官は、第三師團を

して、宿營地より耿庄子を過ぎ、第五師團をして、北龍塞を経て、南北相並で西向せしむ。因て第三師團は、前日までの部署を變じ、左側枝隊として小鐘屯を過ぎ、金家臺に至りし大迫少將の部隊は、之を前衛として、三日午前六時金家臺を發し、普賴屯を過ぎて、古城子に至らしめ、又前に前衛及び、本隊たりし大島少將の部隊は、之を本隊と改めて、師團に直屬し、同日午前七時將軍屯を發して、耿庄子に進ましめ、第十九聯隊よりは、林大隊を割き、之を右側枝隊とあしつゝ、我左側には、第五師團の在るなれば、特に枝隊を置かざるも、別に鞍山站枝隊(第七聯隊の富永大隊)安山子枝隊(第十九聯隊の小原大隊)を設けて、一は之を鞍山站に留め、一は之を安山子に遣して、相共に遼陽方面を警戒せしむ。然れども此警戒たるや、單に一旦遼陽方向に退きたりし敵の、若し我軍馬首を西向すと聞き、牛莊攻撃の前日まで、復び出で來らんかの萬一に備ふるのみ。故を以て此兩枝隊は、牛莊攻撃の當日に至らば、各其地を撤して、鞍山站枝隊は海城に、安山子枝隊は牛莊に向ふべしと定められたり。而して此日第三師團は、午後耿庄子に着す。かくて第五師團は、三日湯崗子より牛莊に至る本街道より、左方に當る道路の、第三師團と相並び、一軍二縱隊となりて目的地向ふ。第五師團は、歩兵第廿一聯隊の第一第三大隊、騎兵一小隊、山砲兵一中隊を以て其前衛となし、大島第九旅團長之が前衛司令たり。騎兵大隊は、獨立して遠く搜索の

牛莊に於ける我攻め防全く備ふ

任に當り、本隊は歩兵第廿二聯隊の第一第二大隊、歩兵第廿一聯隊の第二大隊、歩兵第十一聯隊の第一大隊、山砲兵一大隊、野砲兵隊一中隊、工兵一中隊を以て之を組織し、奥中將自ら之を率ゐ、午前第七時を以て、其合營地を出發し、同夜は牛莊城を距る四十五清里なる崔家庄附近に合營せり。是に於て我攻勢全く成り、牛莊城の安危は、愈明日の中に迫りぬ。

明ければ、三月四日、勇に勇んで、第三師團は牛莊の西北に、第五師團は其東北に向ふ。桂師團長は、佐藤聯隊を北方に、大島(久直)旅團を其西に配備したり。此日の前衛、即ち佐藤聯隊は、大迫少將に指揮せられて、午前七時古城子を發し、別道より進み、耿庄子より來れる師團本部と會合せり。柴田砲兵大佐は、邢家窩坊より牛莊の北口に達する、凹道の兩側に放列を布く。各六頭の馬に輓せたる野砲十有二門は、勢鋭く突進して、三尺以上の高土にも一躍して凹道より引上げられ、馬背に駄せられたる山砲十有二門も、續々躍出し、凹道の右側に十二門、又其左側に十二門、各二十米突の間隔を取て並び、而して彈車は、左側に縦隊に分列したり。忽ち「榴彈砲めよ二千米突」の令の下より、手を揚ぐる砲手、中隊長は、第一砲車と呼び、「打て」と叫ぶと同時に、丸は早や空に飛び、敵陣の邊に向て墮落せり。時に正午頃なり。此砲隊砲車を引て、邢家窩坊の村端を出でしより、此に至る其間僅に五分時に滿たず。聯隊長、尙且其速々を責む。されば、砲手は互

忽ち號令あり

敵軍用手段を止む

に迅速を競ひつゝ、籠ては放ち、放ちては籠め、近し遠しの聲の中に、各砲車其既に距離の測定終る。榴散彈は、榴彈に替はり、敵陣の前に散る。此時佐藤聯隊の先頭大隊は、散兵線を張りて、凹道の中に夾み、兩側の曠野を行進せり。繼て陣地を變ずる山砲隊、左側前への號令に應じて雪中を飛ぶ。敵は今回頗る旗敷を減じ、例の虚威を張るを止めしに似たり。遙に見渡せば、只た左方に當り、第五師團富岡聯隊の方面に、一赤旗を建てたるのみ。佐藤聯隊の本部と第二大隊とは、例の軍歌を歌ひつゝ、行進し、先頭大隊と列して散兵と爲る。牛莊の北口より、少しく西方に當りて、市街を離るゝ者約四十米突に人家あり。敵は此家の土壁を補ひて堡壘とし、旗を伏せ、聲を潜め、我兵の接近を待構へたり。斯くとも知らぬ此手、牛島大隊は、前面市内の敵が發銃せざるを訝りつゝも、此堡壘より約百米突の地に進みし時、敵は得たりと、俄かに射撃を開始し來れり。牛島大隊は、何を小癩と嘲りつゝ、直に之に突貫して、第一の堡壘を乗取り、旗を奪ふこと數旒、人を殺すこと數十、捕虜も亦數名あり。繼に彼等の來り海城を攻むるや、常に防禦工事下に引付けて射撃せられたり。今や彼等は我戰術に倣ひ優しくも我を良射距離に誘ひたるは、敏捷と謂ふべし。されど、彼等には我兵の沈勇なし、其突貫を受くるや、終に支へ得ずして周章狼狽、此第一堡壘の陥ると同時に、其左右に並びて行進せる諸兵も、皆進で市の北端なる家屋に逼れり。

敵我戰術に倣ふ

軍司令官
の殿命

又同日第五師團は、其前衛前日と異なる所ありしと雖も、本隊の一部分なる山口大隊は、騎兵一小隊、砲兵一中隊と合して、左側枝隊となり、迂回して敵の退却路たる營口街道に向ふ。軍司令官は、昨日殿命を各隊長に傳へて曰く、各官へ成るべく正面攻撃を避け、勉めて敵の側面に逼れど。又曰く、軍は本日特に各官に自由微發を許す、各官は爲し得る限り、兵士を嚮ふべしと蓋、當日の激戦を豫想せしなり。要するに、第五師團は本道を離れて、敵の左側面及び、退却路に向ふにあれば、此大計並に従ひ、其先頭隊先づ前進せしに、午前九時頃我第三師團は、既に開戦せしと覺し、其左方に當り銃聲は、斜に來れり。かくて城を距る約一里許の處まで進みし時には、我前衛は已に其前方なる村落の左右に展開して、射撃を開始したり。間もなくして砲聲も亦響けり。一名の傳騎は、空を驅て來り曰く、其隊は前方なる紫方屯の村落内に於て晝餐を喫了したる後、直に戰鬪の準備を爲すべしと。此間銃砲の聲盛に聞ゆ。敵陣は時々此地にも來れり。正面攻撃の任に當れる奥中將は、紫方屯の西端柳樹の下にありて、遙に牛莊城を望み、先づ前衛司令たる大島少將に命じて、此方面に向はしむ。是に於て前衛に附屬せる山砲中隊は、其放列を屯の西北端に布き、敵陣地の凸角部を砲撃す。前衛歩兵は、其掩護を得て、屯の前方に進む。奥山大隊之が第一線たり。屯の前方數百米突の地は、平坦砥の如く、二三墳墓の隆起其間にありと雖も、以て身

戰鬪開始

大島少將
武田大佐
の奮厲

を蔽ふに足らず、敵は其開豁地を利用して、塙を設け或は屋壁に銃眼を穿ち、無煙火薬を裝填して我を射撃し、其凸角部には「カットリング」速射砲六門を据え、急射撃を以て我を迎ふ。士氣相等しき軍隊ならんには、到底此開豁地を平押しに、押し行くべからず。然れども、彼れは沮喪の敗兵なり、我は百戰百捷の強兵なり。彼れ如何に彈丸を集注するも、奚ぞ我を沮するを得んや、我は屍の山をも血の河をも更に頓着なく、一直線に飛躍して、敵陣に向ふ。援隊たる森大隊は、之に續て前進し、大島少將、武田大佐は、終始戰鬪部隊間に奔走して、衆卒を厲ます。其勇猛奮進の狀、敢て船橋里の戦に譲らず、第一線及び、援隊の勇戰斯くの如し。此間に於て他の山砲中隊及び野砲中隊も、亦來つて放列を屯の西面端に布けり。師團の豫備隊たる渡邊大隊、武田工兵中隊及び、軍の總豫備たる仙波大隊等も、進で紫方屯の西端に出でたり。是に至て百雷一時に轟き、萬獅同處に吼え、衆耳爲めに聳せんとす。牛莊城頭數百架の浮雲かと怪しむるは、是れ我榴散彈の空中に爆烈するなり。楊柳深き所、一帶の煙霞を舞臺するものは、是れ我射撃の餘煙なり。其壯觀言語の能く盡す所にあらず。此間に於て右側攻撃の一隊は出でぬ、之を今田大隊となす。今田大隊は、富岡中佐自ら之を率ゐ、紫方屯より別れて、木頭橋に向へるものなり。此大隊も亦開豁地を前進せり。彈丸雨注、硝煙暗濛、殆んど咫尺を辨せず、偶一彈あり、來て今田少

我砲聲の
奇觀

今田少佐
敵弾に燈

富岡中佐
の奮進

佐藤聯隊
牛莊に入

佐藤大佐
の負傷

佐の咽喉を穿てり。少佐終に斃る。嗚呼、少佐は平壤攻撃以來勇敢を以て其名聲噴々たるの良將、就中摩天嶺攻襲偵察の如きは、世人の共に稱道する所なり。功を以て將に中佐に榮進せられんとするの際に於て、忽ち此不幸あり。知る者皆痛惜せざるはなし。かくと見る富岡中佐は、争でか之が爲に吊戦てうせん以て賊を蹂躪せざらんや、愈々諸兵を厲まして、木頭橋に向ふ。其勢銳くして、宛ら乳虎にゅうこの暴るゝが如く、到る所風靡せり。是に於て正面攻撃の諸部隊と相應じて、敵の複郭及び、衙門に逼る。

佐藤聯隊の既に市端に達するや、此時射撃を止め、今や其場に集合せんとす。茲に三人の兵卒、一人の將校人家の窓に枕まくらを並べあり。其將は即ち川口中尉なり。中尉は徐家園子の逆襲に負傷し、創痕未だ癒えざるに、今又右股に貫通創を負へり。且佐藤聯隊長も亦此に左膝さしつの關節部に砲弾の破片を被り、早くも衛生隊に担かかひ行かれぬ。是に於て四司少佐は、代りて聯隊を指揮し、益々進て敵と密接し、土壁を隔て、彼我銃鎗相觸るゝに至りしかば、敵の遂に支ふること能はずして敗退し、我前衛は、全く市内しやうに突入せり。既にして市内民家の橋内に、射撃の聲起る、蓋し敵の屋内に隠れて我に抵抗するなり。時約一中隊の我兵は、市内に入らんとせり。こは即ち富岡聯隊の一隊にして、行くと半町許、一民家を探ぐれば敗兵の潜伏せんかくせる者二名、尙抵抗するを以て、我

市街搜索
の周圍

兵は之を刺せり。左右迂回して、少しく大なる家屋を搜索しつゝ、二大家に至る。石壁の周圍四町許、其中に在て我兵を射撃するものあり。大道に出づれば、一火藥庫あり。火は既に回りに、將に焼やけんとす。之を聞て、敵兵あり。又其先には、味方あり。眼前敵を夾くわみつゝ、味方双方相危あやんで互に射撃することを得ず。此方の味方は、爰に別路を取らんと、此所に一隊を留めて、裏道の方に回り行く、其途中に又一家を見る。即ち敵の騎兵の宿舍なり。其敵を斃すこと五名、十字路を隔て、此家の西隣せいりんの神廟なり。其門外の廣衢ひろがわは、幅一町もやあらん、此道二三町の西に、又十字路あり。其北角に立てる人物、敵か味方か未だ分明ならず、我二三勇士をして、之を見せしむれば、即ち味方の爲めに追はれ來れる敵兵なり。因て此方よりも、亦之を射撃せしに、敵の三名は大に狼狽ろうたいして、一民家の土塀どへいを乗り越え、其中に潜ひそむ。此先方なる味方は、即ち佐藤聯隊なりき。

初め富岡聯隊の市端しやうたんに逼るや、其入口に一の複廊ふくらう様のもの横はれり。而も其實完全の複廊にあらず、敵は其第一線として、市の東端に厚さ約三十珊知の塙壁たかべを築きて之に據り、別に市街内の大厦たかを利用し、其煉瓦壁に銃眼じゆうがんを穿ち、之を複廊に代へたりしものなり。我奥山大隊及び、今田大隊は、二時間餘の激戦げきせんをなして、漸く其東端なる敵の第一線を奪ひたるものゝ、敵は民家に據

我工兵
壁の破壊
に従事す

敵兵降を
乞ふ

りて死守し、頗る頑強にして、容易く抜く能はざりきこと、前記の如く、我は素より其全身を暴露せるを敵は得たりと其銃眼より我を狙打つ事なれば此場に斃れし我兵は最も多し。然れども我兵士の勇悍無比なる、呐喊遂に其數個所を奪ひ取る。就中其最も頑然たりしは、太平橋東なる焼耐店及び、衙門の増壁内に潜伏せし敵兵にして、奥中將は之を強て攻むるの甚だ不利なるを察し、諸部隊をして、等しく射撃を中止せしめ、更に工兵一中隊をして、増壁の破壊に従事せしむ。工兵中隊長竹田大尉は、其部下一小隊を進め、爆發藥を以て焼耐店の増壁を濺粉せしむ。忽にして霹靂一聲、天地を震撼して増壁を劈く、木石四散し、破片空に迸る。敵兵是に至て肝膽落つ。我工兵の第二の爆發藥に點火せんとするや、敵遂に降を乞ふ。辨髮を繋かれ頭を垂れ、齋爾として哀を請ふもの無慮二百數十名、而して焼耐店の複廊、終に陥る。之を圍むもの歩兵第十八聯隊、第廿一聯隊及び、第二十二聯隊の各一部隊にして、其工兵の爆發せし破壊口より突入して、俘虜を得たるは、第二十二聯隊の第三第四中隊なりしと云ふ。分捕の兵器甚だ多し。之と同時に第二十二聯隊の半大隊は、木頭橋を夾んで衙門の敵と射撃を交へたりしかど、日も早や暮に及びければ、終に攻撃を中止したり。

此戦に、我兵は前に記せし如く、各戸を搜索しつゝ、南進しけれども、夜に入りて竄敵尙は勦滅に

牛莊城に
接近す

敵の根據
家屋

至らず、司令部は北方市外の一民家を徵發して駐在し、栗飯原聯隊の一部隊を以て、之れが警衛に充つ、あけて夜中の戦は、同士打の虞あればとて、桂師團長は單に銃劍を以て戦ふべしと命令せり。又大島第六旅團は、初め内藤大隊を右翼とし、鈴木大隊を左翼とし、小姐廟の附近より迂回して、敵の退路に出で、進で西南方より包圍攻撃を行ふべき計畫にてありしが、既に牛莊城に接近するや、敵は其北面の農家に據りて射撃を始めたりしに、其一部は、間もなく西南方に向て退却し、始めぬ。是に於て三好大佐は、進撃の令を下し、全線呐喊して、西北面一帯の家屋を占領せり。續て内藤大隊は、敵兵を驅逐しつゝ、其南部に攻入り、鈴木大隊は、其西北を包撃せり。大島少將は、林大隊と共に第一線に續て前進し、遠く城の西北部を迂回して、西南部に出で、敵の退路を射撃し逃兵を打斃せり。此日内藤大隊は、市内に突入してより、稍々方向を變じ、南部を指して進む途中に於て、赤旗五六旗を翻へしたる敵に遇ふ。第一中隊之を邀へ、猛烈に射撃すれば、敵は、慌て、退き去り、僅に銃烟の立ちたる其間に退却せしことなれば、必定遠くは行くまじとて、其附近を搜索しければ、果せる哉、敵は傍なる質屋に集まれり。敵は豫て此家を市内の根據とせしもの、如く、西北部の一門を除くの外、各門煉瓦を積みて之を閉塞したり。佐藤聯隊の一部は、既に西北を圍み、東北には第五師團富岡聯隊の一部の備へあり、此手は未だ此家に通ら

牛莊に於ける勦降の書
敵の投降の書
敵本據を以て降る

ざるも、敵は東北に向て逃走せざるや明白なり、三好大佐は、内藤大隊をして其東南を包圍せしむ。而して其門を破壊せんとすれども、堅くして破れず。且内よりは隙を狙ひて銃撃すれば、其之を破らんことは、容易の業にあらざ、此時會々外圍西面に放火せし者あり。内藤大隊も、亦附近の家屋を焼きければ、猛火は忽ち二方面に起しも、敵は屈服せず、因て外圍牆壁の破れ目を突きて、其所より突入せんとすれば、却て敵の叢射點となる。乃ち外圍と連れる家屋の外壁に一大孔を穿ち、漸く之に進入路を得て突入しけるに、敵は早くも退却して、更に内部の牆壁に入れり。此壁墻も亦堅うして容易に抜くべからず、我軍、術盡て、更に逃路を開て、敵を誘ふ。敵亦去るの景色なし。是に於て勦降書を敵陣に送ること二回、又其効を見ず、三好大佐激怒火の如く、斷然として敵を燒盡するの計を回らし周圍の家屋一面に火を放ち、之に大砲二門を加へて、壁内の敵を苦む。會々西面の火、火藥庫に移り、爆發數番、既にして日暮火勢愈々熾なり。是に至て、敵は遂に堪ふると能はず、八時三十分頃投降書を送り來り、曰、先接來信、迷回數音未、回信、我軍降必事、又開大砲、此致、企、候回信、一切莫、以、陰陽、相待と。大佐直に之に返報して之を聽き、連に其門戸を開き、兵器を納るべきを傳ふ。敵尙狐疑して命に應せず、蓋其欺かれて屠戮せらるゝを恐るゝなり。大佐乃ち塵殺に決す。敵、愈々盛、午後十時頃に至り、漸く出で降る。戰既に熄み、

敵兵伏屍の慘狀

此役我死傷

燒耐店に至るの路傍伏屍相枕み、其複廊門前の如きは、慘狀殊に甚しく、血河屍山より流て滾々として來る、門を傳うて左すれば、捕虜百餘名苦吟する者あり、怒る者あり、泣く者あり、訴ふる者あり、怒る者は曰く、早く我を殺せと。此輩弱軍中の稍強兵、其氣力頗る靦るべしと雖も、十中の八九は、皆泣て命を乞ふ者なり。此夜師團長の命令あり、夜間警戒の區劃を定められ、前哨線は、凡て之を河の左岸に設けられ、歩兵第廿一聯隊は、太平橋を右翼として、木頭橋を左翼とし、歩兵第二十二聯隊は、木頭橋を右翼とし、柳屯橋に至るの間及び、此二橋を警戒したり。此役第五師團に在ては、奥山歩兵大隊及び、今田歩兵大隊の二隊、最も激戦せり。故に死傷者も亦此隊に於て最も多きを見る。即ち奥山大隊には、死者九名重傷者四名、輕傷者六十六名、今田大隊に、死者九名、傷者三十八名、而して將校の死者には、今田中佐あり。(討死の日は、昇進の辭令己に到着し居りしと云ふ。)傷者に田邊・大久保・中屋の三中尉あり、以て其奮戦たるを知るべし。其他は仙波大隊に傷者二名、渡邊大隊に死者一名あり。又其森大隊には、傷者數名ありと雖も、皆此二個大隊の如く多からず、第三師團に在ては、佐藤大佐すら、其片脚に銃傷を受けたりと聞けば、是亦激戦なりしなるべし。敵の死屍は、實に一千八百八十餘人、而して其一千一百餘名は、第三師團兵の斃す所、残り二百七十餘名は、歩兵第廿二聯隊の第一大隊、其他の四百餘名

の、歩兵第廿一聯隊の第三大隊打留たるものなりと云ふ。

第三師團第十八聯隊

將校即死

大尉 新保正

負傷後死亡

見習士官 熊谷哲

負傷

大佐 佐藤正

全

中尉 岩本操

全

全 川口金之助

全

全 兒玉象一郎

即死下士卒

三十名

負傷後死亡下士卒

九名

負傷下士卒

百六十七名

第五師團第七聯隊

即死下士卒

八名

負傷下士卒

十九名

第十八聯隊の死傷者

第七聯隊の死傷者

砲兵管隊の死傷者

俘虜及戦利品

牛莊城の敵勢

砲兵管隊

即死下士卒

一名

負傷下士卒

二名

又敵の俘虜は、第三師團に属する者は、四百餘名にして、第五師團に属する者は三百餘名あり。而して我戦利品は、小銃二千三百三十八挺・彈丸五百五十一萬八千發・野砲一門(但破損)・山砲十二門(皆支那製)、良好なる「セントウ」砲二門(但六珊)、「カットリンク」砲六門・旗二百十六、槍四十二・箱入火藥千六百四十八・精米千二百二十石・大麥百五十石・高粱百十石、馬匹の各隊の大小行李を補充して尙餘あり、天幕八十九・馬蹄銀二百十三・軍衣・防寒服・陣釜・其他の雜品山の如し。當城を守備せし清軍に關しては、種々の説あり。先づ其將校に就て、最も信憑するに足るべき一説には、當日の大將は、李某・劉某の二名にして、其下に營官・魏・黃・及余の三人あり。或は云ふ、黃は此日戦死したるか如しと。次に其兵數は李の五營、劉の八營に、魏の三營を加へて都合十六營、即ち八千人許あり。其兵は何れも湖南出の洋式兵にして、清兵中に在ては、鋒々たる兵勇なりと云ふ。又捕虜の言に依れば、牛莊の敵の都合十營にして、魏光燾之が總督たりしと。十營は即ち五千人、一日にして其過半を失ふ。其能く逃げねせたるもの、果して幾人ぞや、更に一説

牛莊知縣の職狀

あり。彼の敵將徐邦道は、四日前即ち此月一日を以て、海城を攻撃するを名として、小馬頭にありと。而して此日牛莊の候補知縣衛紀園なる者、我兵に捕はれたり。衛は甘肅の人、軍に従ふて此地に来る、其成兵の潰走するや、衛潛匿して民舎に在り、遂に捕はる。衛我軍門に至り、叩頭涕泣哀を乞うて至らざる所なし。其醜狀實を見るに忍びざりと云ふ。

外人保護の告示

此日野津司令官は、特に告示を發し、外國人に對して粗暴の行爲なく、大明軍の名を墮さるやうに心懸くべし、取別け教會堂を目標として發砲すべからざる旨、堅く一般に嚴達せり。されば我各隊も、深く其意を體し、邢家窩坊より望見して、空中に巍然たる洋風の高樓は、市街の大建築物と共に、大抵破壊せられたる後も、獨り此教會堂のみは、毫も損傷の痕なうして、市街西部に屹然聳立するを見しと云ふ。因に記す、容歲十二月海城陥落の當時、牛莊の外國宣教師等は、桂師團長の書を得て、共に大に喜び、均しく感謝の意を表せしが、其後同地在留佛國宣教師「エヌフロンタン」は、清人二名を携へて海城に至り、同師團長に面し、牛莊市民の依頼を表白したりと云ふを聞くに、一に曰く、牛莊城は馬太衛の兵入城後、知事・役員・皆逃亡し、細民亂行、殆ど無政府の有様なれば、市民協議を以て、壯丁二百名を募集し、市街を取締れり。然れども、此壯丁は、決して日本軍隊に敵對せざる事。二に曰く牛莊城附近は、本年遼河洪水の爲め、作物を害せられ、食糧

在牛佛國宣教師海城に來る牛莊市民の意向

在牛米宣教師の書狀

欠乏せし故に、海城附近、其他より穀物買入れを認許せられん事の二個條是なり。又同在留の米國宣教師「マッケンデー」は、桂中將に對し左の如き書面を海城に送致したりき。即ち其文は
謹啓、海城に於ける小生の財産、并に代理者に對し、御懇篤の御保護被致置候段、偏に奉感謝候、乍去更に一層深く小生の感覺致候には、今回の開戦以來帝國日本軍隊の運動は、常に仁義を基とするの一事に御座候、此儀に就き、小生は支那の親友としては、深く感謝を表し、又基督教家としては、斯る教課の全く缺乏せる此支那に、日本帝國の文を讀み聽かするを見て、深く満足に存候、今回貴下に於て、此支那人民と觸接被致候上は、必ず良好の結果を相生じ、可申と、小生愚考致候、唯貴下の名譽を汚損すべきの一點と、愚考仕候處有之、腹藏なく之を申し上げんに、此一點を申すは、軍用役夫の所爲に御座候、小生の承り候所にては、掠奪の儀に付、朝鮮人等の所爲、殆ど支那兵と異ならざる由に御座候、暴言多罪御海容被下度、小生は日本の親友として、又二十年來支那の親友たる者に御座候。
と、此忠告狀と、此告白狀とを見れば、當時牛莊民心の我に對する感情如何、及び此民心を收拾するに必要なる件々は、圖らずも亦此徒によりて、我軍に導かれたることを知るべし。我軍至るの日、彼等の保護至らざる無きも、亦宜ならずや。

又戦争の當日、我に於て牛莊陥落の見込み稍々立ちたる瞬間に、兵頭砲兵少佐、兒嶋參謀大尉は、騎兵第一中隊に護衛せられて、牛莊の西を過ぎ、大房身を経て下口子に至り、遼河の氷の厚薄を檢し、且土人に質し、果して徒歩に耐ふることを確め、夜半大房身より歸らんと、馬を馳せて進み來れば、遂に火光を認めたり。豫て歩兵大隊後續する筈なれば、味方の援護の出で來るものによと思惟しつゝ、近きけるに、先頭の數騎は、敵あり、敵ありと大呼せり。されども、奔馳の餘勢もて、馬は早くも先頭騎兵と連續せり。我退かんか、彼追はん、多勢に無勢、爰に弱味を見せなば、一大事なりと思慮を回らし、乃ち三浦騎兵大尉は、劍拔けと一合せり。されば、騎兵は勿論、其他の人々も、皆拔劍し、大尉が突貫と、號令するまゝに、一齊馬躍らせて、五六百餘の敵中に切込めり。敵は敗殘の餘、我不意の襲撃に吃驚して倉皇する間に、味方は巧に血路を開き、翌日午前までに、恙なく牛莊に歸り來れり、唯通譯官武藤某のみ、主は歸らずして、獨り馬のみ歸り來れば、恐らくは敵手よかりしならんと、人々痛歎し居けるに、翌日に至り、亦恙なく出で來る。其談話を聞けば、曰く一旦敵中に落馬しけるが、漸く追れて黍稷の陰に潜み、五日の夜に入り、辛うじて這れしと。又疑ふ大富屯より海城に引返して、第一師團の第三聯隊と共に、海城守備隊たりし大迫旅團の塚本聯隊は、我軍牛莊占領の翌日、彼の徐邦道が、嘗て宿營したりとか云ふ四臺子に於て、

三浦騎兵大尉の突貫

武藤通譯官の驚愕

一奇談

清將の狂概其一

野砲三門、三臺子に於て野砲二門、其他彈丸、精米等の分捕ありしと云ふ。

茲に又いと珍らしき一奇談こそ現れけれ、初め我第五師團が、鳳凰城を發して、鞍山店に至らんとするや、同師團第一糧食縱列附、有馬組人夫加藤熊太郎、外數名の者、凍傷の患に罹り、爲に一行に後れて海城より遼陽に通ずる交叉路に於て方向を失し、遂に清兵の爲めに捕はれ、敵將徐正道の許に致さる。是に至て、敵將は書を熊太郎に托して以て我軍及び、大島前朝鮮公使に送る。蓋し敵は大島公使を以て、我軍將と思惟すればなり。其我軍に致したる文に曰く、(徐正堂の檄)

徐爲傳檄收撫事、照得、倭夷敗約、侵奪高麗、又復妄肆、狼貪、擾及中國、雖兩軍相持、互有傷亡、而我武奮揚、定即蕩平醜類、惟我中國素以仁德爲心、不忍多行殺戮、近日屢有擒獲倭兵、視其手足、盡皆凍傷、舉步維難、迨詰其犯順之由、據供定爲該國長官所逼、均非出自情願、言未終而淚如雨、哀懇求生、情殊可憫、本統領目擊慘狀、寔甚惻然、因思無端犯順、罪本在於該國君臣、則隨陣倭兵、無非由於勢逼、若概行誅戮、未免有傷上天好生之德、是以本統領將已獲倭兵、概行開釋、給與衣糧、擇地收養、不加戕害、一俟事平、有願歸國者、即行設法遣送、倘願留中國、必均編籍爲民、以仰副我皇

上一視仁之意、爾倭兵果能早明順逆、棄戈來投、本統領、定當悉數收留、加意撫視、即各處防營、均應預為知照、隨地收撫、爾倭兵既免鋒鏑之苦、盡得享飽暖之安、毋庸心存疑畏、瑟縮不前、如敢終始不悟、抗拒天兵、甘心助送、一經擒獲、立正刑誅、爾倭兵等、其各細思弗貽後悔、為此傳檄知之。光緒二十一年二月十四日（我三月十日）

又大鳥公使に宛てたりと云ふ書に曰く、

欽加三品銜統領鎮東馬步全軍遼陽州正堂徐、致書日本國圭介鳥王閣下、聞大名數月矣、欽用兵亦勇矣、然以嚴法猛令驅兵卒于必死之地、若謂勇勝則可、謂仁勝則未也。足下之勇、確是楚霸王之流、自以謂天下無敵、終為漢高帝之所滅也。我國大臣非不知力戰取勝、第爭一時之勝、傷害無數生靈、稍知愛民者不為、況我大清國以仁政治民、豈肯爭一時之勝、而不顧無數生靈、故我國大臣每遇貴國臣工慶戰之時、多存退讓以保生靈、藉欲閣下自行啓悟、不然我大清幅員廣闊、人民衆多、爾孤軍深入、不難一鼓殲滅、要知貴國之兵民亦是上天所生、我大皇帝一視同仁、不忍全行殺戮、以副上天好生之德、所謂以仁心行仁政是也。即本大守雖職居微、亦未不敢不仰副我大皇帝仁愛之心、茲將擒捕爾軍潰卒十餘、見其柔弱可憫、不忍加戮、特遣兵丁送回、爾營一名、其

其二

餘諸人、尙留我營、衣食醫治、毋虞缺乏、閣下既為大盡當愛恤生民、保衛貴國長久之計、爾其思之、古今力爭殘害、而得疆土、有能久存者乎、倘能及早息兵、生靈免遭塗炭、兩國幸甚、生民幸甚、用布縷々此候近祉。

と、蓋し徐は毎に我兵の勇猛を愛ひ、偶々我人夫を獲て、故に寛大愛撫の情を裝ひ、放還以て仁聲を播せしめ、而して後我兵を誘ひて、投款の路を啓かんと謀れるなり。否らずば、何を其言の狂悖一に此に至るや、特に知らず、我軍上は將校より、下は士卒役夫の微に至るまで、性來の和魂渾厲去らず、造次顛沛の間と雖も、敢へて君國を忘るゝ者無きことを、徐の愚も亦甚しと謂ふべし。而して徐は、此時熊太郎に附するに、二名の清人を以てして、之を送還せしめたり。依て我海城守備隊は、清人及び熊太郎を訊問しけるに、各々其答ふる所は、即ち左の如し。

人夫を送還せる二清人の言

(一)遼陽州知州徐に依頼せられて送り來れり。(二)尙六七人の日本人夫ありと聞く、皆凍傷の爲めに歩行する能はず、全癒すれば同じく歸還せしむと云ふ。(三)遼陽城内にて、是依爾將軍、各其兵を率て駐屯す。(四)人民は城外に轉居せし者少からざれども、商賈は尙尙の如く、當舖の如きも依然營業せり。(五)城内糧食あれども、食世凱の在るを知らず。(六)沙河鎮には、清兵なし。此地は清兵前に掠奪して、全市荒廢に歸す。(七)沙河鎮と、遼陽の間土坎子に清兵約一千人あり。

同じく土人の調書

同土人の調書

(問) 備は何れの者なるや、何き云ふ者なるや。(答) 遼陽の四清八里の處、八里村買法文云ひ、年廿五、小南寛人(梨子砂糖の類)。(問) 誰の指揮にて、日本人を送り來るや。(答) 徐大人の指揮に依る。(問) 誰より受取りしや。(答) 清兵の居る處にて、徐大人に申付らる。(問) 遼陽の兵數如何、又何れの兵なるや。(答) 五百人、南邊の兵なり。(問) 他の兵も居るや、如何。(答) 他の兵は知らず。(問) 大人の次官は誰なるや。(答) 依及び玉大人なり、其他は分らず。(問) 長大人居るや。(答) 分らず。(問) 鞍山店に清兵居るや。(答) 居らず。(問) 沙河鎮には如何。(答) 居らず。(問) 其他鞍山店沙河鎮の附近に、清兵の居る處は何處なるや。(答) 其附近の清兵は皆逃げたるに付、今は居らず。但遼陽の南十里の處、レンチヤン村(人家三月)に清兵居れり。(問) 遼陽を發したるは、何日の何時の頃なりしや、又何れに泊りしや。(答) 遼陽は十二日、八里村に十三日、沙河鎮に十四日、鞍山店に十五日、昨十六日午前六時にして、烟臺に一泊し、本日海城に來れり。(問) 日本人は猶遼陽に残り居るや。(答) 猶六名あり聞く、凍傷中に付、少しく快方に趣けば、送り來るならん。(問) 今送り來りし者は、何故に送り來りしと思ふや。(答) 稍文字ありて、能く分り居り、歩行出來得るに付、返せるなり。

二十八年三月十七日

海城守備隊長

人夫加藤の取書

聞取書(人夫加藤熊太郎口上)

自分は鳳凰城より行進し來り、海城より遼陽に通ずる交叉路街道を西方に向ひ、牛莊の方向に至り、凡そ二里にして兵士に遭ひ、第五師團糧食隊の行進方向を尋ねたるに、當地は第三師團に付、第五師團は遼陽に向ひしとの事なり、夫れ故元來りし交叉路に戻り、遼陽の方に至りし時は、日本人夫にて、山崎なる者と同行しありしが、外に日本人夫三名に出會し、部合五人となり、其三名の内一名は、第五師團彈藥隊附にして、兵名は知らざれども、内一名は熊本人、他の一名は野前の者なりしが、交叉路を遼陽に向ひ去るこま半里許にして、敵騎五六名に出會し、此時敵騎は自分等に向ひ砲發し、彈丸雨飛爲めに盲目の一人山崎は、敵彈に墜れたり。其時敵の騎兵下馬して我を捕へんとするより、驟て敵の銃身を拾ふて携帯し居たるを以て、敵騎二名を歐打したれども、他三名の日本人夫は、素より足痛の事さて、容易に敵に抗する能はず、故に自分は敵兵に組付たりしが、他の敵騎數名來り、我頭部を歐打し、負傷せしめられ、爲めに捕獲せられ、歩行なし難きを以て、我一行は牛車に乗せられ、遼陽に向て一里程行き、右折し、又行くこま二里にして河あり、此地に敵

の兵站部ありて、敵の歩兵百名許りと、自分に隨從し來りし騎兵百名許、旗を樹て、喇叭を吹き、同兵站部に來りたり。爰には敵の隊長二名あり。此兵站部より、凡そ二十町程山手の人家に至り、自分の顔見世を爲し、再び元の兵站部に歸りし時は、夜將に十時なりしが、同夜粟飯の給與を受け、(日は宛へず)當夜敵の隊長筆記を以て、我に向ひ大島公使は何れにあるやと尋ねたるも、自分等は日本人夫の事なれば、何事も知らざる旨筆答したる處、我一行四名の姓名を尋ねられ、同夜十二時頃に及び、隊長の殘飯(日本米)を、豚を給與せられ、翌朝八時頃、粟菜粥を與へられ、夫より牛車にて出發し、一里半許行きたる時、新兵と胸部に配したる敵兵五十名、古兵五十名許あり、其時古兵の携帯せし銃は村田銃の如きものにて、新兵は銃を携帯せず、夫れより尙一里半許行き、人家五十戸程ありたる村落に、隊長一名あり、又大島公使の所在を尋ねたれども、前の如く知らずと筆答せり。然るに汝の姓名を告げよと云ひたるに付き、加藤熊太郎と答へたり。同所には、敵の騎兵五十名あり、小銃は前に同じ、夫れより十町程行きたるに、人家凡そ二百戸程ありて、兵站部の如きものあり、時は午後二時頃にして、同所に夕刻まで留置せられたり。思ふに當地の隊長と、前の隊長と懸合を爲したるが如し。夫れより十町程後に戻され、手足を縛せられたる儘食物も與へられず、翌朝八時頃迄家屋内にありしが、十時頃に至て兵士の殘飯(日本米)粥を與へられたるも、空腹の状況を手眞似にて訴へたるに、午後四時頃醫師來て自分の負傷を診したるも投藥せずして去り、再び醫師の來らざるを以て、遼陽に向ひ至る途中、醫師と騎兵四五名に出會す。此時醫師は自分の治療を爲し呉れたり。夫れより日没頃、遼陽の監獄に入れられ、同夜日本米の飯と、菜の油揚げとの給與を受け、翌朝に至り隊長の前に我一行四名と共に呼出され、其時大島公使の所在を、前の如く尋ねられたるも、同じく知らずと答へたるに、餘らば日本の隊長は誰なるやと尋ねられたるも、人夫の事に付、何事も知らずと答へたるに、四名の姓名を尋ねられたるに付、筆答せり。夫より朝鮮人にして、日本語を稍々解するもの來り、自分に向ひ、日本兵となるや、將た清兵になるやと尋ねたるより、清兵になりたき旨を答へたり。他三名のものは、自分に引受けよと云ふにより、其旨を諾し、同じく清兵となる以上は、足痛の事故騎兵になりたき旨を告げたるに、其事を容れ、我一行四名に新調の袴と、靴を與へられ、其日は監視役人の所に在て、起臥の自由を許されたり。然るに、自分等四名の外に、日本人夫三名同監獄内に居りしが、旨語を交ゆるを得ざりし。此三名は清兵同機髪を剃りあるを見る。其翌日彈藥隊列の人夫(熊本人)と、自分の二名を呼出し、筆記を以て日本に歸還すべき旨を告げたり。然るに、其後自分一名を還すことになり、此時狀袋二通と、支那錢即日本一

鳳鏡の如きもの二圓程を呉れ、支那人二名と、騎兵隊長一名とに贈送せられ、隊長の許を去り、遼陽市街の最も繁華なる處に至り、支那の上衣二枚を與へ呉れ、東南門を出で、凡二十町許にして、大なる石橋あり、同處に暫らく休憩し居たるに、此時騎兵の士官は同所を去り、附添の支那人一名は、銀頭を買ひ來り、十個程自分に與へ、爰にて更に騎兵一名來り、四南門まで引廻し、其時敵兵は去り、夫れより一里半程行き、敵の宿舎内に宿舎せり。此時敵は群集して、自分に種々の問答を爲さんせしむ、自分は答へず、然るに隊長一名來りて、大島公使の所在を前の如く尋ねたるも、同じく知らずと答へたれば、隊長は直に其場を去り、自分に附添ひ來る清人一名が、隊長に従行せしが、暫く在て上茶を、菓子を持來り、自分に與へたり。(此時清人先づ毒味を爲したる後に與へたり)此地に在りし清兵は、百五十人許りにして、携帶の銃器は、元込銃なりし。翌朝同所を出發し、行くこ三里にして、人家十五六戸あり、爰に歩哨一名ありしが、其歩哨の通知により、清兵二十名許來りしも、豫て前に自分が受取り居りし書面を示したるを以て通行を許したり。此歩哨并に集合せる清兵は、皆元込銃を携帶せり。而して同所には、敵兵百五六十名會營しありたり。夫より行くこ一里にして、宿泊せり。此地は戸數凡五十戸家は農家と覺わたり。同所なる敵兵は居らざりし、其夜は附の清人自分に米を買ひ來て與へ、翌朝は粟粥を喫して出發せり。此日は降雪なりしが、雪晴れて凡一里半程歩行し、或る村落に宿泊せり。其翌日は、晝食も粟飯を喫れ、四里程歩行し、五十戸ある村落に宿泊し、其翌日は凡三里程海城の方に向ひし所にて、日本の騎兵四名と、歩兵十五六名に出會したるに、歩兵の將校(第三師團)に、自分が捕へられたる顔末を告げたるに、其將校より金廿五錢を貸ひ、夫より二里程歩行し、二三戸ある所に宿泊し居りしが、前日の日本兵、汝に出會の後、敵兵に出會し、互に發銃し、今退却したる所なれば、今夜此處に宿舎し居るは危險なりとの事にて、又半里程同行し、或る村落に昨夜宿泊して、今未明同所を發し、本日午後四時當民政務所に到着す。

明治廿八年三月十七日海城に於て

第五師團第一糧食隊列有馬組人夫 加藤熊太郎

遂に清軍の我邦人を捕ふるや、其兵たると否とを問はず、酷遇至らざるなく、遂に死を以て之を待ち、我軍爲めに憤怒報復の念を増したる事、當に再三のみならず、然るに今や我人夫を待つに、

人夫送還
清人を勞
ひ歸へす

務めて婦人の仁に出でたるのみならず、殊に四名の捕俘中に於て、獨り熊太郎を放還せし其意の在る所、殆んど忖度(そんたく)に苦ましむものあり、然れども彼れ一旦好意を以て我を待つ、我亦彼に於ける然らざるを得ず、是に於てか、海城なる我守備隊の、熊太郎の附添として來りし清人に、在海城の清俘を一覽せしめ、且之に金員を附與して、直ちに還し遣りぬ。

敵の重要
書を得

初め清軍の我海城を回復せんとするや、敵は先づ此牛莊城を始めとして、其他營口に、田莊臺及、遼陽等の地に據り、海城を圍みたり。其衆數万に下らず、其將依・宋・長・韓等の輩、協心戮力、以て其萬一を僥倖せしむ、終に其志を果さず、却て其兵を傷り、其威を損し、徒に其部下をして風喉(かゝ)驚擾の情を増さしめたり。是に至て、一敗四散牛莊陥りて、海城附近復た敵の馬蹄を遺さず、然れども牛莊の潰兵、多くは走りて田莊臺に歸し、營口の敵亦未だ失守に至らず、兵の神速を尙ふ、我今破竹の勢、何を苦んで進軍に踟躕(ちゅうちゆう)すべきや、敵の多しと雖も、概ね是敗餘の兵、烏合(くわが)の衆、爲すゐるに足ざる也、聞く我軍襲(せう)さに偵察の途次、敵の重要書類を得、題して團練條規(だんれんじょうぎ)と曰ふ。是に於て始めて敵の俄然多衆を擁するを知る。一に曰く、團練(だんれん)は各城宿驛(せうじやく)鄉村(せうちゆう)に設置し、四民より團兵を徵集す、各城宿驛には、所在の大商店より三名、小商店より一名の團兵を徵集して、別に商團を編成す、其商團の條規の、此團練條規に依準す。二に曰く、鄉村團練は、一村毎に德望者より

團長一名、副團長二名を選任す、團兵は耕地二十畝毎に、團兵各一名を徴す、但耕地を所有せざる貧民、又は鰥寡孤獨者は免役す。三に曰く、團練組頭一名毎に、旗一旒を備へ、其色は四方四隅に區別し、某村練勇と明書すべし、兵器は一組毎に、抬槍一挺、獵銃二挺、刀矛各四本を備ふべし。四に曰く、郷村の團兵は二十年以上、四十年以下の強壯者を選抜し、疲弱者・阿片喫烟者・外來流民の應募を禁ず、紳士豪商にして隊伍に列するを好まざる者は、本郷村の貧民を以て、代理者とするとを得。五に曰く、各團長は團兵名簿を調成し、姓名年齢を明記し、且捺印して臨時の検査に供すべし、又團結外の貧民名簿を調成し、職業及家族の數を記入し、匪徒藏匿を豫防すべし。六に曰く、郷村の大小距離の遠近、人口の多寡を酌量して、合同の團結を編成し、團名を附し、正副の團總管數名を選任し、又長者を選抜して幹事と爲す、各團總管は、銅筒一對・門旗一對を備へ、某縣某團と明記すべし、各團總管は地方官の節制に歸す。七に曰く、各郷村に警戒あるに際しては、鑼又は鐘を鳴らして警報す、團兵は警報に接し、直ちに兵器を所持し、警地に赴き、犯者の捕獲に従事すべし、犯者を捕獲せし時は、地方官に護送して處置を請ふべし、團練に於て擅に處置するを禁ず、違ふ者ハ重に從て處分す、犯者逮捕を拒み、又は抵抗し、團兵を傷くる場合は、之を格殺するも論ずる所なし。八に曰く、郷村の團兵、兵器を以て私鬪せし者は、律に照して處

分すべし、團長及び組頭は、不取締の廉を以て重に從て處分すべし、團長等衆を恃み私鬪し、又は官命に抵抗する事等あらば、其職を褫奪し、相當の處分を爲すべし、團長の經理宜きを得て、實効を奏する者は、地方官之を具申し、頂戴を賞與して獎勵すべし。九に曰く、團練の兵器は、極めて必要なるも、抬槍・獵銃の如きは、從來各郷村に於て製造せず、加ふるに此際各郷村同時に設置せば、一時普給する能はざるべし、因て豪家等に從來蓄藏の兵器を以て、不取締借用し、製造を待て還付すべし兵器準備せば、毎日一回村外の空地に於て、演習す、法は大旗前に在り、抬槍之れに次ぎ、獵銃又之に次ぎ、各銃の操練終り、刀矛躍出して、三擊三刺し、各銃兵又出て發火演習す、此の如くすること三回にして終り、若し演習あるに際し、不參するか、或は隊伍を亂す者は、團長之を處罰す。此條規たるや、東三省一帶の地、各城宿驛郷村に實施せし所にして、名は護郷兵の如くなるも、其實清國兵員募集の變則なり。初め清廷南方地方に募兵せしも、其給與の正確ならざりしため、之に應ずる者尠く、遂に此團練條規の已むを得ざるに至りしなりとかや。さればにや藝に海城、其他の敗北には、毎に右兵器中の抬槍を遺失したりし者、幾ど之が爲なり。果して然らば、今や敵兵如何に加倍するも、是烏合の衆、其戰鬪の法を解せざるや勿論なり。是即孔子の所謂教へざるの民を率ゐる者、實に其民を死地に處くものなり。

牛莊陥落の後、我敵情偵察の報告に依れば、高刊には敵兵ありと。是に於て三月六日、第三師團は、先づ之を攻撃せんとし、爲に進發の命令を下し、前衛本隊共に午前七時、其舎營地を出づ。漸く近づくに及び、前衛の偵察は曰く、高刊に敵無しと。正午兩隊共に同地に集合す。土人の言に依れば、此地前に敵兵ありしも、牛莊城陥落の翌朝早天を以て、皆田庄臺方向に退却せりと。初め我第一軍の牛莊に在るや、次で撃つべきは營口なりと豫定したりしが、是に至て敵の主力の田庄臺に在ることを知り、且第二軍の第一師團は、早くも運動を起して、大石橋附近より、老爺廟方面に向ふと聞き、即其方向を轉じ、第一軍は田庄臺に向ふことゝはなりぬ。果然第二軍の第一師團は營口に向へり。

第一軍田庄臺に向ふ營口に向ふ

第二十三 營口の占領

是より先、我第一師團の南北太平山を占領するや、所々要害の地に歩哨線を張り、敵の襲來に備ふることを極めて嚴なり。然れども敵は前敗に懲りはて、たやすく寄來らざれば、我兵無事に苦めり。爰に三月四日に至り、忽然として一騎の傳令は、雪を蹴て來り、隱岐聯隊に告げて曰く、只今一千餘の敵兵西七里溝（太平山を距る、約三千五百米突）に現はれ、漸次南進するの状あり。今村少佐は、既に一隊の兵を以て、太平山に在りと。須臾にして、殷々雷鳴の大に起るを聞く。是我砲聲の地を撼し來れるなり。是に於て隱岐大佐は、蹶起馬に跨り第一、第二二個大隊を率ゐて、小平山に向ふ。敵は既に我猛烈なる砲聲を喰らひ、喫驚狼狽西七里溝より遁れて、老爺廟を過ぎ、陸續として老邊方面に向て退却しつゝ、あるの一機頭なり。間もなく敵は全く我散彈爆發の下に潰走したり。此日襲來の敵は、歩騎兵合せて約二千餘人、宋將軍及び、孫大爺も亦出馬して、老爺廟邊に在りしと聞く。我乃木旅團長、亦此砲聲を聞き、孫家崗子より一隊の兵を率ゐて、戰場まで馳せ付しが、時正午に近く、敵は早くも其形を隠せし後ありき。我兵は失望の色を現はしつゝ、一同其宿營地に引上げたり。翌けて五日午前九時頃、實に奇怪の一報に接す。曰く、老爺

敵兵太平山方面七里溝に現はる

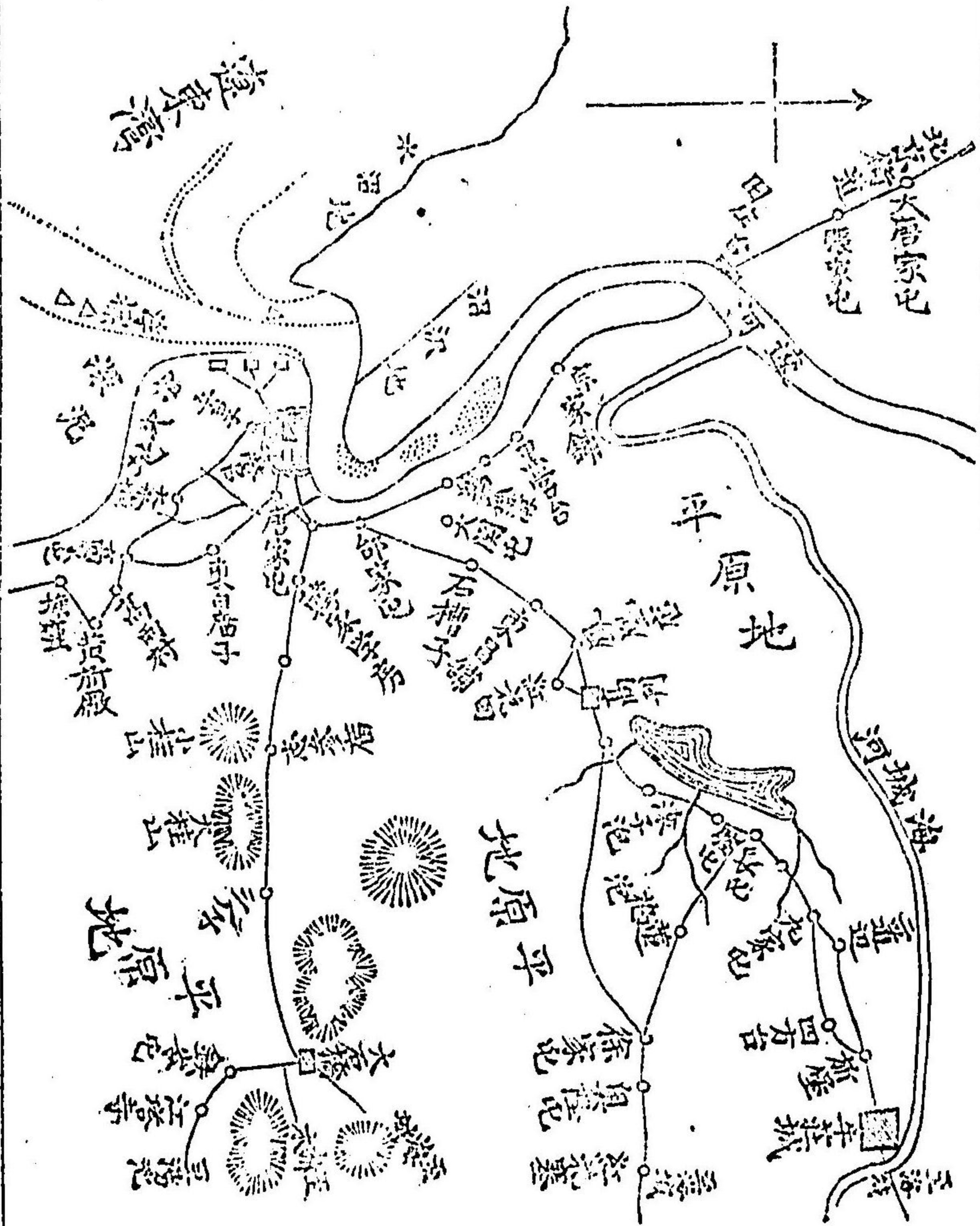
敵兵敗走す

奇怪一報

廟、姜家房及東西白廟子邊なる敵軍は、昨夜來多くは退却して、甚だ寂寥を極む。諸將聞て愕然、又茫然、宛も掌中の玉を失へるが如し。然れどもかほどの堡壘、かほどの要害、容易に棄つるの心底測る可らず、尙能く探偵を密にし、其實を得べしと。即ち心利きたる支那人數名を備ひ、諸方に派出して之を謀したり。既にして彼等は、西より、東より報告を齎して歸來す。其異口同音に唱ふる所を聞くに、曰く、前面の敵は、昨夜を以て悉く營口に退き、而して其主力は、田庄臺に遁ると。是に於てか、始めて營口進撃の議は起れり。即ち乃木旅團長は、隱岐大佐に命じて直ちに運動を起さしむ。同大佐は、部下の第一、第二大隊を率ゐ、此日正午を以て新家嶽子を發し、北小平山まで進み、此處に聯隊本部及び、第一大隊を駐め、香川第二大隊長をして、老爺廟を占領せしめ、同所に同隊の宿營を設け、又山地師團長は、西少將の第一旅團を率ゐて、大石橋に進入せり。蓋し敵は前日多少の歩騎兵を太平山附近に進めしは、敢て我と戦ふの意ならず、只其首都隊の退却を容易ならしめんが爲めの、牽掣運動なりき。山地師團長は、同夜乃木・西の兩旅團長に命令し、愈明六日を刻して大運動に着手すること、はなしたり。三月六日、全軍篝火を照して征裝を整へ、午前五時を以て運動を起せり。山地師團長は、西少將の第二旅團及び、獨立騎兵大隊を従へて、大石橋を發し、金家屯、孤山及び老邊を經、後家油房（營口を東方に距る約二里）に向

營口進撃の斷決す

營口及中野驛圖



好天却て
進軍の困
難なる

ふ。乃木少將は、左翼隊となり、部下の第一旅團を率ゐて、孫家園子を發し、姜家房に至りて、戰隊序列を作り、前唐家園子、韓家園子及び、太平店を経て、營口に向ふ。此日此手の前衛司令官は、隱岐大佐にして、部下の第一、第二大隊、工兵第一大隊の第一中隊、野戰砲兵第二聯隊の第一中隊を率ゐて先發す。日長閑にして風寒からず、四山霞を帯びて、雲雀野に嘯る、春來稀有の好天氣なりしも、之が爲め路上の氷雪多く融解して、泥濘滑走、加ふるに脛を没し、股を没し、其飛沫は腰を濡らし、肩に及ぶ、然れども是尙、人々徒歩の難のみ、其野砲を曳き、輻重を押すの困苦は、更に幾層倍徙なるを知らず、聞く此日の進軍は、行々敵の狀勢を察し、師團は後家油房に、乃木旅團は、韓家學房邊に宿營し、翌七日の拂曉、第一軍と相應じて總攻撃を試み、一舉營口を蹂躪するの計畫なりしと。然るに、我前衛の韓家學房に迫るや、敵は營口の西方より、海岸砲を轉回して、頻りに我軍に發射せり。彈丸響をなして空を飛ぶ、是に於て隱岐大佐は、韓家學房に隊伍を停め、志岐中尉に一小隊の兵を附し、斥候として營口の東面に向はしむ。中尉進むこと約千五百米突許にして、端なく敵の騎兵三名に遭ふ。彼等一彈をも放たずして、早く馬を驅て營口市街に向ひ去る。志岐中尉透さず、之を尾撃して、一躍營口の東門内に突入せり。是れぞ今日戰闘の手始、營口陥落の端緒なる。茲に隱岐大佐は、馬上遙に志岐中尉の一隊、營口市街に突入するを

營口戰闘
の緒

營口に於
ける敵の
退路を察

見るや、直ちに前兵大隊、竹中少佐及び、前衛本隊香川少佐を督し、一瀟千里の勢を以て、幕地に直前し、忽ち營口東面の街衢に攻め入たり。竹中大隊は、先づ尖兵中隊長本郷大尉をして、營口の諸門及び、電信局の占領に當らしめ、其他の部隊を悉く門前に開進し、火蓋を切て敵陣と相對せり。あゝ、彼は第一主要の道路、即ち田庄臺に至るの東門を塞がれたり。されば、直に切て出づるか、將た退て防戦するか、二ツ一ツの急場なり。然るに何を圖らん、又例の三十六計、走るに如かずの長所に訴へんとは。即ち彼れは營口北側の中央より、一直線に遼河の氷上を涉り、田庄臺に退却せんとす。竹中少佐、かくと見て、第三、第四中隊をして、其上流を渡り、逃げ行く敵を尾撃して、一齊射撃を行はしむ。行ふこと數十回、其距離約千米突、乃至千五百米突許、敵の死傷算なし。時正午にして、西北面の河岸より、敵の遁走し來るもの益々多きを加へければ、竹中大隊は、更に進て之を追撃せしも、流石は彼れが得意の伎倆、其逃げ足甚だ早くして、竟に及ぶ能はず。恰も好し、此時西端騎兵大尉の一中隊を以て來るに會す。少佐因て己に代て大尉に急追を命じたるも、竟に其踪跡を失ひ、中途より空しく引廻せり。

前衛本隊、香川第二大隊長は、營口の東門を距る約五千米突の所に至り、隱岐聯隊より、營口西海岸の砲臺を占領すべきの命を受けたり。乃ち此日組織せし長堀中尉の撰抜小隊を以て前衛と

し、第七、第八中隊及び工兵小隊を率ゐて營口の西面に向ひ、川口第八中隊長を以て、其南方なる兵營に當らしむ。然るに營内なる清兵は、いつしか逃走して、一人の兵なかりし故、我は一發砲の勢なくして之を奪へり。尋て北方の兵營に攻め寄せたりしに、固く門扉を鎖しあれば、容易に乗り入ること叶ふまじと思はれし、流石は勝に乗ずる我兵なり、忽ち塙壁を躍りて營内に入り、門を開きて込み入りたり。こは又如何に、蟬脱の後にして、只一個の火薬庫と、所々に脱ぎ棄たる兵服の狼藉たりしを見るのみ。されば撰抜小隊は直ちに進て、砲臺を距る約八九百米突の所に進み、尙一步を移して、一個の小橋を渡り、凡五十米突許進みたりしに、轟然二發の地雷火は、我兵の二人を空中に飛ばしたり。尙引續き一發、甚近傍より爆發せしも、只一人の輕傷者ありしのみ。別に損害を見ず、但之と同時に、五門の海岸砲は、其堅牢なる砲臺上より、我軍の頭上目がけて、釣瓶打に打ち下せり。而して、其彈着甚だ悔り難きを以て、香川大隊は、其隊形を二線に轉じ、低地を利用して、之を避け、且つ工兵隊をして、其附近を調査せしめたりしに、其砲臺に至るの間及び、其兵營の前面に於て、尙無數の地雷火を布設し、以て我兵を壓殺するの計略なることを發見せり。因て齋藤工兵小隊長は、手兵をして其火薬庫附近にありたる地雷線を切斷せしめ、我進路の安全を與へけれども、香川大隊は、急に之を攻撃するの不利なるを察し、午後五時半、後

敵の地雷
我二兵を
飛ばす

地雷切
斷

方の一村落に集合せり。

隱岐聯隊長は、以上一般の指揮者となり、第二大隊の第五、第六中隊を率ゐ、軍旗と共に、營口東門前に進み、暫く竹中大隊の追撃せる敗兵逃走の状を見たりしが、香川大隊の手に屬したる西方海岸砲臺の攻撃、甚だ困難なるべきを察するや、自ら其豫備の二個中隊と、砲兵一中隊を率ゐ、第二大隊の戦闘地なる、右の砲臺下に前進し、適宜の場所に砲列を敷き、一舉之を踏破るの準備をなせり。されど日暮に會せしを以て、砲臺攻撃の無益なるを察し、同大隊をして、其夜は先づ營口海岸一帯の地を守備せしめたり。

然るに、同夜は降雪續紛咫尺を辨せず、將士等皆篝火を圍み宿營し、談笑すらく、天今宵を以て敵兵に幸す、想ふに砲臺の敵兵必ず遁走せんと。翌七日拂曉、香川大隊及び、砲兵中隊は、勢込で砲臺下に肉薄し、一齊開の聲を發せしも、臺上圍として應ずるものなし。是れ或は、黙々我を誘致する敵の計略ならんも測られじと、半信半疑、益々砲臺に近づき、終に呐喊聲裡に其中に突入すれば、臺中空くて人影なく、唯目を遮るもの、螺旋を脱ぎ棄たる加農砲と、山なせる彈藥とあるのみ。斯の如くにして、營口は陥りぬ。此役や、其攻撃意外にも容易にして、僅々一二時間の戦に過ぎず、而して我第一聯隊の第一、第二、第三個大隊の歩兵の占領するところなり。我に亡ふ所

砲臺上の
圍

營口全陥
る

は只二名の兵士ののみ。

戦争の當日、敵將福・喬の二名及び、道臺藩聯等は、遁れて西砲臺の中に潜りりとの説あり。要するに敵の敗兵は、往々田庄臺を指して没落せしもの、如し。初め牛莊落城の報、營口に至るや、宋慶落膽大方ならず、乃ち前記の如く、一時の防禦として、若干の兵を出し、我軍に當らしめ、以て倉皇退却の準備を卒へ、一齊田庄臺に遁れたりとの説ありき。其れ或は然りしならんか、今回我軍の戦利品は、大砲四十五門、小銃百八十挺、火藥(桶入)五十八個、(武力箱入)十五個、九鉛彈四箱、兵服五百着餘、兵帽二百餘、南京米五俵餘、軍艦(湖雲號)一隻、小蒸氣船二隻なり。

此役の戦利品

敵軍の戦術

今前々回戦闘の跡より、支那軍の戦術を観るに、清軍は兎角原野に於て、歩兵を展開し、用兵上の巧拙を以て雌雄を決するが如き、公明正大の法に由ることをせず、見よ太平山の戦の如き、彼れは戦闘上、最も要害たるべき地勢を占めながら、二月二十四日早朝我軍の其山上指して押寄せ、或は敢て之に抗するなく、我の蹂躪に委し、我の占領に任じ、而して戦闘上些かも價値なき西七里溝に栖籠りて、村落防禦をなしたり。抑も太平山は、蓋平營口間に崛起せる孤立の山にして、且つ要害の地、其頂上に至りて、北方に面すれば、附近の山川實に目睫の中にあり。故に敵軍之を固守して、我軍に當らんか、我は先づ其全力を注て、之を陥落するに非れば、決して營口方面に進

清軍逃走の順序

軍する能はざるなり。西七里溝の壘何かわらん、願ふに、支那軍が毎に山地を棄て、村落に據るは、只其一身の安全を思ふの愚計に外ならず。故に彼一度圍壁に據る時は、假令破烈彈の爲に、屢々損害を蒙るにも拘らず、頑然として抵抗す、然れども其身を蔽ふものなき原野に在りては、全く之れと相反し、一彈頭上に開き、足下に着せんか、恰も晚鴉の散亂する如く、忽ち其隊形を失ひて八方に潰走す。其性質の我兵と相異なる、管に雲泥月窟のみならざるなり。又支那軍は、其陣地の遂に支へ難きを察するや、其第一に逃る者は將軍統領、次は下級士官にして、最後に遺さるゝ者は、毎に兵卒なり。其走るに當てや、先づ號衣を脱し、民服に更へ、次に其彈藥を棄つ。但其銃器だけは、容易に放たずして、以て護身の用に供せり。而して彼の銃を携帯する、一般其法あるにわらず、恰も天秤棒を擔へるに似たり。故に之を遠望すれば、毫も土民の扮装と區別する能はず、されど、我兵に追躡せられ、其銃器たるを認らるゝに至れば、即ち之を地に投ず、或は云ふ、支那の軍法として、只銃器をへ携帯すれば、他のものは悉皆放棄するも罪とならずと。一方より見る時は、手に携へたる銃を地に投ずるは、最も易く、又外部に纏ひたる帶彈器を脱するも、さまで難事にわらず、然れども身に穿ちたる號衣を衣更るは、其時間を費すこと尤も多きに由り、其逃支度するや、即ち右の如く、其難きものより先に放棄するを便利とせしものならん

營口附近
の土人清
官を擄ぶ

か、茲に又營口市内外及、其附近の土人等、豫て清兵の爲に虐使せられたるを憤り、戦争の四五日前より暴行を働き、前に清兵の爲に酷令を布きたる王同知の邸を襲ひ、其屋舎を破り、其家財を奪ひ、尙ほ所在文武官の邸宅をも襲ひ、其家人を苦しめ、騷動の慘狀を逞うせんとせり。六日清兵の我が爲に驅逐せらるゝや、一揆は益々氣勢を強め、遂に堡壘若くは掩堡にありし砲架、其他の軍器を破壊し、又奪略して憤怨を泄さんとせしが、我將士の制止と、懲諭とにより、僅に其手を收めけるが、所々に於きて、復讐的の亂暴を働きたり。

營口居留
外人の保

營口は、西洋人の所謂牛莊にして、開港場のことなれば、同地には、幾多の外國人あり。されば、前記の一揆起るや、米國軍艦は、水兵を派して居留地を警戒せしめたるも、我軍の至るに及び、直ちに其兵を撤して、更に我軍に對し、居留地の保護を請願し、且つ其軍艦は、我に向て好意を表すること厚く、婦女幼童に至るまで、齊しく邸前又は路傍に整列して、我軍隊に懇篤なる敬禮を行ひたりき。彼等の日本人を見るや、誰彼に論なく敬禮を行ひ、來て談話を試み、或は其艦内に誘ひて饗し、或は貨物を贈りて、我軍の遠征を痛ふ。曰く、日本は米國の親友なり、曰く、日本の勝利を喜ぶは、猶我國の勝利を思ふが如しと。之れに反して、英人の奸黠惡むべきものあり、我軍營所の近傍に一民屋あり、米五百石、彈藥六十箱、其中に堆積す。故に我は之を以て、分捕品とな

し、車輛を携へ至り、内百石を搭載し、將に去らんとするや、一英人出來り、最も喫驚の風を裝ひ、曰く、是我米穀なり、中立國人の財産を搾取するは、何事ぞと、端なく茲に一場の争論は沸けり。我は兎も角も此車輛に搭載せる百石は、目下我需要に迫り、且司令官の命令あれば、取敢へず之を曳き去るべし、而して其殘米は、尙詳細に調査を遂げたる上にて、若し果して英人に屬するものなれば、直に之を與ふべしとて、其場は漸く事濟たり。然れども此米穀の英人の所有にあらざる證據は、第一敵兵の彈藥と、同一所に積み置ける事。第二は斯る戦時に、住民なき空屋の内に英人の番人をも附けず、五百石の米穀を打捨て置くの道理なき事、第三我兵營口に入りてより、此分捕米穀、彈藥には、兵を附して監視せしめしに、彼の英人等の故障をなさざる事是也。其他彼等は、我兵茲に來りしより、俄に思ひ付きたる如く、居留地以外の清商の家屋に、白紙を貼附して、英商某と書し、若くは支那人、或は英人一名其門にありて、我兵の入らんとするや、其紙を指して入門を拒めり。彼等の動作甚だ奇怪なりき。均しく外人にして、英米の心情此の如く、其れ異なるものあり。營口道路の説に依れば、道臺善聯は、英國領事館に隠れたる者の如しと。又同地に於て、西洋小間物を賣買する東順記の張松栢なる者の言に曰く、道臺は日本兵の營口に來るを知らず、其進路に向ひ、部下を率ゐる遁逃せんとせしに、市街に於て日兵の來るを瞥見し、非常

に狼狽して引返したりと。されば市街外に遁るゝ暇なかりしかば、市中何れにか潜匿せしらな
 ん。然るに、英國領事は、我第一師團の某將校に問うて曰く、此地の道臺にして、若し存在せば、
 貴軍は如何に之を處分するやと。某將校は之に答へて、それは固より軍司令官に稟達せんのみと。
 領事首肯して復た他を言はず、思ふに道臺は彼風説の如く必定同國領事館に潜匿せし者ならん。
 初め我軍の此地を占領するや、野津軍司令官は、福島・村木兩中佐を此地に派し來り、英米領事に
 之を報じ、且戰爭中危難に遭遇せしや否を慰問せしめたり。而して、同司令官は、其保護の措置
 を大本營に報告して曰く、三月七日福島・村木兩中佐を營口に派し、英米領事に告げらく、營口は
 我軍占領せり。市中の秩序を維持し、居留外國人を保護すべきに付、各自安堵すべしと。且又戰
 爭中危難に遭遇せしものなきやを慰問せり。之に對し、皆大に好意を謝し、在留外國人に傳へん
 ことを約せり。英米領事及び、英米軍艦の艦長より、日本軍營口を占領し、外國人は皆無事なり
 との電報を公使及び、艦隊の司令官等に發せんことを依頼せしにより、直に之を承諾せり。外國
 人は、皆我軍隊に好意を表し、萬事都合好し、居留地は三中隊を以て、土人の侵入を防ぎ、嚴重の
 取締を爲せり。英米の軍艦も、我取締に依頼し、頗る靜穩なり。又牛莊には、一人の宣教師ある
 のみなりしが、戰爭の日直に保護を與へ、恙なしと。即ち我の諸外國に對する、彼等の正邪に論

在營外人
皆我保護
に依る

なく、公明正大猶ほ日月の下土に照臨するが如し。

在營の私
立赤十字
社

此地市街に一の紅十字社(即赤十字社)あり、英人『ドクトルデリー』の設立に係る。蓋平の役及
 び、西七里溝の役に、清兵の傷きたるもの、約千餘人、皆此社に入りて治療を受けつゝありしが、
 牛莊既に陥り、我軍又南方より來り襲ふと聞くや、杖に繩り輿に乗せられて、遂に死せざるも、尙
 生涯不具に屬する者のみ残りき。茲に我醫學博士菊地軍醫部長・醫學士賀古軍醫正の兩名は、
 同社病院を訪問し、先づ傷者の有様を見渡せば、只一片の敷物だになく、單に藁藁の上に假臥し、
 傷所の疼痛に堪へ得ずして、一同轉轉悲鳴して苦悶する様、目も當てられず、其療養の不行届な
 るもの、實に驚くに堪へたり。然れども彼等は尙は自國の文明に誇り、我日本の醫道も、亦支那
 同様ならんと思惟せしもの、如く、兎角我に向ひ、差圖がましき言葉を並べ、治療器械の不足も
 あらば、之を補はん、食餌の缺乏もあらば、之を贈らん、醫師の不足もあらば、之を助けんなど、
 懇切らしき應答中、暗に我を蔑如するの風ありき。然れども、温厚篤實なる菊地博士は、潜に笑
 ひつゝ、敢て逆はず、程好く會釋して辭し去りぬ。時に三月八日、翌けて九日、我野戰病院は、當
 地に開かれたり。賀古軍醫正は、院長に充てられたり。院長は嘗て歐洲諸國を漫遊し、就英國
 諸病院の如きは、一々應訪して、其實況を視察せし人なり。病院は、或る客舎を以て之に充て、壁

我野戰病
院同所に
開く

同所外醫の訪問

の繕ひ、障子の張替へ、至らぬ限なき掃除に、室内は潔められたり。又患者には、一同新衣を興へ、例の藥劑室の上に、重ねるに青紅白の毛布敷敷を以てせり。其他施術室の如き、藥劑室の如き、何れも注意に注意を加へてしつらひければ、何に一ツの缺点だになし、果せるかな「ドクトルデリー」は、二三の醫官を従へて來れり。待設けたる賀古院長の心中如何、乃ち宮川通譯官を案内者として、先づ其病室に導けり。我負傷者の三十餘名は、整々として牀上に安臥し、聊か呻吟の聲を發せず、中に一名の支那負傷兵あり、毫も我兵の待遇に劣らず、支那兵は、デリー等に向ひ、口を開けり、曰く、余は日本人の親切叮嚀なるに感服せり、斯くも奇麗なる衣服を着け、日々美食を口にし、良薬はさて、其他の治療方端至らざる所なし、余は相成るべくは全癒の日冀くは日本兵たらんことを、眞實面に溢れ、感涙目を濕せり。是に於てかデリーを始め、訪問者の一同は、皆先づ第一の驚愕を喫しぬ。次に施術室に至れり。此日は殊に重傷の患者一兩名を此室に入れ、彼等の入り來るや、我は其目前に於て、巧妙なる手足の切斷術を施し了れり。是に於て彼等再び驚きたり。蓋彼等の最初來らんとする意志は、我をば手傳役にして、自ら主任に當り、治療せんとしけるものなりと察せらる。次で藥劑室に導きたり、此時彼等は驚きたりてふ低聲の下に、又耻してふ一言を私語したりと。されども傲慢のデリーなり、何がなわれかしと見回す卓

外醫の驚き

菊地博士等初めて外醫を識む

上に、一の切斷器を自撃しぬ、これこそと手に探る間もなく、デリーは吐けり、此刀は全く日本製なり、固より其切味の如何は知らざれども、現今我英國にて、使用するものは、蓋し大に之に優れり、御所望とならば、貸し與ふるも敢へて差支なしと言ひ放てり。此時まで默然たる菊地・賀古の兩國手は、最早忍び難く、應じて曰く、御親切は千萬辱し、去りながら、貴國現用の切斷器は、取はづし自在ならざるが故に、其觸接せし毒氣及び、不潔物を除去するに便ならず、我製法は、之と異り、取はづしは最も好都合にして、毫も毒氣を遺すの憂なし、但今足下の話されたる英國製といふは、即ち之れなるべし、こは先年我國に於ても、一時大に用ひたれども、右の如き缺點あるを以て、今は悉く豫備器械の部に加へ、使用するもの甚だ稀なりとて、現然其器具を出して、之を示し、又彼の傷所に依する細帯を出し、此物たる、從來歐洲諸國、即ち貴國などにも、現に大鋸屑を包みて使用しつゝありと雖も、こは癒着の結果、甚だ妙ならず、因りて我國は大鋸屑に代ふるに、藥灰を以てするの新發明をなしたりとて、其効能の著大なることを滔々と説明せり。流石の彼等も、今や赧然として赤面し、第三の大なる喫驚にて終を告げ、そこへ立ち去れりとぞ。嗚呼、我帝國は獨り軍事上に於けるのみならず、又醫術に於ても大勝利を得たるものなり。高慢なる英國の一ドクトルを走らせけるこそ、心地よけれ。

醫術の大勝利

第一軍及
第二軍一
師團の作
戦計畫

我軍は、營口の居留地、砲臺、官衙及其市街に守備兵（歩兵第一聯隊）を出し、其他は悉く市外に宿營せり。第一師團は、特に副官一名に通譯官を添へて、居留地に差遣し、外交上に關し、注意を爲さしむ。英國軍艦「フルヤブランド」號及び、米國軍艦「ベトネル」號の艦長、並に領事等は、出迎へて之に應對し、且つ酒肴（いひかち）を出して、我の勞を慰せり。初め湯池の會、第一軍司令官野津大將は、第二軍第一師團と合し、協力して營口及び田庄臺を攻撃せんとす。而して牛莊は、三月五日に、營口は同七日に陥落せしめんとす。之を大本營に上申しけるに、大本營は直ちに之を裁可（さいか）したり。然るに、戰機の動く所、計畫の範圍に拘はるを得ざるの已むべからざる情勢に迫られ、第一軍の第三、第五兩師團は、豫定期日に先つこと一日、即ち四日を以て牛莊城を擧げ、第二軍第一師團は、敵の逆襲に接仗せし餘力を以て、其一枝隊は突進して、亦期日に先ち獨力之を占領したりしは、前記の如くなり。而も初めは、第一軍は尙此事あるを知らず、約を守りて營口に向はんとせり。時に三月五日、潜匿（ひそかく）の敗兵等、我哨線を木頭橋に侵す、諸所塙壁内の敗兵、亦之に應じ、砲響暫く息まず、軍令突如として至る。曰く、第五師團の各部隊は、今より師團司令部の側に集合すべしと。師團司令部は、當時市街の東端にあり、既にして敵皆潰走せしかば、諸隊も集合し、軍司令部も、亦來會し、いよいよ軍は營口方面に向はんとす。第三師團及び、第五師團は、其

捕虜、分捕兵器を同地の守備隊に渡し、第三師團は本道より、第五師團は中間路より進み、而して第一師團は、蓋平方面より向ひ、三面相應じて營口に會せんとす。時に同日午後零時半、第一軍の此行歩兵第二十一聯隊（一大隊缺く）及び、騎兵大隊、山砲兵一中隊は、師團の前衛たり。本隊は、山口大隊、野砲山砲各一中隊及び、歩兵第二十二聯隊、工兵中隊より成れり。行程三里、軍及び師團司令部は、大臺里に、前衛は其南に、歩兵第二十二聯隊は、西大臺に宿營せり。六日、師團は此所より、更に別れて二縱隊となり、昨日前衛たりし諸部隊は、左側枝隊となり、本隊は其一個大隊を前衛として高刊に向へり。是より先、軍は一情報を得たり。曰く、敵の幾部分は、高刊にありと。是此行軍の一變せし所以なり。晨に宿舎（やど）を發して、高刊に向へば、傳騎來て同地に敵なきを言ふ。既にして又一報あり、曰く我第一師團は、早くも營口の敵と戦ひ、敵は遼河以北に遁逃せりと。將士等報を得て、失望す。小高刊を出で、高刊を経て、將に鳳凰甸に入らんとするや、營口方位砲聲頻りに、反響（はんきやう）更に反響を生じ、恰も遠雷の轟くが如し。今の砲聲は、營口に投鎗せる外國軍艦の祝砲なりといふもあり、或は營口は既に占領せらるるといふもあり、風説百端是に於て、第五師團は、悉く皆鳳凰甸附近に開進し、又將校斥候を派して、營口方面に向はしむ。平城大尉其任に當る。鳳凰甸は、營口を距ること二十五清里、黄昏（くわんごん）に至て、大尉營口陥落の狀を確りて

營口方面
の砲聲

第一第二
兩軍大舉
田庄進軍
進助せん
遼河渡渉
の困難

歸る。依りて軍及び、師團司令部は、先づ同地に宿營を定め、各部隊も相次で宿營地に就き、富岡中佐は、中心堡に宿營せり。七日、各隊皆其宿營地に在りて、軍令の至るを待つ。此日砲聲時々田庄臺方向に響けり。是に於て、我第一、第二の兩軍は、共に大舉して之を進助せんとす。是より我軍の前路に當り、最困難なるは、寧ろ敵兵にわらずして、滿州の巨流遼河の渡渉にあり。此河や、嚴冬祈寒の候は、凍合以て千軍万馬を徒涉せしむと雖も、今や春初和氣漸く至り、半は解氷の姿あり、是正に我軍の憂患たり。爰に我第三師團は、兵頭砲兵少佐をして、之を驗せしむ、三月八日同少佐は、報告書を呈し、曰く、三月三日、小官は耿家庄に於て、師團長閣下の命により、牛莊より藍旗溝(堡か)、小房身大房身を経て、遼河を渡り、其右岸なる下口子迄、野砲通過の目的を以て、通路の偵察を爲すべきの任務を受く。兒島參謀も、同所迄偵察として出張に付、同官と約するに、翌日牛莊占領後、直ちに出發すべきを以てし、又此偵察の實行を容易ならしむるため、特に歩兵一個大隊(大隊長鈴木少佐)騎兵一箇中隊(中隊長三浦大尉)を附せらる。

三月四日、我軍は正午十二時迄に、全く牛莊を占領せり。午後三時、小官及び兒島參謀は、約の如く騎兵中隊と出發す。歩兵大隊は、同時出發の筈なりしも、牛莊占領後、敗兵各家屋の圍壁に據りて、我に危害を加へ、危険少からざるを以て、同大隊は之が搜索に従事し居りて、同時出發する

敵の敗兵
我行路に
出沒す

こと能はず、併し大隊長鈴木少佐は、縱令深夜に及ぶも、可及的前進し、小房身附近に至り、宿營の決心なりき。牛莊出發後、騎兵中隊は、敗兵を搜索しつゝ、前進す。土民の言に依れば、牛莊戰鬪に於て敗れたる支那兵の大部は、營口街道に退き、田庄臺の方向に退きしものなし。然れども大房身には、若干の敵兵ありと、依て三浦騎兵隊長は、一層の戒心を加へ、周密に搜索を行ひつゝ、行進す。四日午後十二時前小房身に着し、先づ大房身を搜索せしむ。敵兵なしと報ず、依て行進を續行す。其村端に至るや、銃聲あり、敗兵の我一行に向ひて射撃せしなり。三浦騎兵隊長は、若干騎を以て之を撃退せしむ。此間敗兵を捕へ、敵情を尋問する等、茲に若干時を費したり。後更に行進を起し、大弓灣に向ふ。途中敗兵の我一行に尾し來るあり、或は側方より不意に小銃を發するあり、危険言ふ可からず、我騎兵は、悉く之を捕獲し、一も残すなし。斯の如く敗兵の我行路に出沒せし爲に、行進大に遅緩し、五日午前三時卅分、漸く最終の目的地たる遼河に着するを得たり。土民の言に依れば、遼河の右岸なる下口子には、敵の歩兵宿營すと、依て我騎兵を、左岸に止め、小官及び兒島參謀は、遼河水上を通過し、兩岸の景況を視察し、氷厚を検し、偵察の目的を達したるを以て、四時同所を出發し、我歩兵大隊の宿營地に至り、報告書を認め、遼河に託せんと歩度を急げり。是より先き、往路大弓灣に着するの前に於て、東方凡四五千米突を隔て、

敵兵あり

燈火を見る。衆曰く蓋し鈴木大隊の到着せしならんと、歸路に於ける行進隊形は、後衛を置き、本隊と若干の距離を存し、三浦騎兵隊長、兒島參謀は本隊の先頭に、小官は本隊後尾にありて行進したり。凡午前五時と思ふ頃、前きに認めし燈火のある所に達せんとせしを以て、我一行のもの、鈴木大隊の宿營地に着せしこと、思へり。時に彼の燈火の周邊に集まる一隊賊聲を發す。我一行亦之に應ず、蓋し後方にある者は、彼の鈴木大隊の歡聲を以て迎へられること、思ひしならん。然るに間もなく敵が來た「拔け刀」の呼號を聞く。道は容易ならざること、思ひ、小官は疾驅前方に進み、村落内に至れば既に敵の歩兵騎兵は我一行の周邊を圍み、圍争の眞最中なりき。既にして我騎兵の後方より至りしものは、又彼の敵を包まんとせしも、固より兵數寡少にして充分の戰鬥力を有せず、意の如く彼を撃退すること能はず、却て彼れ敵兵、我兵を見るや、數十人集り來りて取圍みたれば、唯各々刀を手にして、彼と闘ふのみ。然るに兵數を増加し、其歩兵は約三百餘の銃數を以て、村の東北端より我を射撃し、又家屋の窓より小銃を亂發するのみならず、彼騎兵も已に數十騎に増加せられ、圍争中なる彼我の間に飛入りて、我兵を害せんとせり。時に天尙暗く、互に彼我を辨じ難かりしかば、一時其混雜は名狀すべからざるの景況なりしが、我兵の沈着剛毅なる、能く此間に在りて敵に當り、縦横に切り回りたれば、彼を殺傷せしこと無

我騎兵重圍を突出せん

人馬の缺

中山特務曹長の注意

數なりしならん。而して此圍争若干分時の後、三浦騎兵隊長は、重圍を突出せんため、時機を失せず「襲撃」の令を下せり。此令により、我騎兵は、一時に襲歩に移り、敵圍を衝きて東方に進出せり。其勢の猛烈なるが爲め、或は馬足に觸れ、或は刀尖に傷られて、死傷せし敵も數多ならん。此突撃の際、最も困難を感じたるは、積雪の深さと、前方にある騎兵の爲めに、傷殺せられたる清兵の死體は、累々として退路に横はり、馬足を害せしこと是なり。我騎兵の若干及、武藤通譯官の落馬したるは、皆清兵死體の爲めに、乗馬の躓きて轉倒せしものなり。既にして、凡百米突許疾驅突出したる後、「集れ」の號令を耳にせり。此時我騎兵及小官に隨從せる宮崎軍曹集り居り、中山特務曹長は、三浦中隊長の所在を尋ね、其安否を氣遣ひ、又各兵を收容して、沈着事に従ふ可きを以てせり。咄嗟倉皇の際に於て、能く此等の注意を出し、各兵をして一層勇氣を出さしめたるは、曹長の注意密なりと謂ふべし。願て敵方を望めば、敵騎百餘再び我に向て襲來せんとするもの、如く、間もなく吶喊行進を起し、若し我騎兵をして此儘に置き、中隊長の所在を尋ねんとせば、徒に該兵の爲めに害を受けんのみ、特に我一行の任務は、戰圍にあらずして迅速に報告を爲すにあればと、乃ち小官は改めて騎兵隊長に代りて、其周圍に散在せる我騎兵を集め、特務曹長に命じ、敵襲を避くる爲め、速步行進を續行せしめ、敵影を見ざるに至りて、茲に一應人馬を檢

せしめしに、士官以下廿九缺員せり。次て鈴木大隊の所在に至らんとせしも、其附近地には、炎々燦火の昇るあり、或は敵兵なるや計り難しと、依て可成之を避るに如かずとし、乃ち北斗星に依りて、進路を東方に取り、平野積雪の間を進行すると約二時間餘の後、始めて一寒村に達せり。道を村夫に問ひ、午前七時三十分藍旗溝に到着するを得たり。是に於て報告書を遞騎に托し、小官及騎兵の一隊は、疲勞せる馬匹に水を與へ、午前九時頃牛莊に歸着し、直ちに師團司令部に出頭、復命を爲したり。兒島參謀、三浦中隊長等は、敵圍を突出の後、鈴木大隊の所在に方向を取りし爲め、小官は一時相會することを得ず、安否如何を知るを得ざりしが、兒島參謀は、具さに敵狀偵察の後、五日午前九時過ぎ牛莊師團司令部に歸着し、次で三浦中隊長、其他小隊長植野中尉・鍋島少尉・神戸戰警及び、二名の下士十四名の兵卒も、六日の午後に至りて、悉く無事本隊に歸着せり。又武藤通譯官は、敵圍突出の際、落馬して數多の敵に圍繞せられ居るを目撃したり。或は生命を保ち難しと思ひしに、豈圖らん幸うして敵圍を脱し、二日後師團に歸着するを得たり。我一行の敵圍を受け、勇戦奮闘したる際、敵の死傷者は、無慮百餘名に下らざるべしと信ず。而して我兵の最も、幸福なりしは、敵兵と鬪争の際彼れ我馬を害するを知らずして、一に人にのみ傷けんとしたるが故に、終始馬足安全なりしを得たり。敵の兵力は、歩兵約五百人、馬隊約二百人なり。

缺員の人
馬悉く歸
隊す

り。此多數の兵を以て、我少數の兵を圍み、一も殺傷し得ず、却て我少數兵の爲めに百餘名を殺さる。彼れか周章狼狽せしの狀、以て見るべく、實に憫笑の至りに堪へざるありと。又同日富岡中佐と、歩兵一個大隊を率ゐ、野砲及び臼砲を護衛して、中心堡を出で、田庄臺方向に嚮ふ。行くこと里程にして、砲聲を聞くに數回、今や已に戰圍は開かれたりと覺われば、一時も早く第三師團に合せんこと、極めて緊要なり、然るに雪深うして道路爲め梗塞するも、野砲及び臼砲はあらん限りの速力を以て引立て、兵士を勵しつゝ、張家勾を過ぎて、將に牛圈子に入らんとするや、遙に我大部隊の一地を集合するを見たり。是即ち我第三師團の各部隊なり、就て其攻襲偵察の狀を問へば、曰く、我歩砲連合の一隊(歩兵二中隊砲十二門)は、朝來田庄臺の敵に向て發射せしに、敵は我目的を知らずして、忽ち我術中に陥り、悉く其兵力を暴露したり。而して我桂中將は、直ちに其結果を軍司令官に報告すらく、敵は砲三十餘門を有し、其兵數凡一萬遼河を以て、其防禦線となし、我を迎ふるもの如しと。是に於てか、我軍田庄臺攻撃の策愈定る。

敵我術中
に陥る

第二十四 田庄臺の火攻

濶々たる千里の長流、横はりて滿州の原野を畫するものを遼河となす。舟筏は遠く遼陽以北に遡るべく、艦艇巨艦は舳艫相啣で河口に入るを得べし。河幅一千餘米突、其廣き所は實に二千米突あり、河北左岸の要地を田庄臺と云ふ。田庄臺は、右岸營口より牛莊城に通ずる航路を扼し、營口の北數里に在る一小都會なり。今や牛莊、營口の敗兵及び、敵の大衆之に據る、所謂水を隔て、敵を制するものなり、專守防禦に在りては、蓋し適當の地形ならん。従ひて攻勢の地位に立つ我軍の困難は推して知るべし。我野津司令官は、三月八日、張家勾に達し、桂師團の報告より、一般方畧を定め、翌九日を以て總攻撃の期となし、第三師團を、中央隊として正面よりし。第五師團を右側隊とし、賞軍臺より敵の退路に、第一師團を左側隊として、西南より敵の右側面に向はしめたり。其砲數は、第一師團の野砲三十六門（仙臺師團の野砲も亦之に含まる）、第三師團の野砲二十四門及び、山砲六門、第五師團の野砲二十四門及び山砲六門、并に軍の豫備砲廠の白砲七門及び、歩兵第二旅團の山砲、總計各種砲百零九門、此砲兵を總督するものは、即ち第一軍砲兵部長黒田少將なり。斯くの如き大兵力を統合して、敵に臨むは、我軍出征以來未だ嘗て聞かざる所なり。此勢にして、一時に猛發せんか、天柱爲に折け地維爲に壞るゝの思あらん。

田庄臺總
攻撃の期
定る

征清第一
の大兵統
合

是より先き、牛莊占領の翌日、即三月五日、桂中將は令を下して曰く、第十九聯隊の第一大隊を、留りて牛莊を守り、第二大隊の安山子より來り、交代するを待て前進せよ、其餘諸隊は、盡く南郊に集合し、以て軍司令官の命令を待てよと。既にして命令は下れり。曰く、藍旗溝に向ひ前進すと。而して是より、高刊・營口・田庄臺方面の敵を襲撃すべき計畫にてありしかば、各隊の部署再び變じて、大島少將は前衛司令官となり、三好聯隊の二大隊と、砲兵とを引率し、本隊は大迫少將の率ゐる佐藤聯隊・柴野砲兵聯隊を以て之に充て、かくて今度も第三師團の進路は、第五師團の右方に當りしが故に、左側には、別に枝隊を置かず、唯、右側枝隊のみを設けて、三好聯隊の鈴木大隊をして之に當らしめ、遼河の岸に沿うて南進し、師團の右側を掩護せしむ。而して獨立騎兵大隊の先發として、營口及、田庄臺方向を搜索せしこと、又耿庄子より牛莊に向ひし時の如し。此日牛莊を發せし、正午稍過ぎにして、藍旗堡に至り、少憩の後復行進を始め、薄暮各隊藍旗溝に着す。軍司令部は、第五師團と共に、大臺子に宿營せり。翌けて六日、高刊敵あるの報に接す。第三師團と協力之と攻撃すべき第五師團は、今朝未明大臺子を發し、高刊の東南面に向はんとし、第一師團は其主力を以て、大石橋邊より、高刊の南方老爺廟に向はんとす。第三師團は、即ち

春暖加は
りて行進
益困難

西北より高刊を攻撃するの任務を擔當し、先づ獨立騎兵隊を派して、午前七時三十分、藍旗溝を出發す。前日に引續きたる快晴に、暖氣愈加はりて、積雪融解、道路泥濘、足を没して行軍甚だ難めり。午後二時軍司令部も、第五師團と共に高刊に着し、桂師團長は、野津司令官と暫らく軍議を凝らせり。蓋し高刊の敵已に遼河を渡りて田庄臺に走れるが故に、爾後の計畫を策せしなり。是に於て、桂師團長は、師團を指揮し、雪泥を踏んで行軍二里、高刊の西南方に出づ。時に營口の砲聲を聞けり。師團は、給南府と呼ぶ一村落到宿し、前衛は白草凹と云へる前村に宿營せり。七日に至りて、前衛は白草凹を出で、本隊は給南府を發す。此日暴風雪にして、行軍困難を極め、爲に僅々二里餘を進み、師團は牛園子に宿し、己むなく小部隊をして敵情を探らしめ、前衛は前村に於て、師團と共に村落露營を張れり。村落露營とは、人員の割合に民家少く、爲に一部は舍營し、一部は露營するの法なり。外に留めたる馬は、全身氷結、忽ち白馬と變せし程の寒氣、想見すべし。第一軍司令官は、此日牛家屯に至り、第一師團長と會し、爾後の作戰に就き、協議する所ありき。

村落露營

八日午前六時、前衛三好聯隊は、宿營地を發して遼河沿岸に行進す。師團本隊たる佐藤聯隊は、牛園子の西に整列し、敢て進まず。既にして前衛砲兵の退却するあり。是より先き、猛烈なる砲

攻襲偵察

大島少將
大任務を
全くす

響銃聲は前方に起れり。砲兵は進みては退き、退きては又進み、前衛各隊終に悉く退却し來れり。蓋し此日前衛を指揮せし大島少將の任務は、攻襲偵察にあり。攻襲偵察、一に威力偵察と云ふ。敵軍を攻襲するの狀を粧ひ、敵の兵力を試すなり。偵察の假攻襲は、動もすれば、直に本職に移ることあり、若し直に本職に移らんか、偵察の目的は、終に之を遂ぐる能はず。故に攻襲偵察は、兵家にありて最も難事となす。かるが故に、古來首尾克く之を遂げたりし戦例は只那翁の生涯に一回のみとかや。然るに此日の偵察に於て、大島少將は首尾能く其目的を達したり。即ち少將は、前衛を指揮して先づ沿岸に出で、野砲十數門を排して、田庄臺を砲撃するや、敵は陸續對岸に出で來る。其數約六千人、砲を現はすと三十門、少將は之を認めて、便ち手早く引揚げたり。敵軍砲銃射撃の最中に、斯く脆くも退却せしを見、少將の任務を知らざるものは、味方の者さへ敵勢に辟易して退却せるものと誤認し、甚だ驚きたる風情なり。少將は之がため、士氣を勵かさんかと氣遣ひて、部下の各隊長に命じ、營口高刊地方より、退却せる敵軍の、果して遼河對岸に留れるや、且つ其兵力は、果して幾許なるやを偵察せんとの進退なるを説明せしめたり。此日栗飯原聯隊の藤本大隊は、河岸より半里、此方の南部、拉果に進みて、前衛と本隊との交通を保持し、且其兩側面を警戒し、又佐藤聯隊は、牛園子西方に集合し、以て明日の至るを待てり。

我軍田庄
砲を抜く

三月九日、我軍田庄砲を抜く。此日の戦略は、素と第一軍の二個師團と、第二軍の一個師團と、合力して三道より並に此地を攻撃するに在りき。而して第三師團は、正に其の中央の位置にあり。前村には、我砲兵の集合せるもの、敵の觀望に觸れしものか、飛び来る砲彈數ふ可らず。對岸の敵は、歴々二十門許にて、我に注射し來れり。蓋し敵軍昨日の我退却を見て、今日も亦此の如しと速了せしものならんか、前村の北端に早くも放列を敷きたる山砲中隊、其右側に於ける白砲七門、又其右側なる野砲中隊は、先づ應砲せり。かくて此曉三時半を期し、第一師團西旅團に屬したる砲兵第三聯隊の山砲中隊も、亦其左側に來り會して發砲す。之に加ふるに、第三師團本隊に分屬したる第二中隊の野砲、其他の山砲、第一師團の野砲も同じく皆集合して、一時此原頭ある我砲數は九十一門の多きに及べり。山砲、白砲は柴野砲兵大佐之を監し、黒田砲兵少將は、同じく近傍人家の屋上に佇立して、其總監督をなせり。大島少將も、屋上に出で來り、前方を展望せり。既にして、敵砲漸く弱り、今や沈黙せんとするに乗じ、味方の愈々射撃を急にせり。元來同數の砲を與へて戦はしむるも、味方の砲兵は、彼に對して倍數の射撃を行ひ得る熟練なるに、彼は今回四分の一にも足らざる砲門を使用するのみ、争でか我砲に敵す可き、終に全く沈黙せり是より先き、左側の銃聲頗る劇甚、第一師團は其表面の敵と射撃を交換するもの、如く、敵砲の沈黙

我砲九十
一門に及

敵砲全く
沈黙す

敵兵の狼
狽

する頃までには、最早敵を撃破して、其銃聲も殆ど息みぬ。間もなく山砲中隊は前進して本莊砲兵聯隊副官等は、前面を展望するに、對岸に櫛比せる家屋により沿ひ、下流より上流の方向に面せる一縱隊あり。陰れる天氣のととて、敵か味方かさだかならねど、愈々熟視すれば、確に敵なりけり。其竿に捲きたる紅白の大旗さへ、今は眼鏡に映じたり。一號令の下に、中隊の山砲は急速に射撃せり。榴彈は確に之に命中したり。敵兵が狼狽の狀、笑止と云ふも愚なり。續て急ぎ來れる野砲隊、亦之を目標として急射を行ふ。抑も此敵何れより來りて、何れにか去る。蓋し正面砲兵掩護の下に、左側第一師團の前進に辟易して、北方に遁逃するなり。既にして、後方より進み來れる第三師團の第七聯隊及び、第十九聯隊の歩兵、三個大隊散兵線を張りて、各、小銃を片手に横へ、繕地に進み行くこと約一千米突、遼河の東岸に小堤あり、倔強の掩堡たり。味方は之に據り、靜肅に沈毅に射撃を開始せり。敵は例の連發銃を以て、漫然之に應じたり。味方の機を見て、例の如く得意の一齊射撃を行ひしが、北走の敗兵は、散々に打たれて形影を隠せり。是より先き、山地中將は、第一師團を部署し、歩兵第三旅團に、第三師團の山砲一中隊を附し、西少將をして之を督せしめ、午前三時に大房身を發して、黒英臺を經、西の方遼河を渡り、河に沿うて西北に進み、田庄臺の西南に出て、敵の退路に迫る。砲兵聯隊は、午前三時半大房身を發し、

山地中將
遼河を渡

同じく黒英臺を過ぎり擺渡口の南方に至り、田庄臺に對し布陣せり。中將は、歩兵第十五聯隊及び、工兵大隊を率ゐ、砲兵六聯隊に次ぎて大房身を發し、砲兵陣地の左翼後に至る。騎兵大隊は、夜十二時双井子を發し、西少將の進路に向ひ、其左翼後を警戒す。第五師團は、未明遼河を渡り、正面の攻撃に相應じて敵の退路に迫り、西旅團と連絡して、全く田庄臺を包圍して、敵の一兵だも逃さざらんとせり。西旅團の、遼河を斜に横ぎり、氷上を踏むこと殆んど半時間、七時頃漸く田庄臺の西南一里許の地に達せば、天初めて明たり。而して敵營蕭として人聲なし、衆念へらく、敵其勝つべからざるを知りて、既に遁逃せしあらんと。七時三十分頃に至り、遼東北方に砲聲を聞く。此日曉來寂深くして、其何れの軍の砲聲なるやを、辨する能はず。故に疑惑の間に前進を繼續したりしに、已に八時と覺しき頃、田庄臺の西南部に在る（凡半里）一部落に達せり。此時激烈の砲聲起る。是に於て、初めて前の砲聲は田庄臺の敵が我砲兵と砲戦することを知れり。又旅團に附屬せる第三師團の山砲六門も、同じく田庄臺の西方に於て砲撃を始む。斯くの如く東西より發する砲聲、最も猛烈を極め、敵は遂に田庄臺の支へ難きを知りてにや、八時三十分頃より、西北方に退却を始めた。此時西少將の率ゐる第二聯隊の、既に全く田庄臺の西（退路）に出で、双臺子に通ずる街道まで迫りければ、敵は進退途を失ひ、或は遼河に沿うて南方に逃

砲聲を聞く

田庄臺東四の砲戦

敵兵四方に逃ぐ

ぐる者あり、或は飛彈を冒して西北に走る者あり。歩兵第三聯隊は、遠く第二聯隊の左方に迂回し、所々に敗兵を射撃して之を殛し、又西少將の豫備隊たる歩兵第三聯隊の第一大隊より、一二中隊を出して、敗兵を遮らしむ。即ち歩兵第二聯隊と、此豫備隊たる一二中隊とは、敵を夾撃したるなり。然れども此場合に在りては、助もすれば、同士打の恐れあるを以て、充分に遁兵を遮断するを得ざりしは、甚だ遺憾とする所なり。此敗兵の真先に當り、敵の統領らしき者、數旒の旗を樹て、二名の騎者之を擁し、我戦團線を貫きて逃るを見ければ、我軍頻りに之を射撃せしも、距離遠くして遂に中らず、幸にも逃走し去れり。是亦我大に遺憾とする所なりき。是時に當て、残れる敵兵は、西岸の防禦工事に、豫て據るもののみなり。第三師團の砲兵は、目標の敗兵を失ひければ、今や榴散彈の榴彈に復して、敵の防禦工事を破壊し、銃彈身邊に雨注するより、敵の怯める色を表はせり。最も右側に當りたる鈴木隊之を機として、小堤を飛び越え喊吶して突貫せり。左側の藤本大隊も、亦後れじと突貫す。河幅凡五百米突、雪の吹き寄せ、氷上に凝りて巖石の如きも、且つ避け且躡え逸散に對岸に押寄せたり。此時右方を回顧するに、大島少將は若干の兵を率ゐ、自ら先頭に立ちて河を渡る。岸邊は平地なれば、船體にもあれ、家財にもあれ、總て木材の類を堆積して、其陰に身を寄せ、壁に銃眼を穿ちて、敵は射撃を行へり。大島少

鈴木藤本大隊の突貫

將は、市の北端に出でんとし、士民に導かれて進む、途上敗兵の遺棄したる毛裘戎器堆を成し、又處々に死屍を見る、須臾にして桂師團長も、河の上流より、即北方を徒渉して市の北端に来る。此時本隊たる第十八聯隊は、其途中にて上流なる第五師團の打破りたる敗兵と戦ひ、又之を亂撃せり。而して第一師團は、午前十時頃に至り、歩兵第十五聯隊は、砲兵陣地の左翼より河を涉りて、田庄臺に迫れり。此時既に歩兵第二聯隊の一部は、田庄臺に進入し、殆んど殘兵を殲滅して、第三師團の兵と市内に於て會合せり。

第十八聯隊第二師團に會す

第五師團の活動

さて又當日第五師團の活動は如何にと顧るに、此日歩兵第廿二聯隊は、師團の前衛たり。警戒行軍を以て遼河の左岸に至りしに、此時已に第一師團及び、第三師團の方面に於て砲戦を開始す。彼我百餘門の大砲同時に交射するを以て、百千の霹靂兩岸に起り、其狀壯烈實に言語に絶えたり。既にして奥中將は、其先頭に來れり。馬を下て敵方を熟視するもの多時、忽ち令して曰く、歩兵第廿二聯隊は、河の上流を涉りて、敵の左側面を衝き、其退路に迫れ、野砲及び山砲は臺の東端に位置して敵を砲撃すべしと、各隊乃ち起てり。間も無く野砲は其第一砲車をして發射せしめたり。是より此方面に砲戦起る。敵は應戦し來り、其始めは遠く我砲列の後方千米突内外に於て、敵彈の破裂を見る。既にして、一彈我砲車の近傍に飛び來り、之が爲に砲卒の數名負傷せ

大島少將の嘆聲

敵兵路を擧げずして北へ

市街火攻の慘狀

田庄臺全く陥落す

し者あり。我歩兵は、此間を以て前進せり。歩兵第廿二聯隊、之か第一線たり。我第一線は、敵と數回の射撃を交へたれども、此時敵の已に色めきたり。彼は我第三師團の聚注せし曳火彈の爲め、頗る惱めり。剩へ我第一師團の其側面を衝くあり、是に至て、敵は退却の己を得ざるに至りぬ。我第一線は、猶豫なく其退路を奪はんとして、之を急追せり。山砲も亦其砲列を進めたり。遼河廣しと雖も、氷上歩いて渡るべし、氷上散兵線の躍進長蛇の如く、蜿蜒として河を掩ふ。援隊も亦機を見て進む。大島少將馬上に嘆じて曰く、遂に復た快戦を見ざるべしと。當日大島旅團の兵其一半は援隊たり。他の一半は、豫備隊及び砲の護衛たり。蓋少將の嘆、幾ど之が爲なり。歩兵第二十二聯隊は、特に一斉射撃を行ひ、時に緩慢射撃を行ふ。斯の如くにして、進みて敵の退路を奪へり。敵は遂に其逃出口を失ひ、辛くも途なき雪中を苦走し、海岸さして逃げ去りぬ。北ぐるものは路を擇ばず、彼等は只管錦州城へと急ぐものに似たり。

敵は大抵潰散したるも、尙或は民屋に潜む者あり。我軍一々之を探知驅逐するに迫わらず。因りて令を下して、其疑はしきものを火せしむ。火は市内の所々に起れり。黒煙滾々全市を掩ひ、延て遼河の岸に至る。敵爲めに其据を失して走る。夥しき戦已に熄みて日尙は天に中す。時に午前十時過ぎ、全く田庄臺を占領せり。而して兵火尙熄まず、北風之を煽ぎて炎焰四方に散す。

終夜燃續きて十日の曉に至る。此兵燹に罹るもの家屋一千餘、河船三百、市街蕩然として焦土とある。今や敵兵全く潰散し、遼東の野、更に一胡馬を見ず。嗚呼、湯とたる遼河、昨は敵の固めたり、今は我用たり。嚴然彼我を割して、彼復た遼東を覬覦する能はざるなり。戦收りて、第三師團は牛圈子に、第五師團は遼河の左岸に、第一師團も亦田庄臺を引揚げ、各前夜の舍營地指して歸還したり。

第二聯隊の奮戦

此戦に當り、最も奮戦したるものは、第二聯隊なり。故に今之を特記せん。初め第二旅團は、後家油房に宿營して後命を俟てり。八日午後三時に至り、田庄臺街道大房身に至るべしとの命令に接して、直に前進すること凡三里、黃昏其地に着す。乃ち第三師團と交代して宿營に就く。又命令あり、曰く、敗兵連合の敵約一萬五千、田庄臺に在るを以て、第一軍及び第一師團は、明朝之を攻撃すべきか故、第二聯隊は明朝午前三時大房身を發し、第二旅團の右翼隊となり、山砲一中隊と共に、敵の右側背を攻撃す可しと。其夜は進撃の準備に忙はしく、九日午前三時西に傾く月光に導かれ、雪路を踐んで進む。櫻井大尉は、第三大隊第九中隊を率ゐて先鋒たり。行くこと數武、遼河の堅氷を渡りて、彼岸に達せん頃、遼右方に當りて、篝火の天に炷するを視る。是即拉果に宿營したる第三師團の陣營なり。河に沿うて營口より田庄臺に通する街道を進むこと半里

露氣我に
幸す

許、夜ははのく、と白み、朝暾東山の上に出でしかば、露氣四方に塞がり、冥暎として明かならず、是敵にとりての不利、我に取りては敵の展望を免るるの利あり。乃ち遼河の岸邊より田庄臺を望み、迂回進行す。午前七時頃、田庄臺の方向にしばし砲聲を聞けり。勇みに勇みたる兵士の、砲聲の響に勵まされ、渺茫たる廣野の積雪を蹴立て、田庄臺の正背面約二千米突許に達するや、砲彈一發空を掠て第三大隊の進行せる附近に爆發せり。引續て、敵は猛烈なる攻撃を開始し、砲聲般々として天地を撼かし、硝煙空に漲りて乾坤爲に晦冥となる。此時既に我先頭第三大隊の、北田庄臺の西方村落に迫まり、敵の連發銃の猛射を冒し、地物なき平野を突進して、敵に肉薄せんとす。松永聯隊長、馬を陣頭に進め、聯隊旗と共に挺身し、明晃々たる日本刀を揮ふて、砲聲を應て敵陣に迫る。其狀壯絶勇絶、須臾にして、敵の旗色頗に動き、將に退却を始めんとす。是に於て全線吶喊の喇叭は、此軍より起れり。我兵は北ぐるを追ふて、敵の陣地を奪ひ、敵の旗幟を倒す。吶喊天地を震はす、我山砲砲列も、亦敵と僅に八百米突の距離を以て、田庄臺の後方を砲撃せしを以て、敵砲順に挫折し、砲員は砲を棄て騎兵は馬より落ち、歩兵は隊を亂して、東北方面に潰走せり。我兵之を追撃すると一里餘、敵を斫ること算なく、死屍累々として平野に横はり、鮮血淋漓として積雪爲に赤し。是より先き、井上少佐が第一大隊を率ゐて、

松永聯隊長の奮進

敵死山を
紅し積雪
紅さなる

第一大隊
突貫三回
に及ぶ

第三聯隊
の奮闘

第三大隊開進地の南方に於て、田庄臺を攻撃するや、敵は田庄臺西端の塙壁に據り、防戦最も力めたり。乃ち迫水少佐の指揮せる山砲六中隊を以て、敵砲に對し榴散彈を發射し、第一大隊は、突貫三回にして八時五十分田庄臺に突入し、九時五十分全く田庄臺を占領せり。而して聯隊長は、第二・第三の兩大隊に命じて、敗兵を驅逐追撃せしめ、田庄臺の市街内に至りて、進行を留む、此日の戦、敵將小宋慶（宋慶の甥）及び、馬統領我砲彈に中りて、同市内に戦死したり云ふ。然れども未だ確信すべき證據を認めず。

第二聯隊に次で、奮闘せしは即ち第三聯隊なり。此隊は同日午前二時五十分、大房身の北端に位置せる剛臥の間に集合す。此時第一旅團に附せられたる騎兵一小隊に、先づ敵の右側背を搜索せんが爲め出發せしめたり。午前三時十五分に及び、右翼隊たる第二聯隊の、行進を始め、第三聯隊は其第一大隊を以て旅團長の直接指揮下に屬せしめ、他は悉く左翼隊となり、第二聯隊の左方に並行して進む。一里半許にして、黒英臺の西北に於て遼河を渡り、西北方に行進中、午前七時頃、東方に砲聲の轟くを聞く。乃ち我砲兵の攻撃を開始せしことを知れり。須臾にして敵砲も、亦我軍に應戦し、銃聲砲聲々々然たり。敵の彈丸は、時に我行進路の近傍に爆裂し、榴散彈も飛び來りて高所に破裂するものあり。我兵毫も屈せず、各隊肅然として硝煙の起る方向に猛進せり。

八時十二分、第二大隊は命により急行し、兩銃砲を占領前進す。第三大隊も、亦左側に展開せり。此時敵の大部分は、北方に退却し、砲兵及び歩兵の一部は留まりて、我に向て防戦す。是れ其味方の退却を掩護するものに似たり。我第二、第三の兩大隊疾風の勢を以て、敵線に突撃するや、敵は二三抵抗の後、砲六門、死屍若干を遺棄して北方に潰走せり。我第一線諸隊は、之を追撃せり。而して第二大隊は、専ら正面の敵を攻撃し、第三大隊は、其左翼を以て敵の左側背に迫りて、其退路を遮断す。是に於て敵の西北方に退却したるものは、轉じて北方に退却し、復び我軍の追跡に逢うて、退路を東北方に變換せり。而して掩護のため、止まりし敵の諸隊も、我迅速なる運動のため、全軍潰滅、兵器糧仗を遺棄して退却せり。我第一線は、午前九時五十分に至るまで追撃を續行し、豫備隊は戦線の後方、約百五十米突に在りて、田庄臺方面より西北方に敗走せる敵兵に一齊射撃、或は各個射撃を加へたり。遂に十時頃全く戦闘を停止して、集合せり。此役敵は其兵力、少くも一萬に下らず、多くは奉軍及び、慶字軍中の精銳を抜擢したりしものなりしと云ふ。

又此日第五師團の北方に迂回せし、運動稍遲緩ありしため、當隊と西旅團との間に空隙を生じ、敗兵の大部分は此空隙より遁れ去りぬ。其數約五千、又西旅團の戦線を潛り西北に遁れたるも

敵の我戦
線を逃れ
し者

此役の敵將

の約一千、又遼河の南方に遁れたるもの約五百許り、此内或は我銃丸に中り、或は騎兵の襲撃する所となり、其途中に斃れたるもの尠からざりき。而して三方面に於て前後敵の斃れたるもの其數幾千なるを知らず。或ハ云ふ、二千餘名と。其戦鬪の激烈すらざりし第五師團の方面に於てすら、現に百數十人の死屍を見たり。中に姓「ロン」龍か隆か之を告げたる捕虜字を解せず、故に其名字を知らず、なるものあり。額の中部を貫穿せられて斃る。之を捕虜に問ふに、五營の長なりしと云ふ。是れ即ち我歩兵二十二聯隊の仕止むる所なれば、兵士等皆踴躍して曰く、斯の如くにして、今田中佐の弔戦たるを得べしと。尙捕虜及び、土人の言を聞くに、敵は吳大徴、并に宋慶之を督せりと且曰く、牛莊陥落の報此地に至るや、吳は直に去り、宋獨り營口より陣を移して、未だ退却の備に及ばず、早くも我軍の攻撃する所となり、一戦忽ち潰ゆるの不幸に遭遇せりと。蓋し其兵力を察するに、牛莊より集りたりし敗兵二二千・高刊・營口及び、西臺子・東臺子よりの退兵を總括すれば、約二萬内外の數を有したりしもの、如し。因に記す、宋吳の事、彼土傳る所を見るに、曰く漢字諸新吳大徴清師は、湘撫を以て自ら兵に將として、倭を滅せんことを請へり。其志は未だ曾て嘉みす可からずんばあらず。而して其奏調したる各員辨を聞くに及んで、文弱書生に非らずんば、即ち貴介公なりき。識者已に其迂を笑ふ。後其出す所の告示を閲せ

吳大徴

我死傷者

しに、又宋襄の仁を以て自ら命ず、知者固より此の如くあるか、是れ交綏を待たずして、已に必敗を決すべし。太平山の敗に至り、果して戦はずして潰ゆ、并に宋軍を牽動して、宋帥宋慶之の馬より墜ちて傷を受けしむるを致す。終に師を失ひ、地を失ふ。謂つ可し、徒に益なきのみならず、又之を害せりと。茲に聞く朝廷已に上諭を降せりと。見る可し、賞罰分明にして、寛假を容るざるをを。以て彼等が近状の一斑を見るべし。

戦利品

此役我軍の死傷は、第三師團に四十七名、第五師團に十九名、而して第一師團に下士以下即死五名あるのみにして、負傷者百二十餘名なり。其將校にして、負傷したる者は、篠原歩兵中尉及び、後に至りて火薬爆發のため千葉歩兵大尉、并ふ兵卒四五名微傷を負へり。又我戦利品は、大抵兵燹に燒盡され、其實際押收せしは、大砲十二門・小銃若干あるのみなりきと云ふ。

敵は海城逆襲以來、暫く猖獗の勢を示せしが、是に至りて我軍のために、悉く遼河以外に驅逐せられたり。以上諸戦報の陸續大本營に達するや、三月十日、勅語は、我第一、第二の兩軍に下れり。其第一軍に賜はりし所は、

勅語

其軍海城を占領せし以來能く沍寒に堪へ屢敵の來襲を撃退し今又進ん

第一軍の勅語

て鞍山站牛莊地方に轉戦し終に第二軍の一部と共に營口地方即ち盛京省重要な地點を略取す殊に牛莊に於ては激烈なる市街戦を以て大に敵の兵力を折挫せり朕深く之を嘉尙す

又第二軍に賜はる所は、

勅語

其軍の一部曩に蓋平を占領せし以來能く沍寒に堪へ來襲の敵を撃退し今又鞍山站牛莊地方に轉戦する第一軍をして後顧の患なからしめ終に之と協力して營口地方即盛京省重要な地點を略取す朕深く之を嘉尙す更に兩軍に對して、皇后陛下よりの御沙汰に

皇后陛下の令旨

令旨

我第一軍牛莊を占領したる趣、皇后陛下聞食召され、頗る御満悦、將校士卒の忠勇なるを、深く御感賞の旨御沙汰あらせられたり。

三月十日

野津第一軍司令官宛

參謀總長

令旨

我第二軍の一部營口を占領したる趣、皇后陛下聞食召され、頗る御満悦、將校下士卒の忠勇なるを、深く御感賞の旨御沙汰あらせられたり。

三月十日

大山第二軍司令官宛

參謀總長

右の敕語及び、令旨に對する各司令官の奉答文は、即ち左の如し。

敕語に對する第一軍司令官の答辭

爾來數月敵地に介在し、互寒に堪へ、屢々敵の來襲を撃退し、今又出で、鞍山站・牛莊・營口地方の敵兵を掃攘するを得たるは、實に陛下覆載の恩と、皇威聖徳の致す所にして、固より臣等の力に非らず。今や至仁優渥なる聖諭を賜ふ。洵に恐懼の至に堪へず、唯々前途益々奮勵して、愈々皇猷に副はんことを期す。謹で奉答す。

令旨に對する第一軍司令官の答辭

皇后陛下、我軍牛莊を占領したるを聞召され、特に優渥なる令旨を賜ふ。臣等一同感激の至に堪へず、益々奮勵、前途の成功を期せんとす

第一軍司令官の奉答

第二軍司令官の奉答

敕語に對する第二軍司令官の答辭

第二軍の一部、曩に蓋平を占領せし以來、能く來襲の敵を擊退し、又鞍山站・牛莊地方に轉戦せる第一軍をして、後顧の患無からしめ、終に之と協力して、營口地方を略取するを得たる者、一に 陛下の御威徳に因る。臣等勅命を奉じて敵國に入りしより以來、 陛下屢々優渥の聖詔を垂れ給ひ、今又特に之を嘉尚し給ふ。臣等益々感銘に堪へず、謹で奉答す。

令旨に對する第二軍司令官の答辭

臣等勅命を奉じて、敵國に入りしより以來、 陛下屢々優渥なる令旨を垂れ給ひ、今又我第二軍の一部營口を占領したるを聞召され、將校下士卒の忠勇なるを嘉尚し給ふ、臣等益々感銘に堪へず、謹で奉答す。

かくて、又第一師團は、田庄臺陥落の翌日、即ち三月十日運動を起し、同十三日まで悉皆蓋平城に引揚げ、諸隊一同城の内外に宿營せり。城内には、新に行政署を設け、之を金州行政廳の下に隸し、諸般を取締り、歩兵第十五聯隊粟屋幹、中佐に進み之が長たり。舊蓋平縣廳を以て署に充て、而して營口の守備は、隱岐第一聯隊長之に當れり、居留洋人及び、支那人民等交々來りて種々の請願をなすこと、日に幾回なるを知らず、隱岐大佐・川崎副官をして、一々之に應對處理せし

第一師團蓋平に歸政署の行

め、彼等をして毫も不便を感せざらしめたり。やがて營口商民は、舉りて大佐に賀狀を送りて曰く、營口衆舖商、叩賀大日本軍督大人鴻禧、並懇發兵彈壓土匪、禁止槍奪、以護地面、而安商民、感徳無極矣、と。以て我王化の盛なるを知るべし。以上海城逆襲以來我邦に達したる諸戰報は、大畧左の如し。

公報(二月十二日午前七時五十分、第二軍) (參詳金州發報二六三號)

内山參謀、十一日午後三時三十分發の報告左の如し。

海城よりの通報に依れば、宋慶は八日に營口を發し、蓋平に向へりと、昨日營口街道より來りし敵は、或は宋慶の部下なりしやも計り難し。

十日の夜、敵の首力は藍旗廠に宿せるもの、如し、十一日にハ進來の模様なし、猶ほ偵察中なり。

十日、敵兵退却の際、聶統領(桂林なるべし)は、ホンモンゼンを馬車にて退却中、我兵五十米突まで追及し、其馬を殺し、聶も腰に負傷せしも、之を捕ふる能はず、聶は車より出で、兵に助けられて歩行せりと。

公報(一月十九日午後一時七分發) (同、四十一分陸軍省發)

公報

十八日午前零時十分、海城第三師團軍醫長より、左の報告あり。

本日(十七日ならん)午前遼陽街道方向より、敵兵約一萬五千當海城の西北を圍み攻撃し來る。我兵城内の要地を據り、日没までに彼を撃退す。我死傷合計四十一・内將校一・特務曹長一・見習士官一・下士五、上等兵七・卒二十五・死者兵卒一名なり。軍司令部遼陽に居るに付、不取敢直に報告す。

海城逆襲の詳報

海城逆襲の詳報(一月十九日午後十時三十分大本營發) 十一時廿五分陸軍省發

一月十九日午前十時五十分發、野津中將より左の報あり。

遼陽方面の敵は、昨十七日午前八時頃より、遼陽・普賴屯・牛莊の三街道より海城に向ひ、攻撃し來る。

正午過には、其戦線を二里餘に延伸し、我前哨線の前方約一千五百、乃至二千米突の地に達せり。

第三師團は、海城北方の陣地に據り、午前四時頃まで防戦せし後、攻撃に轉じ、敵の右翼に迫り、午後六時過、遂に之を撃退せり。

敵の兵力は、一萬餘にして、大部は北方及び、西北方に退き、一部は牛莊方向に退きたり。

我死傷將校以下四十名、敵の死傷は取調中なり。

分捕品、大砲五門・拾槍二門。

海城逆襲の別報(一月十九日午後三時) 名古屋發

遼陽方面の敵は、五日以前(十三日)より、我に向て前進するもの、如くなりしが、一昨日より愈々我に近迫し、今朝未明遼陽・普賴屯・牛莊の三街道より、當海城を攻撃せり。依て我は充分之を引寄せんことを勉め、午後攻撃に轉じ、全く之を撃退せり。

敵は、鞍山站・普賴屯方向に收走せり。敵の兵力約一萬を下らず、我死傷將校一名・見習士官一名・下士以下四十餘名、敵の死傷取調中。

一月十七日午後九時

海城發 桂 中 將

海城逆襲の報(一月廿五日午後二時四十五分大本營發) 四時十分陸軍省發

廿二日午後七時二十分、海城發、中泉第三師團軍醫部長より、左の報あり。

遼陽街道の敵、約一萬、本日午前、又當カイゼン(海城か)の西北に進撃し來り、午後二時我之を撃退す我軍即死さし、負傷下士二・上等兵三・兵卒二十一・檐架卒一・人夫一・合計二十八。外に捕虜傷者一。敵の死體戦地に捨てあるもの百餘・之を以て推せば、敵の死傷許多なりし

海城別報

ならん。

右取敢へず報告す。

全上(二月廿五日午後十時十五分大本營發)
十二時三十分陸軍省着

二十二日午後十時三十分發にて、野津中將より左の報あり

昨日來、遼陽方向の敵再び海城に向ひ、來襲の模様ありしが、今朝に至り、去る十七日と殆ど同方面を取り來襲せり。

依て第三師團は、敵を六百米突に引付け、午後一時十五分に至り、歩兵第五旅團の大部、歩兵第十九聯隊の一大隊、砲兵三個中隊を以て、敵の左側に向ひ逆襲せしに、敵は狼狽敗走せり。加之歩兵第七聯隊の二個中隊、敵の退路に突出せしため、敵は益々狼狽し、其大部は東北方に、一部は牛莊方向に逃げ去りたり。

捕虜の言に依れば、吉林將軍長順・黑龍江將軍依克唐阿、此攻撃を指揮したりと。其兵力は二萬に下らず。

我損傷は、下士以下死者一・傷者二十六・敵の死傷は分らざれども、死骸百餘遺しありたり。尙ほ取調中。

橋木城逆襲の報

橋木城逆襲(二月二十日午後三時四十分大本營發)

五時十分陸軍省着

十七日午前十一時發、小川參謀長より左の報告あり。

今朝敵兵約一千、橋木城に襲來す。該地方守備隊林大隊は、之を撃退せり。我兵死傷なし、敵の死者三十・傷者不明。

橋木城逆襲の別報(二十日午後五時三十分大本營發)

六時三十分陸軍省着

十七日午後五時四十分發、小川第一軍參謀長より左の報あり。

今朝橋木城にて獲たる捕虜の言に依れば、敵の兵力は、歩兵三千、騎兵百砲八門にて、常の部下なり。橋木城攻撃の爲め、今回遼陽より來れるものにして、今朝の戦に與れるは、其前進部隊の歩兵千騎兵三十なり。

海城逆襲(二月廿五日午前十二時十五分大本營發)

日正午十二時陸軍省着

二十二日午前六時發、野津第一軍司令官より、左の報あり。

昨日午前八時、敵兵又海城の前面に來れり。唐王山方面に砲四門・遼陽街道に砲六門・安村方面に砲十門を現はせり。敵は午後三時頃退却せり。我兵死傷六名・内將校一名・微傷敵の死傷は未詳なれども、唐王山方面に百餘死体を遺しあり、捕虜の言に據れば、吳大徵は確か

に牛莊に在り、昨日我左翼に來りしは、同人の兵と、徐(邦道)の兵なり。

橋木城再逆襲報

二月廿八日午前十一時二十五分大本營發
十一時五十五分陸軍省發

二月二十六日午後九時發、第一軍參謀より左の報あり。

去る二十四日、某の前衛を以て三家子(橋木城の東北約七里)附近の敵を驅逐し、本隊は二十四日同地に達せり。敵の兵力は約三營にして、死体十三を戰場に遺し、主力は北方に退却せり。

海城附近の敵情は、前日に異なることなし。

第三師團進軍別報

二月二十八日、桂第三師團長より、同留守師團長の許に達したる電報は左の如し。

師團は、本日海城前面の敵を攻撃のため、午前三時運動を始め、第七聯隊は、午前四時射撃を用ひず、銃槍突撃を以て、ヘキトウサンを占領し、師團の攻撃を右翼より助く。第六旅團は、砲兵隊と共に沙河沿の左側より、長虎臺に亘り攻撃し、第六聯隊は砲兵第三聯隊と共に、沙河沿の敵を正面より攻撃し、午前七時沙河沿、長虎臺の敵を撃攘す。次で第五旅團は、砲兵聯隊と大富屯を攻撃し、午前十時正方面の敵を撃攘す。敵兵一萬五千、普賴屯・牛莊方面に

第三師團
別報

敗退後、第六旅團に砲兵の一部を加へ、遼陽方向の敵を攻撃し、二時東烟臺の高地を占領す。我負傷將校一名・下士以下八十五名・死者下士以下十名・敵の死体戰場に遺棄せるもの約百六十名。

全上第二報

三月一日午後八時半、乾線堡發、桂陸軍中將より、第三師團留守師團長の許に達したる電報は左の如くなりし。

師團は、昨夜遼陽街道ゴヨウ頭河堡附近に宿營し、今朝七時發、遼陽方面の敵を追撃せり。朝來降雪展望甚だ困難なりし。午前八時、我前衛より出したる將校斥候の報に依て、敵兵乾線堡及、其附近の高地を守備するを偵知したり。前衛司令官大島少將は、第十九聯隊と、砲兵隊とを以て攻撃し、午前十一時四十五分、乾線堡を占領せり。右翼枝隊と、橋木城より馬屯を経て來りし隊は、同時に乾線堡の右側を攻撃せり。敵兵三千は退却して、新臺子方面の高地に據る。我傷者下士以下七名・敵の死傷未詳・大迫旅團は、後柳臺子方向に前進せり。此の方面戦争なし。

第三師團進戰

三月三日午前十一時三十分大本營發
午後零時四十五分陸軍省發

二月二十八日午後七時、小川第一軍參謀長發、三月一日午前一時四十五分發左の報あり。
 第三師團は、本日午前四時運動を起し、藤本大隊は突貫を以て、先づセキトツ山の敵を擊攘し、尋て第六旅團は、沙河沿の敵を攻撃す。此時藤本大隊は、敵の左側背に迫り。八時全く沙河沿を占領せり。又一部隊は、大費屯(大富屯か)の敵を攻撃して、十時半同地を占領す。午後一時半に至り、師團は西畑臺より、大費屯に亘る一帯の地域を占め、今夜此線に前哨を配布せり。

我死傷は、將校以下九十八、敵の屍體は第六旅團の方面にある一條の道路のみにて五十五あり。敵の兵數は約一萬五千、依之を指揮す。砲は九門を有し、大部は北方に退却せり。

又午前九時頃、大部柳公屯より海城に向ひ攻撃し來りしが、我守備兵之を擊退せり。其兵數約三千なり。(此電報は、迎著なり、)

同上(三月一日午後一時四十七分大本營發、同、二時三十五分陸軍省發、)

三月一日午後七時半發、第一軍參謀より左の報あり。

第三師團は、本日(三月一日)午前八時出發、乾線堡に向ひ前進せしに、約二千の敵兵同地附近に抵抗せしが、前衛は和尚溝しわしやうこうより來りし林大隊と共に之を攻撃し、十一時四十四分、全く

鞍山站占領の報

該地附近を占領せり。其後前衛は、續て新臺子の敵を驅逐し、師團は前哨をして、臺子(新臺子か)より官粉寺を経て、柳相公屯に亘る線に配布し、本隊は乾線堡に宿營す。敵の兵力は、少くも五千にして、北方に退却し、其大部は前面數丁にあり。本日我死傷者五、敵の死傷未だ詳かならず、此日風雪甚しく、正午頃より止みたり。

鞍山站占領報告(三月五日午後六時三十分、分名古屋通信員發、)

三月二日、鞍山站桂師團長より左の電報あり。

師團は、今朝より運動を始め、前面の敵を攻撃せんとせしに、昨夜新臺子北方の高地にありし敵は、今曉迄に皆遼陽方面に退去す。依て直ちに追躡し、午前十一時半、戦闘なくして鞍山站を占領せり。敵は沙河鎮に退却せり。

牛莊城略取報告(三月六日午後八時七分大本營發、同、九時五十分陸軍省發、)

三月五日午後三時發にて、三月四日野津第一軍司令官より、左の報あり軍は豫定の如く、本日牛莊(牛莊城)を攻撃せり。某師團は、西方面に、某師團は、東南面に向ひ、敵を包圍しつゝ、午前十時頃戦闘を開始し、正午頃には各師團共、牛莊に進入せり。敵の一部は、營口方面に退却し、其大部は、牛莊市街の家屋に據り、頑固の抵抗を爲したるに因り、激烈なる市街戦

牛莊城略取の報

となり、我兵は各家屋毎に、逐次に之を攻撃し、午後十一時頃に至り、略々片付き、我軍大勝利に歸したり。

敵の死者は、千八百八十名・降服人約五百名・分捕品大砲十六門・其他馬匹糧秣・銃の数は取調中、我兵死傷二百六名。

牛莊城占領詳報及、其戦利品(三月九日午前八時十五分、名古屋特報、午後九時卅九分)

師團は、三日鞍山站にて第五師團と合し、午後師團は牛莊より遼陽に通ずる街道に移り、四日牛莊城に向ひ前進、耿家庄に對し、五日牛莊城の敵を北方及び北西方より攻撃し、第五師團は、我陣に並行前進し、東方より攻撃す。師團の攻撃は、前衛司令官大迫少將、佐藤聯隊を率ゐ、季家窩甫より、牛莊城の北面を攻撃し、大島少將、其旅團の大部を率ゐて、季家窩甫より迂回し、城の西北より包圍し、田庄臺と營口とに通ずる道路の南方に陣地を占め、後數回陣地を變換して、猛烈なる砲撃を爲し、田村騎兵大隊は、大島旅團の右側に在りて警戒す。午後二時、大島旅團は城の西北隅より突入し、彼れの背後より迫り、大迫旅團も、亦突貫して同二時半牛莊城を占領せり。

敵は潰敗散亂して、營口方面に退却したるが、逃げ後れたるもの約五六千は、牛莊市街の民

家に潜匿し、射撃を以て頑固ある抵抗を試み、夜に入るも、銃聲絶えず、戦闘は大迫旅團の正面最も劇烈を極めたり。

我即死將校は新保(正)大尉・熊谷見習士官、其他は下士以下四十名、負傷者は佐藤大佐・岩本・川口・兒玉の三中尉、下士以下百七十名、敵の死者は、目下取調中なれども、千二百を下らず、傷者は未詳、捕虜約三千・戦利品は白砲二門・山砲四門・小銃千五百挺・旗百六十・旗馬匹七八十頭・白米七八百石・彈藥山の如く、其他雜品多し。

三月五日

牛莊城 桂 中 將

名古屋別役少將宛

營口占領(十日午前一時八分大本營發、一時五十五分陸軍省發)

九日午後二時四十分、大山第二軍司令官より左の報あり。

第一師團長より、左の電報ありたり。御報告に及ぶ。

師團は、去る七日全く營口を占領す。

第一軍司令官と協議の上、砲臺・兵營・官衙・市街は師團に於て守備し、戦利品は残らず、師團に於て調査の後、其運搬し能はざるものは、追て第一軍に引渡す筈なり。

營口占領の報

田庄臺占領の報

又外國人居留地周圍には、我兵を配置し、我兵濫に入るを禁せり。

田庄臺占領詳報(十一日午後時五分大本營發、一時五十分陸軍省發)

午後二時發、大山第二軍司令官より左の報あり。

某師團長より左の意味の電報ありたれば、報告に及ぶ。

師團は、第一軍司令官よりの協議に應じ、八日午後歩兵一聯隊の守備兵を營口に殘し、大房身迄前進せり。九日第一軍と協力して、田庄臺の敵を攻撃せり。即ち歩兵某旅團は、遼河右岸より、我砲兵一聯隊、並に某團の全部は、正面より某團は某團の右より、遼河の右岸に移り、午前八時過より攻撃を始めたり。午前十時頃より、敵は双台子方向に退きしも、我某旅團の爲に、包圍せられ、我正面のみにても千に下らざる死者を殘し去れり。我師團の死傷四十名に過ぎず、營口占領後、取調べたるに、二月廿四日の戦にて、敵の重傷者にして運搬し得ざるもの六百人、外國人の赤十字病院に現在することを確りたり。九日の戦にては、小銃大砲の戦利品多し、田庄臺は、出火の爲め全焼せり。

是に至りて、遼東半島遺す所は、遼陽・奉天あるのみ。而して頃日、日清の媾和談判漸く熟し、兩軍陣を對して、一時休戦の姿とありぬ。事は載せて媾和記に詳なり。

皇后陛下
廣嶋行啓

願るに、大難西進以來、茲に半歳餘、皇上霄旻軍國を軫念し給ひ、未だ會て一日も大御心を安んせさせ給はざりしは、前々記の如くなりしかば、曩には東宮殿下之を遙察し奉りて、先づ親を廣島に枉げさせられて、親しく天機を候し給ふあり。今又皇后陛下の行啓あらんとす。時に三月十七日御發登、新橋より氣車に召させられ、同夜名古屋東本願寺別院に御一泊、翌十八日神戸に御着、同夜御用邸に御一泊の後、十九日午前九時神戸御發登、同午後五時五十六分廣島停車場に着御あせられたり。今若御の次第、並に廣島市民の歡迎し奉りたる模様の一斑を記さん、是より先き、同市民は、此の未曾有の盛事を祝し奉らんと、有志者は奉迎の準備に怠なく、市内各戸の國旗は、胎蕩たる春風に之を纏し、軒端には提燈を弔し、市内御通輿の御道筋には、白砂を敷き、凸凹を修め、万端清掃せり。又同市停車場構内の入口、松原口を始め、構内至る處大小の國旗、帳幕提燈等を飾り、物は清潔に、車は華麗に、而も凡て莊重なり。奉迎者の重なるは、高等官・有位帶勳者・判任官・縣會議員・市會議員・市參事會員・市吏員・辯護士・公證人・新聞記者・赤十字社員・商業會議所會員等にして、川上參謀次長、第一着に御迎ひ、續いて松方大藏大臣・西郷海軍大臣・渡邊遞信大臣・樺山海軍々令部長・鍋島廣島知事・奥山控訴院長等、文武の各員數百名御出迎ひとして

御聖德

停車場に御待受奉りぬ、停車場より大本營内の行在所に到る道筋へ、師團兵、各學校職員生徒、各團体及び、拜觀の人民にて充ち満ぬ、斯くて午後六時三聲の流笛、御着聲を報するや、百一發の祝砲を發ち、喇叭手の吹奏あり、停車場にて各大臣へ拜謁を賜ひたり。師團騎兵を以て供奉に充てられ、女官侍醫を從へ給ひて、御齒齋^{おつかい}、午後六時三十分大本營内に着御あらせられぬ。廿一、廿二日の兩日には、同市豫備病院に御慰問遊ばされ、其傷病者に對し、種々御物を賜はりき。あゝ、天皇陛下の御仁徳は言ふも更なり。國母とおはしまし、陛下の、殊に傷病兵に御心を垂れさせ給ふこと、今に始めず有難き極みなり。過般同陛下の御思召にて、今回の戦争に付、負傷若くは凍傷のため手足を切斷したるものに、各人工手足(手若くは足の形を製して、手足に擬したるもの)を賜はり、其費用は御手元金の内を以て充てらるべき旨達せられしとなん。兩陛下の御盛徳既に此の如し、かるが故に、百億万姓は、皆其徳を一にし、以て敵國に泣み、聖慮を安じ奉らんと努む。清民奈何に頑なりと雖も、豈我皇徳に歸服せざらんや。

又翻て敵國の現状を観るに、其民皆深く我恩威に服し、或は饗食壺漿^{たんじきやう}以て我軍を迎へ、或は日に子來、以て我徳政を仰ぐ、其の最も甚だしきものに至りては、欸^{くわん}を我に通じ、以て我軍の進行の速かならんを願ふものあり。其饗食壺漿して子來するものは、曰、日本國司令官陛下恩視、久聞日

敵國人民
我恩威に
服す

本聖主、大興仁義之師、來討暴虎之國、所到之處、人民如故、雞犬勿驚、真乃王者之師、逾於清兵十倍。我等小民、被清國賊兵擾攘太苦、糧草喫盡、豬雞不_レ留、小民皆引領、仰望日本大軍早到、我土逐_レ彼清兵、我等皆復得_レ生路矣。今幸天不_レ盡棄小民、日本軍幸得_レ到此、小民皆親如_レ父母、敬若_レ青天、無_レ不_レ感再生之徳。但見日本大軍、兵強將勇、國富糧足、替_レ天行道、爲_レ國救_レ民、戰無_レ不_レ勝、攻無_レ不_レ取、數月之間、已得_レ城地數座。只待_レ爭得_レ盛京軍民、同慶新年、至於奪_レ取北京、登_レ立王位、歲已_レ云暮、以待_レ來年、來春潛龍發、春雷震驚、陽升陰降、萬象更新、正日本設_レ立章程、新君登_レ位之時也。江山一統、王位萬年、必屬_レ大日本國矣。と讀んで此に至れば、即ち以て清民の感情、如何は之を察し得べし。又欸^{くわん}を我に通せしものは、野津將軍の報告によりて明かなり。其の報告書に曰く、盛京・遼西の交界に在る、『ブヒッゲゴン』(不明)に住する清國人民、『スナリスナコン』(不明)なる者、一の願書を携へ、第五師團に來れり。其願書及び本人の口供に依るに、彼は己等の受けたる虐待、及び其害の爲め、清國文武官吏の不法を怨み、之に反し、我軍の到る所、秋毫も侵すこと無く、仁義の軍たることを欣慕し、怨みを報ゆる爲め、同類六万を集め、我軍に内應して、奉天府を陥落せんことを求め、之が爲め軍資三万兩、借用せんことを請求せり。其言ふ所を察するに、強ち偽ならざるが如きを以て、善く之を待遇し、我軍の公明

にして、且つ強勢なる、敢て彼等の助を要せざることを説明し、彼等に輕卒事を起すこと無きを戒め、我軍に時々敵狀を報ずることを約し、若干の旅費を與へて、歸還せしめたり。其の他、追々我恩義に感ずるもの多く、遼陽近傍の者までも、暗に我軍の到るを待ち居る者多き由にて、海城に於る民政廳へ度々我軍の一日も早く、該地方に前進せんことを、請願し來る者あり、旁々民心の、我に歸向する一斑を見るに足れば、特に茲に上申すと、抑も倒戈の徒、我に用なしと雖、亦其の人心の歸向を見るに足る。是に於てか、遼陽の固、奉天の守、嚴且整と雖、我軍に於て何かあらん、況んや、其守兵は、敗餘烏合の衆なるに於てをや。

第二十五 榮城灣の上陸及榮城の占領

さて征清の事起りし以來、我各師團は前後出發、皆戰地に向ふ。遺す所は唯第二師團と、第六師團(長谷川少將引率の混成旅團缺)あるのみ。特に第二師團は、二十七年十一月を以て、悉く廣島に若し、久しく軍を駐め、日夜西天を望みしが、終に一月十日出發の命令に接したり。即ち同日より三日間に宇品港を發し、又第六師團は、同月十三日より門司を發す。其第二師團の第三旅團は、歩兵第四聯隊(仙)、全第十六聯隊(田)にして、旅團長陸軍少將眞愛親王(伏見)殿下之を率ひ給ひ、之に騎兵第二大隊、野全十七聯隊(仙)にして、旅團長陸軍少將眞愛親王(伏見)殿下之を率ひ給ひ、之に騎兵第二大隊、野戰砲兵第二大隊、工兵第二大隊、及び輜重兵第二大隊(以上四隊)を併せて、第二師團長佐久間中將之を統督せり。又第六師團は歩兵第十三・同廿三(以上)の兩聯隊、即ち第十一旅團にして、旅團長大寺少將(安)之を率ひ、之に騎兵第六大隊、野砲兵第六聯隊(以上二隊)、工兵第六大隊(鹿野村)及び、輜重兵第六大隊(本)之を併せて第六師團長黒木中將(桓)之を統統す。此大衆の向ふところ、即ち是渤海灣口の鎖鑰威海衛なり。初め第四旅團長の仙台を發するや、其部下に訓示して曰く、眞愛旅團長の職を奉じ、忠勇なる汝等と共に千歳未曾有の外征に従事す。是誠に畢生の光榮なりとす。然

第二師團
宇品を發
第六師團
門司を發

第四旅團
長官訓示

第二師團
長に下せ
し大山大
將の命令

れども、貞愛用兵の結果は、畏くも皇室御威稜の振否に關し、旅團軍紀の消長は、最も國家の隆替に關す。而して充員當初に於ける師團長の諭告は、汝等と共に銘肝忘却すべからざる所にして、誓て之を貫徹せしめざるべからず。貞愛の任務實に重、且大と謂はざるべけんや。能く此重大の任務を完うして、我武を異域に擧ぐることを得るは、我神州列聖の御威徳と、今上皇帝陛下の御聖徳とに依らざるはなしと雖も、亦偏に汝等盡瘁勵精の力に依らざるを得ず。汝等の堅忍不拔なる志操、汝等の忠勇義烈なる氣節、特に汝等の寒國に鍛煉せる膽力を以て、彼の實地に向ふ。豈能く其偉勳を奏せざることをあらんや。是貞愛の深く信じて疑はざる所なり。今出征の首途に於て、我旅團の責任を明示す。汝等能く此意を體し、奮勵努力せよ。聊茲に粗酒を饒し、併て我旅團の前途を祝すと。是に至て、始めて酬志の途に上り、皆戰地に向へり。而して、宇品・門司出船の光景と、送者の盛なるとは、一に先發軍の時の如し。

かくて、此第二、第六の兩師團も、亦同じく我第二軍に屬し、軍司令官大山大將之を總統す。而して第二師團は、同月十六七日頃に至り、我艦隊の假根據地なる大連灣に集合し、佐久間師團長は、十六日上陸の後、直に馬を馳せて金州なる第二軍司令部に至り、大山大將に謁せしに、大將は即ち左の如く命令を傳へたり。

- 一 敵の艦隊は威海衛港内に在り。
- 二 威海衛及び、其近傍に在る敵の兵力は、一萬二千を下らざるものゝ如し。
- 三 龍巖島附近に上陸せんとす。
- 四 成山角燈臺の占領、同所附近に於ける電信線切斷及び、信號臺設置は、艦隊の陸戰隊之を實行する筈なり。
- 五 貴官は、艦隊の掩護によりて上陸點に至り、上陸後は、速に榮城灣を占領し、後續團隊の上陸を掩護し、且つ威海衛に通ずる諸道路及び、敵狀を偵察すべし。
- 六 其師團及び、後續團隊の上陸に關しては、別に上陸命令を與ふ。
- 七 其師團に屬する工兵第二大隊の一中隊は、上陸の際本官直接の使用に供する爲め、留め置
- 八 くべし。
- 九 第一師團に屬する山砲兵一大隊及び、同彈藥一縱列は、上陸後貴官の指揮に屬せしむ。
- 十 本官は運送船橫濱丸に搭して、二十二日揚陸點に至る。
- 十一 右の中、上陸命令とは、上陸に要する船舶の數、搭載人員及び、貨物の數量、船舶碇泊の位置、船舶

間の距離并に、上陸順序等の規定を云ふなり。而して同月二十日頃には、第六師團も同じく大連灣に集合したり。

是に於て、敵情偵察として第一遊撃隊の吉野・秋津洲・浪速の三艦は、一月十八日午前六時出發、山東省なる登州府に向ふ。三艦船艦相叩みて、南、三山水道を出で、針路を南西、微南西に取り、九哩の速力を以て走る。右方に見ゆるは、大連より旅順を抱ゆる一帯の峻嶺にして、左なきだに赭岩赤土、樹木もなき冬枯の景色、滿目悽然、山瘠せ骨高き頂より吹下し來る寒風は、颯々として吼るに似たり。絶間なき暗車の音は、轆轤として浪に響き、一轉又一轉、艦尾より二條の白き波紋を曳いて進む間に、音に聞えし黄金山・老鐵山は、早くも煙靄縹緲の中を姿を隠くして、艦は正に直隸海峡を横ぎりつゝ、前面遙に山東省の大陸を望むころ、綿の如き雪は霏々として降り來り、山東省一帯の地は、全面に白氈を布きて、天涯茫茫たり。既にして午後二時過ぎ、我艦隊は恰も登州の灣外に達しぬ。雙眼鏡を取て遙に之を望めば、四面銀界の中、胸壁高く繞りて蜿蜒長蛇の如く、四門の高樓空に聳ゆ、其一端緩く海岸に延きて、近陵の上高閣あるを認む。名つけて蓬萊閣と云ふ。傍に小崗あり、高二百五十呎許、丹崖山と云ふ。上に信號旗を樹て、頂を平にして砲座を築き、其上一門の野砲を備ふるが如く見ゆ。登州府は山東省中濟南府に亞げる一大都會に

第一遊撃隊の敵情偵察

登州府の灣外に達す

登州府

して、芝罘を西に距ること我二十里餘、渤海灣の咽喉なれば、平時と雖も砲兵五百餘名、歩兵二百餘名駐屯して不虞に備ふ。城廓は、東西七百六十米突餘、南北九百七十米突餘あり。市街は榮商富家多きにあらざるも、夏期は支那矮船の輻湊する所にして、商業盛なるが故、咸豐八年(我文久、天津約條締結の時、此地を以て開港場と定めたりしも、後今の芝罘に改めたるなり。

丹崖山上の信號旗の艦隊の戦地準備

かくて我三艦は、徐々として灣外を東より西に横ぎり、丹崖山近く左舷に見えて、我吉野は既に之を通過し、秋津洲も又之を過ぎりて、今や浪速の其前を通過せんとする比、丹崖山の信號臺上、俄に高く一旂の赤色旗を掲ぐるを見る。是に於て我亦戰闘準備を整ふ。合圖の喇叭は、一聲高く滿艦に響渡ぬ、總員皆走りて其部署に就く。忽ちにして大砲の掩布は拂はれ、砲口栓を去られ、火藥庫よりは昇降器を以て絶えず藥筒彈丸を供給するの準備を整へられぬ司令官幕僚は後艦橋に在りて、艦隊の運動を指揮し、艦長は前艦橋に在りて一艦を率ひ、副長は艦長を輔佐して其傍に在り。航海長・砲術長・水雷長・分隊長・機關長・軍醫官・主計官・少尉候補生・各其部下を督して其配置整然、今や唯最後の一令を待つのみ。斯くの如くにして、我艦隊の針路を左十六點に轉じ、再び灣外を西より東に横ぎり、吉野を先頭として、秋津洲・浪速之に次げり。此間に戰機は一轉瞬に迫り來り、忽ち大軍艦旗は、大橋頭上高く掲げられ、やがて適宜の距離に至りて、『打方

始めて空砲の發火

敵始めて砲を發す

始め』の號令下るや、菊麿王殿下の管し給へる前部旋回砲（十五珊）を始として、轟然發火を始む。然れども是空砲なり。戰を敵に挑み彼の抵抗を試みん爲めなり。而して敵は更に應砲せず。敵の兵營軍旗も見え、又騎兵の駈回る有様も見ゆるが、蓋し彼れは我不意の砲撃に驚きしきり。既にして、吉野半ば其前面を過ぐる頃、漸く彼は抵抗を始めんとし、放列を東の胸壁外に散くと覺ゆしが、空薄暗くして砲身の所在判然ならざりしも、土手の陰數個所より、硝煙渦まきて起れり。されど小口徑の野砲と見えて、彈着皆我艦に及はず。往々半にして空しく海中に没しぬ。斯くと見る我艦は、争でか猶豫あるべき、實彈を詰替へ、敵の放列目掛けて切て放てば、彈丸は飛で敵の陣地に沙塵を揚ぐ。三艦連發し、發する毎に總員注視し、命中する毎に拍手喝采艦に滿つ。既にして夕陽西に没するを見て、此夜の直隸灣中の陀磯島に寄泊したり。蓋し三艦の此行、敵を牽掣するの目的をも兼たるものなり。

翌十九日は、午前九時過ぎ陀磯島を接錨し、再び登州灣に向ふ。陸上を一瞥すれば、流石怠慢の清兵も、昨日の刺戟に起て、警戒大方ならず。やがて秋津洲は、早くも一發昨日の放列に向ひて打込み、次で吉野も又放ちぬ。而かも敵は應せず、遙かに郊外を見れば、土民奔竄難を避けんとするもの、如し。我艦隊は、一彈又一彈、戰を挑むも、敵は應戦せざれば、少しく手持無沙汰の折柄、遙か西方の海上に、一隻の矮船浮んで乗合四人、其一人は高く白旗を掲げ、其一人は米國旗を手にして、我艦目掛けて漕ぎ來るあり。衆目は皆此奇怪なる小舟に注がれぬ。此時丹崖山上信號旗の傍に、一陣の白煙捲き起ると共に、早や敵彈は、我艦の左舷船首より斜に、右舷船尾に向ひ、艦員の頭上僅かの所を掠め去る。之と同時に彼れが昨日の放列の、砲數を加へて、一度に火蓋を切り、數個所に硝煙起る。是に於て吉野は速力を少しく早めて、先づ丹崖山下を通過し、山上目掛け、仰角を高めて巨砲を打込みたり。吉野去りて、秋津洲續き、秋津洲去て、浪速來り、輪轉砲撃、頻りなり。敵の胸壁外の放列は、多く野砲なるも、丹崖山上のもの、少なくとも十二珊なり。彼能く應砲し、往々命中に近きものあり。當胸壁外に十二珊一門をも有せるもの、如し。我艦隊は、一回通過し、更に再度通過の目的を一にして、胸壁外の放列を狙撃す。三艦より進る硝煙は、船々天に漲り、通常榴彈は、見事彼等の放列に打込みて、四面暗澹沙煙を飛ばす。敵の氣勢此に頓挫し、何時しか消失せて、砲聲は遂に息みぬ。唯僅かに命脈を保てるは、丹崖山の砲座のみ。然れども舊式砲と覺しく、速力緩慢、彈着半ばに及ばずして、多くは海中に落つるの有様なり。我艦は最早目指す敵なく、且つ意外に隙取りて、時間に制限あることなれば、直に此地を引上げ、威海衛の方面へと向ひたり。此日場合に依りて、陸戰隊を上陸せしめんとすの計畫にて、

一隻の矮船

忽ち敵彈通過す

交砲甚烈

敵勢頓挫

百十九

陸軍隊上
陸中止

鯨島少將
の報告

吉野副長山田少佐は指揮官となり、同砲術長岩本大尉は、參謀となり、各艦より一中隊の陸戰隊を組織し、已に辨當まで準備し居りしに、今朝降雪甚しかりし爲め、陀磯島の出發意外に遅延し、時間切迫せし故、其機を得ざりしは遺憾と謂ふべし。此夜途中に於て、威海衛を偵察し來りし高千穂に會せり。彼は信號して曰く、敵艦は異狀なしと。翌二十日山東岬角に至り、我陸軍を護衛する本隊と合したり。此砲撃の有様は、鯨島海軍少將より報告せらる曰く

『明治二十八年一月十六日附の御訓令に依り、同十七日付を以て報告し置きたる如く、高千穂艦へは同十六日黎明、威海衛を偵察すべく命じ置き、十八日午前六時、第一遊撃隊の吉野、秋津洲、浪速を率ゐ大連灣を發し、登州に向ひたり。此日一より二の北西風あり。正午十二時に至り降雪あり。漸く甚しくして午後一時には、全く隣艦を見ることを得ざるに至れり。一時三十分、少しく雪の霽間ありたるを以て、長島東北に碇泊すべしと信號せしめたり。但し此時に於ても登州附近一帯は、雪雲の爲めに蔽はれ、全く登州を認め得ざるを以てなり。然るに、午後二時四十分に至り雪の全く霽れ、風上にも亦雪雲の來るを認めず、依て碇泊することを止め、直ちに登州沖に向はしめたり。午後三時二十分登州府城の前面を、東より西に通過し、其景況を視察す。府城東門外に兵營數十棟あり。登州島の頂に砲臺あり、砲二門を備ふ。我艦

隊が海峡を通過するを認め、先づ東門外の兵營にて赤地に白丸の旗二旗を立て、續て登州島頂にても、赤旗を掲ぐ。府城東門外の海岸に人馬の往復頻繁なるを認め。又時々小口徑砲發砲の響音を聞く。午後三時四十五分引き返して東方に向ひ、戰團の信號を爲し、敵壘を砲撃せしめ、空砲及び榴彈を發射すること二十分にして、四時五分砲撃を止めしむ。此間登州島の砲臺よりは發砲せず、府城東門外の海岸より野砲凡そ八門にて、我に向て發砲す。中に十二門砲と推考せらるゝもの一門あり。唯此砲よりの彈丸は、稍々近く我に達すれども、他は悉く遠せず。我軍の命中に依り、一時城内二個所に火災起りたるを認む。午後四時四十分、陀磯島に向ふ。六時頃より風止み、雪模様となりたり。六時三十分陀磯島サイヨウ灣に碇泊せしむ。此夜警戒を嚴にすべしと命じたり。一月十九日早朝、雪雲は猶ほ登州方向一帯を蔽ふが故に、暫く抜錨を見合せしめ、午前十時に至り、雪稍や霽れたるを以て、出港して登州沖に向はしむ。午後一時東方より登州府前に至る、府城外一帯の景況は、昨日の如くならず。所々に赤旗を立て、人馬の往復一層頻繁なり。午後一時十五分、戰團の信號を爲し、砲壘を砲撃せしめ、空砲及び榴彈を發す。此時一艘の支那小船に、西洋人一名乗り込み、米國旗と自旗とを掲げ、府城の水門より出で來れり。然して後には米國旗のみを掲げ、我艦隊に接近して砲撃を傍觀し居れ

り。敵は登州島砲臺及び、府城東門外砲臺より發砲を爲せり。而して登州島砲臺よりの彈、多く我艦隊の近傍に来る。東門外海岸の野砲は、凡そ二十門ありと認めたり。午後一時五十分右方に旋回して登州島に向ひ砲撃を行ふ。二時三十分、右方に旋回して登州に向ひ、戰鬪の信號を下さしむ。午後三時、山東岬角に向ひ航進せしむ。六時三十分、高千穂と出會し、『威海衛に敵艦あり。』の信號を得たり。午後十一時十五分、威海衛沖二十海里の所に至る。此頃より本艦隊及び、運漕船等の通過を認む。一月二十日午前六時、山東岬角にて本艦隊に合す。』

上陸委員

此間に於て第二師團は、軍の命令に従ひて大連灣を發せんとし、先づ上陸委員を設く。平山海軍大佐・原田大佐(兵站)、大井上海軍少佐・山田步兵大尉(軍醫)、吉松海軍大尉(艦隊)を本部として、船掛(船の進退、石炭及び、水の供給、船性の)には、黒井海軍大尉・人馬物品卸掛(各運送船毎に此役員あり、其上下、小荷物の出帆到着等の事を管す)には、山根工兵中佐、各當該師團參謀一人と定りぬ。斯の如く準備已に整ひければ、一月十九日より、運送船は漸次上陸點なる榮城灣に向へり。其擁護として、此日午前十時十五分、天城・磐城・大嶋・摩耶の四艦先づ拔錨し、十時三十分、八重山・愛宕の二艦次で發し、最後に筑紫・赤城の二艦、又十一時十五分に錨を抜く。旗艦松島も、亦高く將官旗を橋頭に翻へし、躍然として大連灣を出で、千代田・橋立・嚴島の三艦之に續ぐ。之

擁護艦隊

運送船

を本隊と爲す。本隊の後には、第二遊撃隊扶桑・比叡・金剛・高雄列を正して従ふ。此行我艦隊の任務は、陸軍運送船を擁護するにあるを以て、自由に進航する能はず。大連灣外に於て、更に隊列を整へ、然る後始めて航進す。陸軍運送船は、總て十九艘、第三遊撃隊天龍・大和・武藏・葛城之が嚮導たり。即ち天龍最も先きにあり、遠江丸・攝陽丸・鹿兒島丸・山口丸の四運送船之に従ひ、五『ケーブル』を隔て、大和先導となり、金州丸・三池丸・豊橋丸・新發田丸の四艘之に次ぎ、又同じく五『ケーブル』の間隔を以て、武藏先導となり、有明丸・宗谷丸・兵庫丸・小倉丸・立山丸の五艘之に尾し、最後に葛城先導して、酒田丸・名古屋丸・廣島丸・薩摩丸・空知丸・和歌浦丸の六艘を率ゐ、本隊及び第二遊撃隊の左舷に、斜に軍艦陣を作り、徐々として進航す。此運送船の前に、別に海軍運送船相模丸・西京丸・江戸丸・伊勢丸の四艘、支那「ジャンク」を率ゐて従ひしを以て、一隊の船數總て二十六艘、之に本隊及第二遊撃隊の八隻を加へて三十四艘、蜿蜒として、長蛇の如く堂々波を蹴て進む。其壯觀實に言ふべからず。二十日午前五時頃、艦隊は山東岬角沖に達し、同岬島の燈臺を右舷五六哩の處に見る。既にして、第一遊撃隊の登州を砲撃して歸るに會し、相共に列を整へて進み、同六時頃榮城灣に着す。時に雪大に降り、海上溟溟として咫尺を辨せず。忽ち陸地の方に砲聲頻なるを聞く。既にして降雪少しく息み、天地稍や霽る。灣内を見れば、陸地

上陸偵察

に接して筑紫・赤城・大島・鳥海・天城・八重山・愛宕・摩耶・磐城等の諸艦一列となり、筑紫・赤城・大島・鳥海・天城の五艦よりは沿岸の村落樹木等を目懸け、息をもつかせず激射しつゝありき。初め我先鋒隊八重山艦等は、當日午前三時を以て灣内に至りしが、雪花繽紛更に前後を解せず。漸くおして豫定の地に着し、八重山先頭に在て一隻の端艇を卸し、愛宕・摩耶亦各一隻を卸し、何れも海兵若干を載せ、之に陸軍の將校兵士合して十餘名を加へ、上陸偵察として岸頭に向へしむ。一行總て三十一人、艇は八重山の士官海軍大尉大澤喜七郎之を指揮し、速射砲を載せて進む。而して其漸く岸に近くや、銃砲の聲は交々陸上に起り、海面に墜つるの砲彈雨の如し。大澤大尉は、陸上に敵あるを知り、艇員に命じ半ば速射砲、半ば小銃の射撃を爲さしめ、且戦ひ且つ退き、漸く危地を脱して本艦に歸る。八重山之を見て、更に砲火を猛にし、且つ決死隊七人を送り、砲彈雨下の間を潜進して上陸し、速に電線を切斷せしむ。大澤大尉、又之が司令たり。八人一艇に在り、互に生死を盟ひ、本艦砲火の掩護を受けて猛進す。而して敵ははや、砲火に堪へず、雪を踏み、山を越えて遁逃せしにや、艇の岸に近づきし頃には、復た一兵を見ざりき。八人乃ち上陸して、直に電線を絶ち、陸地を占領し、敵砲四門・小銃一挺・馬三頭・旗數旗を分捕せり。而して敵屍四個の塙側に横はるを發見す。陸兵の上陸は、間もなく着手せられたり。時に午前八時、朝來

八重山の決死隊上陸

陸兵艦隊の上陸に際して他の上陸する

決死隊七勇士

決死隊と共先登し將校士卒

雪天にして晦冥なり、運送船は、危を避けて迂航し、軍艦水雷艇は、各方面を巡警し、殊に本艦隊は、第一遊撃と共に、威海衛の外海を蔽護し、我兵の上陸を掩護し、兼て敵艦の逃避に備へたり。午後一時戰團部隊の上陸を終り、黄昏糧食彈藥縦列も、亦揚陸を了へり。土人の言に依れば、敵は豫め我兵の此邊に上陸せんとを慮り、數百の兵を威海衛附近に出し、又守備隊四五百人を龍巖島に遣はして、我上陸點に近き、落鳳溝附近に急造の肩塙を構へ、我兵の至るを見れば、速に撃たんと待ちたるもの、如し。分捕品中に、營旗ありしを見て、蓋し一營許の兵を置きしものと知られたり。

我八重山艦中決死隊と聞えし七士の名は、菰田佐吉(一等水兵)、池田文二(二等水兵)、外崎平八(二等水兵)、村井代太郎(二等水兵)、北野左衛門(二等水兵)、山本新吾(二等水兵)、竹中力太郎(三等水兵)と云ふ。此七士等、常に一死以て君恩に報せんと欲し、共に或は威海衛偵察の任務に當らんと、其艦長に迫り、或は短艇に乗じて、敵地に上陸せんことを希ふ等、其心情如何にも嘉すべきものありしより、是に至て八重山艦長は、此一隊を大澤大尉に附し、共に榮城灣より上陸し、敵の電線を切斷するの任に當らしめたり。時に又中村工兵少佐、佐々木同大尉も、均しく第二軍司令部より此命令を受けしを以て、同艦の端艇には、此等の諸氏と大澤大尉の部下の決死隊並に敵兵搜索のため水兵五名、外に石井砲兵大尉

昨冬偵察
せし將校

も乗込みたり。之と相伴ひし愛宕・摩耶二艦の端艇なる海軍少尉、水兵五名宛を率ゐ、敵兵搜索の任務に當れり。三艇隊は、一旦八重山艦の下に集り、更に電信技手十二名を乗込せしめ、やがて陸地を指して漕ぎ出てぬ。向ふ所の榮城灣は、昨冬八重山艦の入港して偵察したる所にして、當時藤井少佐・中村少佐・石井大尉の如きは、親しく附近の村落に上陸せしことありしも、今正に午前五時二十分、天未だ明けず、殊に降雪紛々として寸前尺後を辨する能はざりしがために、直進榮城灣に入るを得ず誤まりて三艇共に龍睡島の東方に隣れる無名の灣に入れり。此時支那船三十艘内外の密漁せるを認めしを以て、此邊の地形と、敵兵の有無とを尋問せばやど、之に向ひければ、船頭等は總て遁竄し、漸くにして僅に其一名を捕へたり。彼は云ふ、昨今威海衛より十七名の官兵來りて當地にありと。是に於て同人を水先案内となし、東に沿うて榮城灣に至れば、恰も六時頃となり、東天漸く紅を湖し、對岸に五六支那人の喧噪西に走るを見る。孰、彼等の舉動を伺ふに、大に怪しむに足る者あり、日の將に出てんとするに際し、海上より陸地の電柱を認めたるを以て、一行は同地の榮城灣なることを信し、八重山艦の端艇先づ進航しけるに、又々六七名の支那人を見たり。彼等互に囁きつゝ、走る有様は、味方に我の上陸を報告せんとするもの、如し。他の二艇は、遙に沖合にありしが、一番艇は漸次岸に近づき付け、決死隊の一名は直に

陸上の敵
兵抵抗す

跳りて陸上に飛び上りたる時、恰も東方の平地に六七名の敵を見けるを以て、艇内より此上陸兵を呼び戻し、少しく岸を避けたる折柄、敵兵三三十名現はれ來り、陸上にある小舟を盾とし、我艇隊目掛けて一斉射撃を行へり。同時に東方の山腹より、五十名内外の敵兵、列を正して海岸に下り、發砲急なり。豫て上陸地に敵兵ある時は、烽火を揚げて之を艦隊に示すの約束なりしかば、我艇隊は、烽火を揚げ、陸上の敵に應戦しつゝ、海上遙に退却せり。一番艇には、四十七密の機關砲を据付けたれば、敵に向け之を發砲せんとせしも、小艇の事なれば、動遙甚しく、爲に狙を定むること能はず、困難を極めけるに、西方の丘陵より野砲を放ち來れば、三艇隊は殆んど危く見えける頃、八重山艦よりの應砲あり、又他の三艇よりも、發砲せしかば、三艇隊は、一名の死傷もなく、無事八重山艦の下に歸るを得たり。既にきて、我艦隊は、陸軍を護衛し舳艫相啣みて入港し來りければ、敵は防禦すべからずとや思ひけん、打揃うて逃去れり。是より於て我三艇隊は、更に燈臺占領の任務を帯ぶる新納海軍少佐及び藤山陸軍大學教授を乗込せしめ、再び元の所まで漕ぎ付け、難なく上陸し、決死隊及び電信技手等は、直に電線を切斷し、新納少佐の一行は、大西庄・小西庄・臥龍村等の各地を經、山東岬角の燈臺門前に至れば、三名の西洋人、三名の支那婦人、并に七名の支那人等は、恭しく整列して一行を迎へけるが、顔色青ざめて頻りに哀を乞ふもの、如し。

三艇隊の
無事

新納少佐
等一行山
東岬燈臺
に至る

燈臺役人の改題

電信

山東岬に於ける彼等の交電

我一行は、其西洋人の姓名、并に職務を問ひしに、彼等は燈臺の看守人にして、長を『ブローウエー』と呼び、『ノート』『ウルフ』二名之に従ひ、『ウルフ』は、支那婦人を妾とし、七名の支那人は、皆燈臺の雇員たること判然しければ、新納少佐は、汝等若し日本政府の命令に従ひ、舊の如く此處に留まりて職務を執らば、俸給は従前の通に支給すべしと告げければ、一同は事の意外なるに驚き、満面喜色を帯び、謹で命を奉ずべしとぞ答へける。依て先づ契約なましめたる後、信號の爲め水兵六名を此燈臺に残して立ち去りぬ。又新納少佐の一行は、電信機械室の中に赴きしに、電報の原稿及、書狀の起稿文等、處々に散亂せり。其電文の一に、曰く日本艦隊、榮城灣に来る、至急援兵を送れど。之に對する威海衛よりの返電には、直に、千人を送るべしとあり。蓋し清軍は豫て此地の要害なるを察して、若干兵を派し、海軍大尉一名、少尉一名其中にありて、警戒を加へしものが、以上の如く打電せしものなるべし。而して此等士官は、我軍上陸の前既に逃走し、其遺せし書狀の原稿には『今日倭艦大に至り、榮城を侵さんとす、是れ實に危急の際にして、黙視す可らざるの時なれども、敵勢甚だ盛なれば、危を避けて遁るべし云々』と認めたり。後我軍の參謀燈臺に至り、守衛なる西洋人の名を以て、威海衛に打電せしも、彼既に覺りしにや、更に應電なかりき。唯威海衛電信局なる西洋人に向ひ、此方の西洋人より、其地の模様は如何にと問ひしに、

芳賀少尉の談話

別條なしと答へ、又艦隊は如何にと問ひしに、南に行く筈と返電し來れり。斯くの如くにして、三艇隊は、其目的を達し、又七名の決死隊も無事なりき。
かくて、我運送船陸揚げの模様及び、其前後の事情は、芳賀少尉之を語るに詳なり。少尉曰く、初め我艦隊の未だ榮城灣に達せざるに先ち、英國艦隊は、同灣に在りしが、上陸の前二三日皆悉く抜錨して南に去り、残るは唯一隻の軍艦のみ。我先鋒隊八重山艦は、二十日午前三時灣内に至りしも、雪花繽紛更に前後を辨せず、漸くにして豫定の地に着し、電線切斷隊を三艇に載せて、海岸近く潛ぎ寄せつ、此時英艦抜錨して外洋に向へり。既にして、我電線切斷隊の三艇、將に岸に達せんとするや、忽然彈丸飛び來り、頭を掠めて去れり。敵軍は兼て榮城灣海岸に高さ一二尺の土堤を造り、四門の野砲を据え置き我の上陸に備へたるものなりとは、後に思ひ知られたり。さて我三艇は、不意の攻撃に驚きしが、清兵何程の事やあるべき、追散らして上陸せんと、艇上よりも亦發砲して、暫しの間戦ひけるが、八重山艦は、陸上兵ありとの信號を見、三艇に向ひて、一先づ本艦に歸れとの信號をなせり。電線切斷隊は、命に従ひ且發砲しつゝ、退きしが、一彈飛で艇舷に當れり。されど幸にして一人の負傷だになかりき。八重山艦及び、第四遊撃隊は、陸上敵ありと聞くや、砲門を開き、續け様に打懸けたり。折悪しく雪は降りやまず、陸地の方少しも分明

ならず、時時敵の騎兵らしき者が、馬を東西に乗回して、駈歩くさま、ちらちらと見ゆるのみなりき。三十分も程経て、例のちゃん／＼なれば、大方は逃げ去りたるならん。直に上陸せよとて、電線切斷隊及び陸兵は味方より放つ大砲の丸の下を潜りて、降り来る雪を打拂ひつゝ、大膽にも、艇を岸に乗り上げたり。果せる哉、敵兵は既に蜘蛛の兒を散らしたらん如く遁げ去りて、一人も見ぬぞ。八重山の兵士は、此所にて清兵十人を生擒し、野砲四門を分捕りけるが、そは砲身三尺許の、極めて舊式なる大砲なりき云々。翻て陸揚の模様を説かんに、兼て我軍にて準備し置ける棧橋の材料を出して、七八個の棧橋を海岸に造れり。棧橋は、二個の支那船を横たへ、其上に木材を置きて造れるものなるが、各艇は棧橋の力を藉らずして海岸に横付にするもの多かりき。初め陸軍にては、二個獨成大隊の中、何れか先に上陸の整頓せしもの、榮城を攻め取るべきの約ありしかば、兩大隊我こそ先掛けの功名せんとて、互に上陸を競へる状、古の例も思ひやられて、面白くも亦勇ましかりき。上陸に後れて、尙ほ船中にある兵士は、船長事務長に向て、頻に上陸を促し、上陸して其隊を整ふるを待てる兵士は、他の一隊が進軍するを見て、吾等は何時まで斯くてあるべきやなど、何れも勇氣勃勃唯敵に遇うて一快戦せんことを希ふのみ。上陸の際は一兵の死傷もなかりしが、軍馬七八頭、端舟に移すの際、誤て海中に落ちて凍死せしものあり

陸揚の模様

上陸兵互に早く敵に當らんを競ふ

英艦隊司令官の賞嘆

榮城灣の地勢

不夜城の古跡

き。運送船は、前後四回に入港し、同廿五日までに、陸揚の事全く終れり。此日英國東洋艦隊司令長官「フリーマン」中將、親しく之を目撃し、頻りに嗟嘆して曰く、日本軍は此匆忙繁劇に際して、何ぞ爾く其れ嚴肅にして整頓せるやと。蓋し虚稱にあらざるなり。

斯くの如く我軍が揚陸點と撰定したる榮城灣は、とも如何なる所ぞや、灣は清國山東省の東端に在り。山東角遠く海中に突出して、灣の前面を蔽ひ、灣内は水深く浪靜に、如何なる大船と雖も、岸を距る僅に四五町の所に碇泊し得べし。灣を距る約四里に榮城縣あり、將に我軍の進まんとする所なり。此邊一帶、昔時齊の地に屬せり。而して今の榮城を距る四里許の地は、即ち古、不夜城の跡、戰國策を案するに、正に田單の封地なり。故に今に至るも、不夜城邊、田夫往々、古刀錢を發掘し、其面に不夜の字を見ると云ふ。不夜は、即ち戰國時代の夜邑なり。又榮城灣の東、所謂山東の突角には、成山あり、是昔秦の始皇、東遊の日に登る所、山上今尙始皇廟存せり。又秦橋あり、巨石參差斷續、乍ち出て、乍ち没す。蓋し始皇の踐で海に入りし所なり。之を史上に徴すれば、正に此の如し、而して榮城、今僅に廢墟を存し、東西一里、南北一里、恰も金州城の三分の二に居る。然れども支那の一里は、約我五町強、以て其城の小大を察すべし。人口二千・戸數四百餘・城内には學署・文廟・萬壽亭・成山書院・其他養濟院・潮音寺等巨屋の稍、觀る可き者あるも、

所謂山東の豪傑

別に物資の徴すべきなく、又文献の見るべき者なし。古今の感、果して如何。嗚呼、齊はひかし管仲・田單・孫臏・司馬穰苴・魯仲連・孟嘗君・田横の徒の出でし所、其人皆一世の雄、所謂山東の豪傑なり。若し今日に在らしめば、亦以て我と一大快戦を決せしならん。然るに、今や山東舉て狗

榮城の土民

鐵、徃徃我風を聞て遁走する者なり、其時勢の推移、果して又幾くや。上陸の日、我兵の榮城を攻むるや、果して敵の抵抗なく、一彈の消費なく、容易に占領し得たり。榮城の人民は、少しも我軍に驚擾することなく、所謂箝食盡將の有様にて我を迎へ、來り告げていふ、日本軍は敢へて民財を犯さず、是を以て我等は、安堵して業に就くと得、我等は寧ろ清軍を恐るゝなり。見よ彼の海岸に築ける土牆は、皆我等土民が、奔走して造る所、而かも清軍我に一錢を給せずと。又曰く此地天寒く地冷かなり、唯恐る大軍茲に留まらば、山河草木、悉く焼き盡されて、終に一木を見ざるに至らんとと。而して土民等は、悦で我用となり、陸軍の人夫に雇はれたる者、腕に赤布の一片を佩び、其海軍に役せらるゝ者は、大日本海軍使役人夫の字を署せし、大なる紙片を懸けたり。爰に一奇聞あり、我軍の城内に入りし時、圖らずも其牢舎中より出て來る一人ありけり。彼は片言交りの日本語にて、元來我は日本人なりと云ふ。因て之を鞫問せしに、彼は云へり、我幼時捕はれて此地に來り、爾來留まること十數年、日清の事起るや、官捕

榮城の日本人

フ中將の問ひ

へて我を糾問すらく、汝は必ず日本の間諜ならんと。我辯疏百端、官の嫌疑尙、未だ霽れず。遂に縛せられて此室に投せらる。我軍乃ち其縛を解き、許して更に眞の間諜となせりと。初め上陸の際、我軍馬匹、未だ整はざるも直に此地に來れり。我真愛親王殿下亦此中にまします。されば、殿下も他の將卒と同じく、四里許の道塗、雪を踐ませ給ひしとなん。御軍職の爲に、かくも御艱難を忍ばせらるゝは、偏に畏れ多きとこそ。當日我軍の氣勢如何に膨脹せしか、之を見ても知るべきなり。此日彼の英國「フリーマンドン」中將は、我士官に向て上陸せし兵士は、今夜何處に臥するやと問ふ。我士官は應じて、見らるゝ如く人家なければ、野營せんのみと云へば、中將は更に如何して、野營するかと問へり。士官は笑て、只此儘にて臥せん覺悟なりと答ふ。中將大に驚て去る。此時積雪三寸、朔風膚を裂く、而して我軍掩ふに天幕なく、臥するに被褥なし。之を聞く者、誰か其勇壯に喫驚せざらん、此決心在て而る後、始めて威海の險に向ふべきなり。」抑も我の此行、名は敵前上陸なれども、之を花園河口上陸の困難に比すれば、實に意外に容易なりき。其上陸點は砂地にして、水深く岸清く、船は三四町許の岸邊に達し、人馬餉糧を小舟に轉載せしかば、一兵だも足を濡せしものなし。かく満足の陸揚を終りしものは、實に八重山艦偵察の功に依ると云ふ。さて又我軍司令官大山大將の榮城灣に着するや、直ちに假軍司令部を設け、

八重山艦偵察の功

次て諸軍の悉く同地に集り來ると、同時に兵站部をも設置し、前に大連灣の兵站部に在りし古川少佐、之が長官となりて事務を開始したり。而して第三旅團長山口少將は、二十日、上陸後間もなく先發隊として、榮城縣に向へり。此時第四聯隊の第一中隊長上野大尉は、部下を督し、衆に先んじ、星馳電擊城に薄るや、城の東端城壁に二百餘の敵を見る。敵我前進を見て、直ちに城門を閉して西方に退却す。我兵の既に至る、門堅うして入る能はず、我勇卒六七名、進で城壘を攀ぢ、其缺損の所より躍り入り門を開く、全隊因て通過するを得て、南門に至る。敵兵發砲、我之に應戦し、其一名を斃せり。時に午後七時十五分、我軍全く榮城縣を占領したり。是に於て、前衛は直ちに鹽灘より玉皇廟に通ずる道路を扼守し、同時に一小隊を派して、鹽灘西北方龍王廟を占領せしむ。敵又二三十あり、戸を鎖して堅守す。我兵蹴破りて内に入る。土民の言に依るに、敵兵は厝後に隠ると。乃ち更に前進すれば、敵薬を積て壘となし、中より我を射撃するに會ふ。我又應じて之を走らす。時に火の延て薬を焼き、敵の彈藥袋に及び、傷死せしもの五名あり。其餘各隊皆其上陸地、若くは其附近に次し、勢聲遠近に震ふ。聞く此地近傍一帶、明末我邦人の擾亂せし所、彼呼て倭寇と云ふ。其猖獗なりとは、今尙は之を口にして、以て兒啼を止むといふ。爾來幾百星霜、今又方に倭寇を山東の一角に見る。彼の倉皇紛擾を極むる、亦宜なる哉。」

倭寇能く
止む

今回大連灣より來りしは、第二師團の歩騎砲工なり。其幾分は、尙同灣に在り、第六師團の一個旅團も、亦未だ來らず。而して今や軍司令部の先發は、上陸後直ちに大西莊に入りて宿營し、土民安撫の揭示は、忽ち民家に貼附せられぬ。又第二師團司令部は、上陸地より西方一里、馬家砦に至りて宿す。榮城を距る東約二里、人戸六七十にして、純然たる一僻境なり。家屋の構造は、旅順半島に比して、稍疎悪なり。彼は屋を蔽ふに瓦を以てし、壁を造るに、天然の角石を以てするに、此は茅屋にして、壁は一尺大の角石を以て積み。而して、此は彼れの如く、所謂長屋作りにあらずして、全く戸々別々なり。その土人の平然として、我を迎へ、毫も抵抗の意なきは、彼れに勝るに似たり。翌廿一日早天、我軍は榮城に向ふ。然れども未だ糧食積かざるを以て、各自に之を携帶す。路は殆ど雪に没せられて、其踏む所を知らず、然れども軍隊一過、必ず徑をなし、歩々便なり。左を望めば、四十餘隻の船艦、灣に滿ち、右を仰げば、一帶の連山嵯峨として、積雪皚々十里に亘る、亦壯觀なり。既にして高家庄に至れば、遙に榮城を望むべし。城門外數町の地に、我歩兵一聯隊及び、山砲一大隊は、先着して屯集するを見る。又昨夜歩兵第五聯隊は、城外の野に露營せしを聞く。城の東門を入れれば、我兵既に城内に填充し、或は群集し、右壁上の一貼紙を讀むを見るに、上に正堂示の三字を題せり、曰く、照得倭人構、肆現已舉、辨防團、尙有賊船、近岸

自當調勇阻擋我民且勿荒亂致滋乘機劫掠本縣自示之後萬勿以身試嘗也。蓋し正堂とは、榮城縣の正堂、知縣の告示する所ならん。夜に入て、第三聯隊は、其宿舍を求め、通譯官及び、下士二名、或る一家の門を破り、其室に入れ、端なく一挺の小銃を見る、怪みて之を検するに、果哉、是れ敵の副將戴が住居なりき。副將は、我大佐に相當す、各種の文書及び、書信を見るに、彼は早く我軍の至るを偵知し、聊か防備を加へたるが如し。即ち囊さに彼の漁船をば、盡く岸に引揚げさせ、漁民をして業を廢せしめ居れり。其告諭に曰く、

榮城縣に於ける副將戴の告示

爲し札飾事、案奉送、奉電旨、倭寇有猛撲威海之意、諭令炭防均經轉行在案、倭兵意圖登岸、我軍應預籌堵擊成算在胸、免致臨時失錯。本部院籌局勢、如倭兵在軍海附近東西等處、意圖登岸、即以李統領所部福字三營、曹統領所部東字、作爲前敵、全隊迎擊勿上岸、盒子寨之裏字營、出七成隊接應。如在酒館一帶附近、意圖登岸、即以孫分統嵩左等營、並李統領三營、作爲前敵、督率全隊迎擊、以曹統領兩營爲應接。一面田烟防孫統領、督率二營、馳往和救援、倭人徑犯威海後路、即以孫分統嵩戶營、並督率、譚遊擊、鄰都砲隊、及曹統領、李統領、各迎還兩營、並裏字營、抽撥半營、烟防孫統領、督率嵩武兩營、督同各營、前徑威後、拊賊之脊、與威海各軍、前後夾擊。其未調之軍、留守底營、設由榮

城成山頭等處、意圖登岸、即以閻分統部兩營、戴一營、作爲前敵、迎頭堵擊勿令登岸、以徐營帶各一營、爲接應。平日向各辨勇講說、臨時各營互相知照、務各激勵將士、力遏賊鋒、各將士果能奮勇、用命能斬賊首者、均照賞格、仍破格奉請獎勵。倘敢退縮畏葸貽誤失事、定即從嚴懲辦、必合行札飾、致該營帶立即遵照必理、毋違切切此札。右札、仰管帶河定右營候補副將戴准此。

光緒二十年十二月

と、然るに、戴等、この籌策あり、而して防戦の際に至れば、一砲だに放たずして、先づ走り、知縣の如きは、狼狽に身を以て逃れ、民家に隠れたりと云。後正月初九日、我二月四日、清國內閣は、上諭を奉じ、李乘衡より、榮城失守援救不及の故を以て、各將懲戒の旨を奏す。略に曰く、昨年十二月廿五日(清曆)、倭人は落鳳洞より登岸して、榮城縣城を撲陥せしに、該所駐所の各營、或は迎戦力めず、或は援救及ばず、均しく屬咎の辭すべきなし。候補副將閻得勝、同副將戴守禮、候補參將趙循發、候補都司葉雲生(知縣)、試用巡檢徐撫辰の五人は、均しく奏して革職を行ひ、仍は罪を帯び、力を圖り、以て後効を圖らしむ云々と。而して我後發軍は、陸續として來り、同二十四五日に至て、全く上陸を終り、何れも榮城灣より、此地に向ひ來る。

清内閣の上奏

斯く我上陸に便利を與へたる我八重山艦の功績は、以て此に特筆せざるべからず、其偵察第一報告に曰く、

八重山の
第一報告

山東角の南に突出せる小なる半島を、龍睡島といふ。該島の西に相對して、龍口崖との間、海水灣入せるあり。廣さ三千米突餘、深さ二千五百米突許、灣口の深さ五尋、岸に近くに從ひ、漸く淺しと雖も、口内大船幾十艘を碇泊せしむるに足る、且其西北東三面、陸を以て包み、開く所、只其南方一面のみ、故に直ちに季節に於て、殆んど風波の憂なし。灣の盡る所、人家五六十戸あり、又支那船三十餘艘を砂濱に曳揚あるを認む。其又附近に村落八九あり、濱岸に村落のある所、『ジャンク』あらざるなし。故に之を集むる、其法を得れば、百幾十艘の『ジャンク』は立所に辨ずるを得べし。

小官等、汽船にて測鉛を投じつゝ、岸濱に達し、洋に立て視察するに、一跡砂地にして、其深さ近岸に至るまで、恰適なるを以て、直ちに端舟、若くは汽船を横附するを得、纜に棧橋材料準備せば、以て人馬共に容易に揚陸するを得べし。上陸點の處、松樹十五六株あり、直ちに道路に通じ、電信柱あり、近岸迄船艦を容るゝに足るが故に、地形殆んど敵の隱伏に便ならず、我上陸點にては、得難き適當の地點なり。陸上諸村落には、一兵亦く、人民は至極平穩にし

て、殆んど戦争の有無を知らざるもの、如く、我等自ら英國人なりと稱すれば、彼等殆んど疑はざるものに似たり。此地榮城を距ること、殆んど我四里、威海衛を去ること十五里に過ぎず。土民の言に依れば、當地は此近岸中、最も暖和にして、終年結氷することなく、又井水少しと雖も、河水多しと云ふ。山東角より、威海衛に通ずる電線は、去る五月出來せり。燈臺の役人は、八九人なるが、内二人は英國人なりと云ふ。

榮城縣より、山東角までに、龍樹島といふ八九ヶ村あり、毎村戸數四五十戸あり。榮城は、海上より明に望見するを得べし、是の少しく東方に砲臺らしきものあれども、大砲の備あるを見ず、土人の言に依れば、此近邑一兵なしと云ふ。

雪は、榮城より西方の山に多く、山東角附近に至るに隨ひ、更に見る所なし。

陸軍の參謀官は、曩に旅順に於て、捕虜となりし支那人中より、就中伶俐らしき人間を伴ひ來りしを以て、陸上の模様を探るに、多少の便を得たり。其支那人は、元旅順に於て巡查の役をなしたるものにして、生地は山東省登州府なりと云ふ。

其第二報告に曰く、

一 本灣(榮城灣)内、底質は泥土なり。

全第二報

- 一 本灣は、南風の外は、何風にても充分避け得、但し該沿岸の漁夫數名に聞くに、當季節は、北西風にして、南東風は決して吹かず、唯降雪と共に、北風の強きを例とす。
- 一 灣の南岸岬に於ける、狭長なる暗礁約一鏈鎖半程西方に向て出づ。
- 一 本灣に進入する灣内、遠距離より灣の中央を認むるには、約北々東に當り、松林の繁茂する一團を注視すべし。
- 一 揚兵に適する陸岸は、灣へ進入するときの左方、即ち西岸に松林の一團あり。此近傍盡く砂地にして、端艇は岸の眞際へ附着し得、蒸氣船は約三米突の所迄達す。而して此砂岸の長約六七鏈鎖あり、以て揚兵に充分と思考す。
- 一 西岸松林より、東岸岩礁の北端見通の線迄は、砲艦の進入するを得べし。
- 一 本灣揚兵の良好なるも、唯灣内狹隘なる一欠點あり、故に各運送船は、可成吃水の許す限進入し、短鎖を以て、双鎖を泊するを要す。
- 一 灣内約二里、沖合の海面に無數の漁網の浮標（縦五六寸長五六尺）ありたり。是より以内は、少しも見ず、依て艦船の航進は注意すべし。但し揚兵最初の日に於て、右浮標の索を切斷せば、夜中の船行に危険なるべし。

平山八重
山艦長の
像功

其偵察は盡せり。其指導は至れり。斯く詳密の報告在て、我軍上陸は、彼れが如く迅速良好の結果を得しのみならず、其餘勢は、上陸の即日を以て、四里前程の榮城を占領し、管に一人の我死傷兵なきのみならず、剩へ其前衛は破竹の勢を以て、而かも其獲物は小銃四十挺・彈藥七萬二千五百發、并に旗二旒、其他弓箭及び、喇叭の若干品ありき。其功も亦奇ならずや、要する所、是皆上陸の容易なりしに由る。抑も此偉大善良の報告を作れる者は誰ぞ、即ち八重山艦長平山大佐其人なり。

榮城灣の上陸、榮城縣の占領、事既に全く、而して我前進の準備、亦既に整へり。今や唯起て威海を應せんのみ、威海は如何なる所ぞ、曰く、東洋有数の雄鎮、幾ど旅順と擇ふ所なし。三面山を負ひ、一面海に枕み、日島・劉公島・其前を遮り、其中實に軍港と爲す、砲臺を問へば、七砲臺三十有餘砲、皆精銳の利器、嚴然並立して、軍港を掩護し、之に加ふるに、灣内幾十隻の軍艦、并に水雷艇は之と存亡を共にせんとす。其防備亦慢るべからず、是れ我の海陸協力合撃の策成る所以なり。榮城は、威海衛を距ること甚だ遠からず、而して其通路に南北二道あり、其北なるは、海岸線にして、約十五里、其南なるは、雪山氷河を超えて往く、凡そ十里、迂にして且險なり。此兩道の間に、地の崎嶇、人の防備以て我を迎ふるもの、亦絶えて無きを保すべからず。是に於てか、我偵察は

先づ進めり。

次で、我陸軍は進めり。時に一月廿六日、第二師團は、左縦隊となり、第六師團は右縦隊となり、均しく榮城を發す。其左なるものは、南道より進み、其右なるものは、北道より進む。此日恰も彼が新歲元旦の佳節、時に爆竹の聲を聞くも、今や戰亂勿劇の時、到る處の村落多くは寂寥たり。翌けて二十七日、第二師團は、埠柳村を發し、橋頭集に着す。橋頭集は、戶數凡三百、此地方に於ける一小都會なるも、人民多くは難を避けて、家に留まる者少し。此日歩兵第四聯隊中の一部隊、即ち吉原中尉の率ゐる中隊、此地附近に於て三百の敵兵と戦ひ撃て之を退く。二十八日司令部は、橋頭集より發し、行くこと僅に拾數町にして、孟家庄に舍營す。而して第六師團は、二十六日榮城を發し、海岸に沿ふて進み、其前衛は、二十七日午後三時、石家河・十家・附近に達し、二十八日午後一時、鮑家に進み、其師團本隊は、此日を以て九阜灘に至りぬ。時に歩一步に敵線に迫るや、威海の方面よりは、傳騎の情報を齎し來る者、頂背相望み、以て戰機の愈々熟せることを明示したりき。

橋頭集附近なる吉原中尉の突敵を衝す

第二十六 威海衛の大戦

今や威海衛の近づきぬ。我軍氣は愈々奮ひぬ。榮城灣より上陸せし第二師團及び、第六師團の大衆は、南北二路を取て並進し、均しく同地に向て前往す。而して北路海岸線より、進撃せる第六師團には、前程に摩天の砲臺あり、地は威海東口の險路要衝にして、我軍先づ此敵彈を嘗さるべからず、次で來る者は、海岸諸砲臺にして、何れ劣らぬ堅牢無比の防備たり。而して衝突は、早くも是等要害のこなたより起れり。一月二十七日午後三時、第六師團の前衛は、石家河・十家河等の附近に達し、前衛附屬の騎兵第六大隊（一中隊と一小隊）は、鮑家の附近に達したり。同騎兵は、更に前進して、河東村近傍に着せし時、孤山後北方の高地に、敵の砲臺及び、堡壘線あるを確認し、又孤山後附近に於て、約百餘名の敵兵に遭遇せしを以て、我騎兵大隊は、九阜灘附近に止まりて、敵を監視し前衛は、石家河西方の高地に前哨を配置し、師團本部は、北濰西近傍に宿營したり。翌廿八日、前衛并に師團本隊は、午前七時頃より運動を起し、鮑家に向て前進し、又騎兵大隊は、同午六時過ぎ、九阜灘を發して、陣家庄附近に進み、孤山後、九阜灘近傍の敵情及び、敵の陣地の右翼を偵察し、午後一時頃、前衛は鮑家に達し、其前方龍家庄に、歩兵の一部隊を出しける

前衛攻撃隊

に敵の海岸砲臺より、重砲の射撃を受けたりしより、前衛は更に巨漣村及、孤山後の南方附近より一二の將校斥候を派遣し、道路及び敵情并に敵陣の位置を偵察せしめたり。尙ほ之と同時に、鮑家西方一帯の高地に前哨を配置し、鮑家村に於て、緊急合營を爲したり。又師團本隊は、正午頃九阜灘南方の畑地に開進し二時廿分、屯候村・九阜灘附近に宿營することに決し、歩兵第十三聯隊の第一大隊を寨子東に派遣し、前衛前哨の右翼に連りて、其北方海岸までの間を警戒したり。第一大隊は、此命令を帯びて、寨子東に赴きけるに、其西南の高地に砲臺の廢墟ありけり。彼前衛の一哨中隊は、此中に入るや、敵は頻りに重砲を放ちて、此砲臺を砲撃せり。二十九日は、現在軍隊配置の姿勢を以て、駐軍する事となり、此日を以て、専ら敵情地形及び、道路の偵察に従事したり。殊に工兵隊に命じて、進路を修理せしめ、又海軍より派遣せられし新納參謀少佐をして、海岸の高地に至り、専ら我海軍と、連絡せんことを務めしめたり。今第六師團の軍隊區分及び、其現在の位置を擧ぐれば、即ち左の如し。

右縦隊行軍隊形

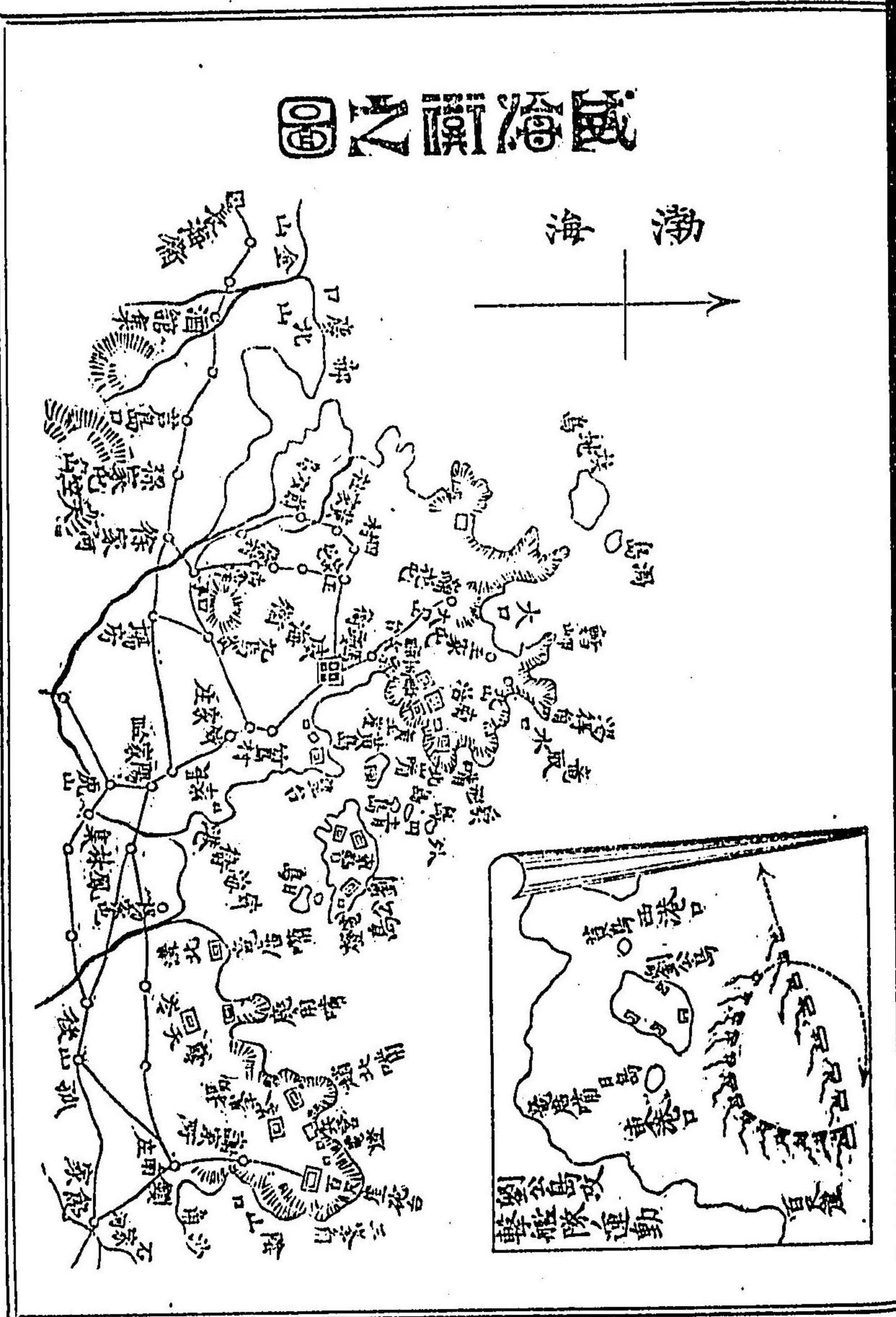
前衛

司令官

沖原大佐

歩兵第十三聯隊(第一大隊缺)騎兵第六大隊 本部及第二中隊(半小隊缺)山砲兵第五中隊

第六師團の軍隊區分



凱旋紀念帖 第二十六 威海衛の大戦

工兵第二中隊 衛生隊半部

本隊

歩兵第十三聯隊の第一大隊 山砲大隊本部及第六中隊

歩兵第廿三聯隊 衛生隊本部 海軍陸戰隊

又同師團二十九日に於ける、軍隊の姿勢は、

歩兵第十三聯隊の第二大隊 第三大隊 騎兵第六大隊の第二中隊

砲兵第六聯隊の第五中隊 工兵第六大隊の第一中隊 衛生隊半部(鮑家) 歩兵第十三聯

隊の第一大隊(寨子屯)

師團司令部 歩兵第廿三聯隊の第一大隊 工兵第一大隊の第二中隊 工兵第六大隊の第

二中隊(屯候村)

歩兵第二十三聯隊の第二大隊 第三大隊 砲兵第六聯隊の第六中隊 海軍陸戰隊 衛生

隊半部(九阜灘)

此日師團長黒木中將は、松村參謀長・大谷參謀少佐を従へ、孟家庄北方の高地なる、大山第二軍司令官の許に至らんとしけるが、當日は非常の降雪にして、爲に山上の位置分明ならず、遂に松村

敵の兵力

守永偵察
隊九阜に
大敵に
まる

參謀長のみ、獨り軍司令部に至り、諸般の打合せを爲したり。此日敵は我前哨線に向て、絶えず砲撃し、又午後一時頃より、敵は二群團となりて、一は嶺天嶺の南部嶺後村の谷中附近より、前哨線に迫り來り、一は謝家庄附近の村落より進み來れり。而して此群團は、巨涯村と、陳家庄とに空で達しけるも、我前哨線は、難なく之を撃退し、敵は再び五朱川を渡りて、堡壘線に退却したりしは、早や四時過ぎにして、當時堡壘線に立てたる旗の數より、想像すれば、此敵の兵力は二營内外ならんと云へり。是より先き、第十三聯隊第一大隊の第二中隊第一小隊長守永歩兵中尉は、大隊長渡邊少佐の命に因り、斥候長として軍曹三名・上等兵六名・兵卒二十三名・一行三十二名の斥候隊を引率し、廿九日午前五時三十分、本隊を離れて威海衛附近の敵情視察の爲めに進軍し、午後零時三十分に至り、九阜灘の一民家に入り、晝食す。時に大雪降り來つて、天地暗昏寸前を辨せず、到底遠距離の視察を爲すべからざるを以て、其の民家に憩うて雪を避く、午後一時三十分に至り、俄然門外に聲あり、忽ちにして四隣人馬の物音近く聞ゆ。我が斥候隊は、何事ならんと、門外に出で見れば、何ぞ鬪らん、一千二百名許りの大敵は、僅に五十米突(我大凡三十間)の近距離に迫つて、四面を取り圍めり。中尉かくと見るや、大喝一聲、直に伏せの命令を下す。一行皆路傍の溝渠に伏して、敵を狙撃す。我が兵此の不意の襲撃に會ひ、殊に僅々三十三人の一隊を以

守水中尉
戦死

て、一千餘の敵に當る事なれば、中尉以下、皆固より生を期せず、力の限り敵に當らん、若し彈竭き命窮するに至らば、乃ち潔く敵と刺違へて斃れんのみと、因て畢生の勇力を奮ひ、殊死して戦ふ。中尉滿面朱を濺ぎ、勵弊部下を督しつゝ、猛然進んで突入す。此時敵の一九、恰も中尉の左胸部より貫通して即死す。次で戦死せし者、稻津軍曹以下六名、并に負傷四名に及ぶ。(内上等兵二名・兵卒二名) 敵も亦多數の死傷を生ずるや、今は我が猛撃に辟易して進退度を失ひ、銃丸をも發せず、漸々退却し、且つ再び大雪降り來つて、咫尺辨せざるに至り、茲に戦全く息めり。時に午後二時三十分なり。嗚呼、僅に三十三人の力、以て一千二百餘の敵に當り、終に敵をして、自ら退かしむるに至る。其剛膽勇武は、以て歐洲大國の軍人をも後へに墮若たらしむべし。中尉名は直一、山口縣の人、夙に才學秀拔を以て聞えけるとぞ。此役九死に一生を得たりし我が兵士は、傷者を看護し、即日本隊に歸り、守水中尉以下の戦死及、奮戦の状況を報ず。依て第十一旅團は、歩兵第十三聯隊及、第二十三聯隊に、同日出發の命を下せり。右歸來者の一人某は、途を失して巨涯村に迷ひけるに、村民之を伴ひ、我前哨線に導き來りぬ。渡邊少佐の卒るる第十三聯隊の第一大隊は、之を收容せんが爲め、巨涯村の前方まで、兵を進めけれども其目的を達せざりき。今や我軍の前進しつゝある、此威海背後に於ける道路は、由來他邦人の得て客易に測知すべき所

我三十三
人を以て
敵の一千
二百を退

關海軍大
尉の遺級

にわらず、從て我軍は、兼て此偵察には多くの苦慮を積めり。其始めて之を探知したりしは、實に故の關海軍大尉(名は文炳、氏は去る明治廿五年四月、朝鮮近海に於て破船の爲めに非業の最後を遂げし人)なり。大尉は嘗て支那に漫遊し、殊に山東角の地理に於て力を致せり。大尉、初め芝罘より威海衛に出で、榮城を経て膠州灣に向はんとせしに、圖らず途を失して、其意を果さず、因て再び芝罘に引返し、更に旅裝を整へ、又も膠州に赴く。此時全く其志望を果し、途中の地形、并に道路の景況等に就きて、詳に之を記せり。然るに、今回大尉の功績、この偉大の力を現はし、我軍作戦を計畫する毎に、之を大尉が紀行文に照して判断し、爲めに其得し所尠ならずと云ふ。而して大尉が記録に残る一路は、即ち榮城より南に分れて、威海衛に至るものなり。我軍は、此他にも尙榮城より北に添ひ、孤山後、百尺涯所の西方に出で、以て威海に通ずる者あることも、豫て之を知りしが、而かも此邊の地勢と、道路の景況等に於ては、其概略だに知るものなれば、曩に軍司令部の、金州に在るや、或は山東省の土民を捕へて之を問ひ、或は舊冬參謀將校を派して、榮城を偵察せしめし時、附近の村民に就き之を探り、漸くにして此道も亦軍隊を進め得べしと判断したり。然れども、尙は土民の言も區々にして、或は南路を良好とし、或は北路を贅するものもありて、兎角一樣ならざりしに、其後更に幾多の偵察を重ねたる結果として、始めて今

南北の二
路

回の行進計畫は定まれり。而して今や實際の行軍に際すれば、其道の南北に論なく、共に我運搬に非常の不便を感じ、彈藥糧食輜重等は勿論、其軍の行進とても、亦普通の場合と、大に其趣を異にし、殆ど一列の隊形に依らざるを得ざりき。是此行の一大困難なり。其北路、土人之を威海衛街道と稱へ、即ち今回第六師團の由る所、其南路、之を芝罘街道と呼び、即爾大尉の偵知する所、今第二師團の由る所なり。

第二師團の行進するや、第六師團と、兩々頭角を揃へ、共に百尺涯所の方向に進めり。然れども萬一敵の來襲せんことを慮り、榮城の南方三道溝といへる所に、歩兵騎兵若干を出し、以て膠州街道を警戒したり。諸隊行進の後、軍司令部は、尙榮城に在りて探知したりし所に依れば、威海衛には、敵兵の各地より來集したるものなく、只僅かに新募兵三營は、前月來同地に着し、尙ほ他の一營は目下他方より來りつゝあることを知れり。かくて橋頭集にありし敵は、第二師團の爲めに驅逐せられて、文登の方に敗走したるのみにて、別に出來事もなく、二十九日まで進軍したり。其進軍の初めに當り、大山司令官の榮城に於て兩師團に發したる行軍命令は、即ち左の如し。

大山軍司
今官の行
軍命令

一 上陸點及び、榮城縣に在りし、敵兵約千五百は西方に退却せり。

孤山後及び橋頭集には數多の敵兵あり。

二 軍は、行軍豫定表に従ひ、明二十六日威海衛に向ひ前進す。

三 右縱隊鮑家に達せば、止まりて前方の地形及び、敵狀を偵察し、且艦隊と連絡すべし。

海軍の陸戰隊は、陸軍砲兵中佐豐島陽藏の指揮下に在りて、其の縱隊に續行す、此隊の行軍宿營給養は、縱隊司令官之を擔任すべし。

四 左縱隊張家口子に達せば、止まりて前方の地形及び、敵狀を偵察すべし。

橋頭集に宿營する部隊は、一の警戒隊を出し、寧海州及び、文登縣方向を搜索せしむべし。

五 徒歩砲兵第二大隊は、行進宿營給養に關し、左縱隊司令官の指揮を受くべし。

六 新堂口枝隊は、其地附近に陣地を撰定し、南方に通ずる道路を警戒し、軍の背後連絡線を掩護すべし。

自今兵站監の指揮を受くべし。

七 予は廿七日、埠柳村に、廿八日、橋頭集に至る筈なり。

(作戰豫定表)

(今回我軍の活動は、特本表に基きて作戦せられしが、其實際は多少の差違はあれども、先づ大体之に同じ、巧拙精確の表と云ふべし)

作戰豫定
表

一月十日	第二師團	第六師團	金州半島に駐屯する部隊	連合艦隊
十一日	宇品乗船			
十二日				
十三日		門司乗船		
十四日	航行			
十五日				
十六日	此日大連灣に集合	航行	大連灣乗船	
十七日			出帆(午後一時)	登州附近の攻撃、 上陸掩護及成山角燈塔占領
十八日	出帆準備			
十九日	午後一時發			
二十日		此日大連灣集合		
廿一日	山東省榮城灣に上陸	大連灣出帆 (午後三時)	榮城灣に上陸	
廿二日		榮城灣に上陸	榮城灣に兵站司令部設置、 空船は旅順に返る	
廿三日	榮城縣鹽灘等に宿營		旅順乗船	
廿四日	先頭、沙格庄	先頭、北路上張格庄を齊	榮城灣に上陸榮城縣及其 東方に宿營す	
廿五日	先頭、四寶山、道路修築			

第二師團
の行軍隊
形

廿六日	道路修築	先頭は沙格庄を齊頭面	
廿七日	牙格庄、不夜城間	先頭は石家河	各部隊及所屬隊に至り共に運動す
廿八日	張家口子、四寶山間	鮑家石家河間	右に同じ
廿九日	偵察、第六師團の連絡	偵察艦隊と連絡	右に同じ
三十日	溫泉場張家口子に開進	孤山後東方に開進し艦隊と連絡	右に同じ
卅一日	鳳林集東方の高地及百尺崖處の攻撃及占領		協同攻撃
二月一日			
二日	溫泉湯、馮家窩、曲阜間	百尺崖處、鳳林集間	所屬部と共に運動す
三日	徐河家龍島口間	楊家裡及其東方	右に同じ
四日	攻撃準備、第六師團と連絡	攻撃準備、第六師團と連絡	右に同じ
五日	威海衛及び同軍港攻撃着手		陸兵と連絡

又第二師團の行軍隊形及び、廿九日に於ける位置は左の如し。

左縦隊行軍隊形

獨立搜索隊 騎兵第二大隊(一小隊と一分隊欠)

前衛

司令官 山口 少將

步兵第四聯隊 騎兵第二大隊二中隊の半小隊 砲兵第五中隊 工兵第二大隊 衛生隊

半部
本隊

步兵第十六聯隊 歩兵第四旅團(二中隊欠即新堂枝隊)
騎兵第二中隊の半小隊 砲兵第二中隊(第五中隊欠)
徒歩砲兵第二大隊 衛生隊半部

其廿九日軍隊の姿勢は、

歩兵第十六聯隊 砲兵第一聯隊の第五中隊及第六中隊 騎兵第二大隊の第一中隊第二中隊
衛生隊半部(後亭子寨)

師團司令部 歩兵第四聯隊の第一大隊 第二大隊 砲兵第二聯隊の第五中隊 第六中隊
(前亭子寨)

砲兵第二聯隊の第一中隊 第二中隊 工兵第二大隊の第一中隊 第二中隊(張家口子)
歩兵第七聯隊 歩兵第五聯隊の第一大隊 第二大隊の半部 第三大隊(黒石寨)

軍司令部 衛生隊半部 徒歩砲兵大隊(孟家庄)

歩兵第四聯隊の第三大隊 騎兵第二中隊の八分一(報信)

軍の要圖
命令

歩兵第五聯隊の第二大隊の半部(兵站監直轄)(新堂口)

かくて二十九日午後九時、左右兩縦隊に向て、軍の進撃命令は孟家庄まうかしやうより至る。曰く、

軍の戦闘命令

- 一 敵は、百尺崖處より、西南に亘る高地を守備す。
- 二 軍は、明日鳳林集東南方の高地を占領せんとす、我艦隊は明日百尺崖處附近の砲臺を砲撃する筈なり。
- 三 右縦隊は、明日未明より、左縦隊に連絡して、其攻撃に協力すべし、前面の敵に對しては、一部隊を止め、其出撃に備ふべし。
- 四 左縦隊は、明日未明より敵を攻撃して、鳳林集東南方の高地を占領すべし。虎山より西方に通ずる道路は、特に警戒すべし。
高地占領後は、敵艦の砲撃を蒙らざる爲め、遠く進出すべからず。
其の艦隊より報信に出しある警戒隊には、其兵の大部分を屬し、同地に止め、寧海及び、文登方面を警戒し、寧海の方向は、特に遠く搜索せしむべし。又其縦隊より歩兵二大隊、騎兵半小隊を、予が直接の使用に供する爲め、午前六時までに温泉湯東南方(後亭子

寨の南方)に開進せしめ置くべし。

五 徒歩砲兵第二大隊は、温泉湯東南方(後亭子寨の南方)に、午前六時までに至るべし。

六 予は、午前六時より温泉湯東南方(後亭子寨南方)に在り。

是に於て、第二師團長佐久間中將は、其軍を部署し、左の命令を出したり。

師團命令(一月三十日午前二時十五分)

一 敵は百尺崖より西南に在る高地を守備す。

二 軍は、鳳林集東南方の高地を占領せんとす。

我艦隊は、百尺崖處附近の砲臺を砲撃する筈あり。

三 師團は、未明より敵を攻撃して、鳳林集東南方の高地を占領し、虎山より西方及び、北方に通ずる道路は、殊に警戒すべき任務を有す。第六師團は、當師團と連絡して、我が攻撃に協力する筈なり。

四 右翼隊は、午前六時歩哨線を發し、鳳林集に向て前進し、該地東南方を占領すべし。高地占領後は、敵艦の砲撃を受けざる爲め、遠く進出すべからず。

五 左翼隊は、午前五時三十分樂格庄の東南方、約千米突の處を先頭として集合し、右翼隊

第二師團
の部署
師團命令

の運動に隨ひ、虎山の方向に前進し、該地北方の高地を占領し、虎山より西方及び、北方に通ずる道路は、殊に警戒すべし。

六 豫備隊は、午前六時迄に温泉湯と、後亭子寨の道路間の左側に集合すべし。

七 報信枝隊は、寧海及び、文登の方向を警戒し、寧海方向は殊に遠く搜索すべし。

八 軍の直轄部隊は、午前六時迄に温泉湯の東南方(後亭子寨の南方)に集合し、軍の參謀長に届け出づべし。

九 徒歩砲兵第二大隊は、午前六時迄に温泉湯東南方に至る筈なり。

十 大行李は、諸隊出發の後道路外に出て、後亭子寨の東端を先頭として、途上縦隊のまゝ、停止あるべし。

十一 第一、第二野戦病院は、午前八時迄に前亭子寨の西方道路外に集合しあるべし。

十二 彈藥大隊云々、

十三 輜重大隊云々、

十四 予は午前六時より、豫備隊の集合地に在り。

第二師團軍隊區分

第二師團
軍隊區分

右翼隊

司令官 山口 少 將

歩兵第三旅團(一大隊欠) 騎兵第二大隊の一小隊 砲兵第二聯隊の第三大隊

工兵第二大隊の第一小隊 衛生隊半部

左翼隊

司令官 貞 愛 親 王

歩兵第五聯隊(半大隊欠) 騎兵第二大隊本部及び二小隊

砲兵一聯隊の第三大隊(一中隊欠)

豫備隊

歩兵第十七聯隊の一大隊 騎兵第二大隊の半小隊 砲兵第二聯隊本部及第一大隊 并

に同第一聯隊第三大隊の一中隊 砲兵第二大隊(二小隊欠) 衛生隊半部

報信枝隊

司令官 石 原 少 佐

歩兵第四聯隊の一大隊 騎兵第二大隊の一中隊

軍の直轄部隊

歩兵第十七聯隊(一大隊欠) 騎兵第二大隊の半小部

又第六師團の戦闘命令、并に軍隊區分ハ左の如し。

第六師團
の戦闘命令

師團命令(一月二十九日午後十一時五十五分、屯候村司令部に於て、)

一 敵は、温泉湯西北方の高地及、孤山後より北方海濱に亘る高地線を守備す、其兵力は未詳なり。

二 軍は三十日の拂曉を期して、鳳林集東南方の高地を占領せんとす。左縦隊(第二師團)は、温泉湯西北の高地を攻撃し、我が海軍艦隊は、百尺崖所附近の砲臺を攻撃する等なり。

三 師團は、孤山後北方の高地に在る敵に向て攻撃す。

四 右翼隊は、午前二時に前哨の在る高地より運動を起し、拂曉を以て敵の重砲砲臺に對して前進し、此の方面に敵を牽制す、且師團の右側を掩護す。

五 左翼隊は、午前三時迄に柳家庄東方の高地に集り直ちに出發して孤山後の北方の堡壘線に向ひて攻撃すべし。又第二師團と、連絡を勉めよ。

六 豫備隊は、午前三時迄に砲臺の西に集りて、左翼隊に跟随すべし。

七 大行李は、午前七時に、各隊出發の後砲臺附近に集るべし。

八 輜重縦列は、其宿營地附近に集るべし。但し野戰病院一、歩兵彈藥半縦列、山砲彈藥一

縦列、豫備隊の方向に後より進み来る筈なり。

九 師團長は、午前三時頃より左翼隊の集まる處に居り、後に孤山後の南の高地に至る。

〔附言〕敵に接近したる時は、各隊随意の處に背進を卸すを許す。

第六師團軍隊區分

右翼隊

司令官 歩兵少佐 渡邊之

歩兵第十三聯隊の第一大隊 傳騎四名 山砲兵第六中隊の中二門 工兵第一大隊の一

小隊

左翼隊

司令官 陸軍少將 大寺安純

歩兵第十三聯隊(一大隊欠) 歩兵第二十三聯隊の第一大隊

山砲兵の第三大隊(二門欠) 工兵第六大隊 騎兵第一小隊

衛生隊半部

豫備隊

歩兵第二十三聯隊(第一大隊欠) 騎兵第六大隊(一中隊と一小隊欠) 工兵第一大隊

(二中隊三小隊欠) 衛生隊(半部欠) 海軍陸戰隊

第六師團
の軍隊區分

敵の電燈
我軍を照す

敵の根據地
第一關門

一月三十日午前第二時、第六師團は、屯候村の合營を發し、柳家庄の東方高地に集る。時に夜深け一天清涼、霧の如くに屯して、劍戟相連る。遙に敵壘を望めば、高く電燈を、掛け明滅東西を照して、我軍の進襲を眩す。その燈光の熾なる、我屯集地を照すこと、猶白晝の如し。我軍は、人馬を警めて、勉めて燈光を避け、敵に我爲す所を知らざらしむ。黒木將軍、劍に仗て軍隊を部署し、前夜の命令の如く、敵と對せしむ。此師團の方面は、即ち孤山後、東北高地を占むる敵兵を擁ひ、進て海岸砲壘を抜き、以て威海衛の半面を占領するに在り。是れ頗る要衝の地、恰も旅順の松樹二龍の兩山に於けるが如し。敵の根據地に於ける一關門なり。此門だに開きなば、陸海軍の連絡も容易にして、以て威海衛中の敵を殲滅すべし。今や鎮西の猛兵は、實に此地に向ふなり。途は一行進となり、或は二列行進となり、道の險惡、往々兵を駢べ進む能はず、其峻崖に臨むや、積雪は凝て鐵の如く、兵馬直視して下る能はず、徐に手を伸べ地に附し、半は匍匐の狀をなす、孤山後の東約半里許に至り、一群誤て前隊との連絡を失し、一たびは右し、一たびは左に向て進めども、遂に前隊を認めず、尙進むと一里、一村落到達す。而して天全く明く、村は即ち孤山後なり、大隊長梅澤少佐、遂に意を決し、他隊は知る所にわらず、只其率ゐる所の一大隊を以て、敵の方向を探り、開戦せんとす。漸く隊を進めて、孤山後の東北を指し、連山起伏の間を過ぎ、終に

敵の砲壘を認め、直に展開して戦を交へんとす。忽ち右側の山上に當り一兵の走り來るを認む。至れば、即ち前隊よりの傳令なり、曰、前隊ハ、將に戦を開かんとす。後隊の來る何ぞ遲きと。是に於て此隊亦纔に戦機を失せざるを得たり。之を左翼隊とす、右翼隊は、海岸に沿うて進み、正面より陽撃し、以て敵勢を牽掣するの任務を帯べり。左翼隊は、騎兵を用ひて敵の砲壘を抜くにあり。而して左右兩翼の集中する點は、即ち全く摩天嶺に在り、摩天嶺は連山中の最高山にして、陸地防禦の最險要地たり。砲壘の岷々たるもの、天を劈て聳え、仰て以て之を望むべし。摩天嶺の左右には、幾所の砲壘を設け、胸壁を連ね、蜿蜒屈曲山に沿うて度る。是れ敵の據て以て守勢を張る所たり。戦は午前七時半頃より開始せられて、漸く砲烟彈雨の場に入る。鎮西の男子、元と猛勇、戰豈又他方あらんや、只突撃呐喊を知るのみ。各兵は散開して、鎧を踏え、嶺を跋み、偏に摩天嶺に向て進む。嶺上の砲壘よりは、巨砲併び發し、さながら迅雷の墮落するが如く、頭上足下に爆發し、天地は忽ち修羅場となれり。梅澤少佐、其間に立て、指揮尤も縦横なり。各隊を壓て前み、一隊を分て、砲壘の背面に向はしめ、直に敵の退路を絶ち、少佐自ら前面に向て進む。忽ち前方約二十間餘の處に當り、爆然一齊、五個の地雷は轟けり。地動き、天鳴り泥土の雨下するもの幾十間四方なるを知らず、然れども物皆舊式に係り、響大と雖も、勢甚だ猛烈ならず、

摩天嶺の
開戦

下山軍曹
の奮進
梅澤少佐
の剛膽

陣内中尉
の奮進
摩天嶺上
の日章旗
吉田工兵
少尉の隊
功を立つ

單に泥土を揚ぐるに過ぎず、故に纔に一兵卒の手指を負傷したりしのみ、然れども各兵之が爲に色沮み、稍突撃に難す。下山軍曹獨り屈せず、勇を奮ひ、一部隊を提げて先づ進む。各兵乃ち繼ぐ、既にして砲壘下の斜面地に出づ、身を掩ふに物なし、我兵斃るゝ者二名、梅澤少佐尙は神色自若とまで、奮前す。忽ち左山の頂上に當り、我一中隊の展開して、一齊射撃を行ふを見る。會々敵の大彈飛來し、看る看る我七名を斃す。中の一人匍匐して、漸く退く。中隊爲めに一時は退散せんとせしも、又進で射撃せり。既して呐喊の聲は、四方に起れり。然れども各隊の距離甚だ遠く、又山に掩はれて展望するを得ず、故に各隊箇々の働を爲す。梅澤少佐は、遂に一部を摩天嶺に向はしめ、其餘は悉く敵の背後に出でしめたり。第二中隊は、左方の山腹を超え、將に海岸に出でんとし、呐喊して進む。忽ち小隊長陣内中尉奮然身を挺し、劔を揮て敵陣を衝き、本陣を離るゝこと數十間、一兵卒の之に従ふを見る。中尉悉く敵壘に入るの比、敵は早くも逃避して、一兵の止る者なかりき。敵の旗幟は既に動けり。呐喊の好時機は來れり。乃ち三面合撃、摩天嶺の砲壘を奪ひぬ。日章旗は、上て壘邊に翻へり。敵は山下に向て奔竄す。一帶の胸壁も、亦我有に歸せり。摩天嶺を拔きしは、第十三及び第十四聯隊兵と、工兵一小隊なり。工兵亦呐喊して進み、砲壘の陥落に功あり。其小隊長を吉田少尉となす。

鎮遠・定遠の二艦の砲撃

敵の地雷

爰に又山砲兵の摩天徹砲臺に入るや、敵砲を把て敵壘の未だ抜けざるものを砲撃す。是より、更に一場の大砲戦は開かれたり。海岸の諸砲臺は、盡く筒を陸上に向け、其所謂海岸砲なるものを以て、齊發轟射せり。其勢の猛烈なること、到底想像の能く及ぶ所にあらず、杵の如き砲丸は、縦に廻りて十字形をなし、一たび巖角に觸れて、復た空中に飛び、數百間の距離に墮つ。旅順の戦、猛は則ち猛ありと雖も、未だ此大砲丸の雨下するものなかりき。豈に管に海岸諸砲臺の集射するのみならんや、鎮遠・定遠の二艦を初めとし、八隻許の敵艦は、盡く陸地に近く潜き寄せて、我兵を轟射せり。聞く鎮遠・定遠の二艦は、三十二瓏の巨砲を備ふと。斯の如きの巨砲、以て我陸兵を轟射す。陸兵膽勇身命を惜まずと雖も、豈能く之に抗せんや、是に至て只手を拱して砲壘間に潜むのみ。敵艦に加へて、水雷艇も岸近く潜き寄せて、射撃を援助したり。鎮遠・定遠はさながら、築かれたる海堡の如くにして、儼然動かす、共に二本の煙筒と、二本の塙あり、兩艦階背識列し易からず、其海岸砲臺は、龍廟嘴あり、鹿角嘴あり、趙北嘴あり、又謝家所、揚峯嶺の二陸砲臺あり。今や其砲を逆にして、皆陸上の我を射撃す。猛烈の狀、得て形容し難し。既にして、陸地山上の砲壘は、全く我手に墮つ。是より海岸の諸砲臺を陥れんとす、山上の堡壘前には、胸壁の外、又樹枝危架を設け、以て我兵の襲撃に備ふ。且地雷火の設けある、其數若干なるを知らず。

只繩の繋がるを見て、之を避くるを得るなり。支那兵の患も亦甚し。

かゝる所に、梅澤少佐の引率する第廿三聯隊第一大隊は、砲彈雨下の中、早くも敵の退路を絶ち、威海衛に通ずる街路上に出で、以て敗兵を襲撃す。敵は其退路を断られたるを知り、慌逃狼狽、頻りに守を捨て去らんとす、我に巨砲の以て敵を轟撃すべきものなし。只恃む所の、纜に小銃ありのみ、第二中隊の鶴田少尉は、先づ龍廟嘴の砲臺に向て突入す。敵は守を捨て、去る。北里中尉又一隊を率ゐて龍廟嘴の砲臺を襲ふ。陣内中尉は、其南端の高地を占領し、射撃最も急なり。是に至て龍廟嘴の砲臺全く陥落して我有に歸せり。其北隣の鹿角嘴砲臺には、各兵蟻附して之を陥んとす。さしも堅壘中に構へたる巨砲も、近距離に向ては、更に効なく、敵終に鹿角嘴砲臺をも、我に委したり。渡邊少佐の率ゐし右翼隊と、工兵小隊は、最北端の揚峯嶺陸地砲臺に向て吶喊し、之を抜きたり。唯未だ落ちざるものは、謝家所砲臺と、趙北嘴砲臺のみ。然れども是れまた囊中の物のみ。其西南の二方は、海面にして其東北二面は、既に我兵に占領せられぬ。是に於て、我兵は山上の砲壘間に若干の守備を置き、其餘は悉く海岸の兵營に侵入し、到る處に日章旗はひらめけり。萬歳の聲は、西に東に涌起して天地も崩る、計りなり。然れども軍艦よりの砲撃は尙も熾にして、何れの兵營も、何れの堡壘も、我兵在る所、是れ砲彈の集る所たり。其軍艦

至る所の砲臺に日章旗をひらめけしに、萬歳の聲は東西にひびく

軍艦砲の猛烈

砲の凄しさ、野砲山砲の類にわらず、頭上過ぐる所、草木皆震ひ、數十間の距離に落下せば、其附近は、忽ち硝煙に捲かれて暗濛たり。單に一個の破片すら、其勢甚猛烈にして、偶々敵の委したる馬の横腹を射貫きて腸を露はし、穴開くこと一尺餘なりき、以て、其一斑を見るべし其丸の破裂するや、霰彈四方に飛び、石壁樹木の、爲めに碎かるゝもの、其幾何を知らず、勢此に至れば、各兵皆其生死を知らず、目指す所は只々敵を攘ふに在るのみ。龍廟嘴の砲臺には、水雷營あり、鐵棧橋あり、船を繋ぐの好位置たり。彼の岸邊に游弋する敵艦は、動もすれば、此棧橋に向ひ、船を横付にせんとすの勢あり。是に於てか、此憂ふべき所作を、速に防止せざるべからず、時に砲臺内に四名の俘虜あり、遂に此俘虜を刎かし、砲臺の巨砲に装藥して、敵艦を射さしむ。是れ我に操砲の術を知るもの、現在せざるに由れり。かくとも知らず、砲臺前百間餘の近距離まで寄せし敵艦、其不意に驚き、急に其方向を轉じて沖合に逃げのびたり。されば、三回までの砲發も、一の命中を見ず、此砲臺の爲めに、俘虜の一人と、軍曹の一人とは、負傷したり。是れ其砲を打つに慣れざるが爲なり。

俘虜を以て敵艦を撃つ

是時に當り、我山砲兵は、山上の砲臺より敵砲を執て、謝家所及び趙北嘴の砲臺を砲撃せり。謝家所砲臺は、忽ち砲丸の爲めに炎焼し、烟煙天に漲る、其勢頗る壯快なり。獨り趙北嘴の砲臺未

日島の砲臺

敵の防材

だ陥落に至らず、鞏軍左營に至り、前方を展望すれば、劉公島は前に横はり、山上皆堡壘層樓、巨屋相連り、兵營棧橋、簇々來て眼中に在り、此島の砲臺も、亦巨砲齊射殆ど間斷なし、島と陸との間に、日島あり、日島の砲臺、最も猛烈、此砲臺は、新式の隱顯砲臺に係り、砲甚だ大ならずとも、其裝藥は勿論、照準に至るまで、萬端都て海中に於てし、其發射するに當りて、始めて砲身を砲臺上に顯はす。是れ其最も畏るべきものなり。日島を中心として、防材は環れり。防材とは、敵艦防禦の爲めに、水面巨材を聯ね、中に電氣を通じて爆發すべく作れる防艦具なり。防材外には、罅隙の乗すべきなく、水雷は布設せられたり。此日我艦隊も、亦海上より攻撃すべき豫定なりしも、敵の防備甚だ嚴なりし爲め、艦隊の運動を許さざるに似たり。而して陸上は、大砲を用ひざるも、殆ど四個大隊の力にて、能く之を陥れたり。爰に敵の三名、何れよりか左營に向ひ進み來る。我歩哨直に之を本隊に告ぐ、間もなく本隊の一小隊馳せ來りて、營内の胸壁に據り狙撃して之を倒す。又一步哨あり、遽然海岸より來る、告げて曰く、敵の水兵三百餘、今正に上陸したり、蓋陸地砲臺を回復せんと謀るもの、我歩兵一小隊之を防止して力足らざ、敢て速に援助を請ふと。梅澤少佐聞て起ち、海岸に向て馳す。銃聲漸く喧く、水兵と我兵との戦闘は始まれり。忽ち敵の一人、左營の胸壁を攀ちて中に入り、一倉庫の外面に隠れ、我兵の狙撃する所となりて斃

敵水兵を以て胸壁を回復

敵兵の感すべきし

る。而して上陸の敵、勢ひ甚だ猖獗、皆殊死して戦ふ。趙北嘴砲臺の敵、亦發火しつゝ、出で來り、上陸兵と合し、一方を破り、其退路を開かんとす。梅澤少佐、各兵を指揮し、之を壓殺せんとす。敵は決死して進み來り、發銃應戦甚だ力む。然れども我兵一步も退かず、敵の胸壁に據りて狙撃す。敵の斃るゝ者、前後相繼ぎ、伏屍殆ど山を爲す。敵は漸く解散せんとし、龍廟嘴の砲臺前を過ぎ、威海衛街路に向て走らんとせしが、龍廟嘴内の我第二中隊は、驟に發銃して、之を狙撃したり。就中陣内中尉は、兵を率ゐ突貫し、之を海中に擠す、敵は着衣の儘、泳て本艦に向て逃逸せんとす。中に感すべきは、其途に免るべからざるを量り、割腹して死せる者あり、今や砲臺の遁兵と、上陸兵とは、殆ど免るゝ者なし。海岸伏屍、累々敷ふるに堪へず、又海中にて狙撃に遭へば、二間四方餘の潮水は盡く紅色に變じ、時ならぬ秋の紅葉を晒ぬ。五人十人我兵の集るを見るや、惜氣もなく、敵は巨彈を放ち、左營内高く日章旗を掲ぐるを見ては、頻りに之に發砲せり。既にして兵營の一角に至れば、胸壁上葉もて包みたる怪しき物あり、開て之を見れば、何ぞ圖らん、斬髮の首級七箇、正しく是れ我兵なり、鈍刀もて亂斫したりと見えて、少きは五六刀、多きは十數個の刀痕あり、而して耳を穿ちて、紐を付け、或は魚を串きたるが如く、口より喉に紐を通はし、携帶し便にせり。又手袋の儘にて切斷せられたる手あり。靴、兵服等の此處彼處に散亂せるあり、

斬髮の首級七箇

敵砲を以て敵を射る

益々我兵の尸屍たるを確むべし。其兵服の肩章には、Eの字を記せり。以て其の十三聯隊の部屬たるを知れり。中に最も若きは、即ち守永中尉なりとす。同時斥候となり、踪跡を失ひたりし者、七名一等軍曹稻津新次の頭首も其中にあり。軍曹は宮崎縣の人、頗る勇悍の名あり。あゝ此の殘忍なる毒手に斃れし敢爲の我同胞を見ては、誰か憤激せざらんや、既にして、我海軍陸戰隊も來着しければ、豊嶋砲兵中佐は、之を率ゐて鹿角嘴の砲臺に入る、是より敵砲によりて、敵を打つ。敵艦頗る之に病ものゝ如く、砲臺撃破の目的を以て、砲口揃へて、此砲臺に向ひたり。一丸來りて二十四瓏の克砲に中る。砲身忽ち中折して、六七間の前方に飛ぶ。同砲は長さ四間餘、砲身二人抱なり。此の巨砲にして、一丸の爲めに中折せらる。敵彈の勢、以て知るべきなり。敵艦の發砲連りにして、到底其下に立つべからず、負傷亦數名あり、聞く各砲臺の陥るや、二名の洋人あり、海岸に出て敵の水雷艇を壓さ、之に乗じて逃げ去れりと、現に龍廟嘴の水雷營に入れば、水雷學校あり、西洋人之が教師たるの風説あり。死屍中、遂に一西洋人を見ざりしは、憾むべし、かくて左營の前門に至るや、一兵卒悲報を齎し來る、曰く。我旅團長大寺少將は、今廢天嶺上砲臺内に於て、敵彈に中りて傷甚だ重しと。此日少將は、肥薩の猛兵を指顧の中に操縦し、彈丸雨飛の間、立て談笑自若、靜に戦況を視察しつゝ、士氣を鼓舞せしかば、九州男子、恰も虎に翼の勢に

大寺少將
敵弾に觸る

井手申尉
の半ある
十七勇士
好射手田
代軍曹

て、天險無二の摩天嶺を難なく踏破り、少將やがて墓場に入り、井舞萬歳を唱へつゝ、更に各方面攻撃の命令を布かんとする、其刹那、敵の軍艦より打出したる大口徑の榴散弾は、壘寨に中り、破片巖角より飛び、少將の左乳頭より、右脇腹に貫通せり、少將倒るゝや否や、がばと身を起て、徐に側なる軍醫長を顧み、謂て曰く、彈子我体中に留まれるに似たり。請ふ一診を煩はずと、神色毫も平常に異ならず、軍醫長、直ちに之を診し、擔架に載せて、山後の野戦病院に送る。時に午後零時十五分、是より未二時間ならざるに、遂に逝けり。嗚呼、屍を異域に横へ、墳墓を天涯に築く、是れ將軍の豫期せし所なるべしと雖も、一勇將を喪ふは、我國の大不幸なり。殊に開戦以來、將官の戦没は氏を以て始となす。又其終となす。此日の戦は、第六師團、最も力めたり。就中摩天嶺十七士の如き、其功顯著、初め摩天嶺の陥るや、大寺將軍使を砲兵隊に馳せて、其射手を招く、命に應じて起つ者十七人、中尉井手通之を率ゐて、之に赴く。時に摩天嶺の東、楊峯嶺の砲臺未だ陥落せず、其海岸砲臺と、軍艦との砲力を集めて、摩天嶺の我軍と對射し、最も劇烈を極め、砲丸雨の如し、大寺將軍の戦死、實に此際にあり。十七士敵の委棄せし砲門を用ひ、彈道漸く定るや、發射度を重ねて、愈々正確、遂に其火藥庫に命中す。忽ち黒煙空に漲り、炎燄地を蔽ふ。敵は遂に支へ得ずして逃る。あゝ、楊峯嶺の陥る、實に此十七砲兵の力なり。就中好射手は誰ぞ、砲

砲筒に尿す

川村中佐
一胡兒を
抱て逃げ
しむ

敵勢及其
將
彼我死傷

此役六師
團の情況

摩天嶺砲
臺

兵一等軍曹田代兵三郎なり。兵三郎の先づ發射を始めんとするや、砲筒黒煙に燻せられて用ふべからず、兵三郎顧み呼で之に尿せしむ、一兵乃ち應じて尿す。是より發砲自在、遂に楊峯嶺砲臺の陥落に至る。一奇譚と謂ふべし。而して其百尺崖、諸砲臺の陥落は、我工兵の功も亦多し。其揚峯砲臺を抜くや、外國武官之を誘て曰く、貴國工兵亦戰鬥を能くするかと、川村中佐笑て曰く、我工兵は、外國と異り、均しく戰鬥力を有せりと。外國武官聞て、啞然たり。又謝家處の兵營陥るや、一胡兒あり、生れて甫めて三四歳、砲丸雨中の間に哀泣せり。川村中佐憐んで一捕虜をして、抱て之を避けしむ。後中佐語て曰く、可憐兒能く脱せしや否や、予は關心に堪へずと。亦美談なり。此日の敵は、捕虜の言によれば、其總勢六營兵、即ち二千五六百餘、其統領を劉超佩と云ひ、統帶を陳萬清と云ふ。敵の死傷八百餘、我軍の死傷百十五人及ぶ。今回は敵兵殊に頑強、我兵稍苦戦したり。

此戦は、旅順の役に比すれば、稍々複雑にして、敵味方共に高地を占めて對戦し、特に我兵は山を躡えて鎩々を出て、又山、斯くの如く跋涉の間に奮闘せしが故に、以上の戦況頗る雜錯を極めたり。今之を要約するに、第六師團の情況は、即ち左の如し。

摩天嶺砲臺、摩天嶺は、敵の砲臺中最高なる地位を占め、且つ最右翼の方向にあり、敵の背面防

禦の砲臺は、唯この砲臺のみ、此砲臺にして我手に入らんか、他の海岸諸砲臺は、皆其背面を瞰下せられ、且左翼の敵は、殆んど海面に壓迫せらるゝなり。我山砲兵が、前後の高地に放列を布りて砲撃するや、摩天嶺及び、楊峯嶺二砲臺の敵は、必死を極め、我に向て砲撃し、我兵の死傷、前後相繼げり。されども我前衛隊は、砲烟彈雨を物ともせず、勇往猛進、午前九時三十分頃、終に吶喊して、摩天嶺を占領す。此時敵の日島砲臺、劉公島の東砲臺及び、海岸に碇泊せる敵艦は、廿四珊瑚及び、三十珊瑚の巨弾を以て、猛烈に砲撃し、砲聲山河を震動せり。會々敵丸來り、摩天嶺砲臺の上に破裂し、我兵數名を傷く。次で敵の軍艦より放ちたる砲丸は、再び破裂し、又數名を斃せり。此日激戦を極めしは、第二十三聯隊の第一大隊にして、而して又敵丸中最も恐るべきは、定遠・鎮遠の二巨砲なり。

楊峯嶺砲臺

楊峯嶺砲臺、我砲兵大隊は、次で敵の最も頑固に抵抗する楊峯嶺砲臺に向て、砲火を集中せり。此砲臺は、背面及び、海岸防禦の砲臺にして、且つ其敵は、最も猛烈に發砲し、我兵の前進して、約百米突(五十五間)の處にまで達せしにも均らず、容易に砲臺を棄てずして、勇戦奮闘せり。是よ於て山砲大隊は、井手砲兵中尉に、砲手二十名を附して、摩天嶺の砲臺に進ましめ、敵の棄たる八珊瑚砲八門を以て、楊峯嶺砲臺を、背後より砲撃せしめたり。敵は尙屈せずして應戦し、彼我の

砲戰最も劇し、午前十一時頃に至り、我右翼隊も亦謝家所の方より敵壘に迫れり、かくて砲戰數十合の後、敵の砲臺より突然煙焰上れり。敵砲臺を棄て、走る、是に於て我兵進て之を占領せり。

敵の海岸砲臺と我砲臺との砲戰

海岸の諸砲臺、百尺崖及び其附近の海岸砲臺は、午前八時三十分頃より、我海軍と砲戰を交へ、居たりしが、我軍が摩天嶺の砲臺を取るや、百尺崖の砲臺も陥落せり。敵の日島砲臺・劉公島東砲臺及び、軍艦は、海岸諸砲臺を援けんがため、最も猛烈に我を砲撃せり。午前十一時四十分の頃、我海軍陸戰隊長手島中佐は、將校以下五十餘名を引率し、急歩して摩天嶺砲臺に來り、有田參謀と謀り、鹿角嘴の砲臺に向て前進し、我陸兵と共に、吶喊して、之を占領せり。因て海軍隊は、同砲臺にある二十四珊瑚加農砲を以て、日島及び劉公島砲臺を攻撃し、次で龍廟嘴砲臺も、我前衛の手を以て之を占領し、午後一時過に至り、背面海岸諸砲臺全く陥落せり。

海陸共同の砲戰

敵艦との砲戰

敵艦との砲戰、我海軍隊が進んで鹿角嘴砲臺に入り、二十四珊瑚加農砲を以て砲撃せんとするや、眼下の海岸に潜伏せし敵の軍艦十二隻は、一時に白旗を掲げて降参の意を表せしが、同時に非常の急速力を以て、灣内に進み出で、劉公島附近に至るや、直ちに白旗を下し、轟然砲門を開き我を砲撃せり。是に於て我の新に占領したる鹿角嘴の砲臺は、敵の旗艦定遠と凡午後三時頃

まで猛戦し、我鹿角嘴の砲門一個は、敵弾を受け用を爲さざるに至れり。以て其砲戦の激烈なるを知るべし。

敵兵の敗走

敵兵の敗走、揚峯嶺及び、百尺崖諸砲臺の陥落するや、敵の敗兵は、鹿角嘴の後を経て、海岸龍席嘴の方面に遁走せり。此時摩天嶺砲臺を取らんが爲進みたる前衛の一個中隊は、獨斷を以て左方に轉じ、鞏軍左營を占領し、其北方の小丘埠を占め、更に進んで小丘埠の上なる小堡壘を占領したるを以て、敵の敗兵は、其遁路を絶たれ、狼狽北る所を知らず、我兵之を要撃して、殆ど其過半を殲滅せり。敵の殘兵は、皆文登縣の方面に向ひ遁走したり。

茲に又左縦隊の第二師團は、此日午前五時諸隊、悉く集合地を發す、第四旅團長貞愛親王殿下は、左翼隊の一部を率ゐ、温泉湯の南方より、虎山の方へと向はせ給ふ。是より先き、午前四時五十分、歩兵第五聯隊の第三大隊は、左翼隊の先鋒となり、行進中樂格庄の北方高地端にある敵より砲撃を始め、容易に前進し得べくもあらず、依て第九中隊は、止りて敵を射撃し、別に第十一・第十二の兩中隊は、展開して敵の砲兵陣地に向ひしに、敵は歩砲兵を同線に置き、便利の陣地に據りて、頻りに我軍を瞰射せしが故に、我軍の困難大方ならず、幸、樂格庄附近より發射する我山砲の掩護に依り、容易に該高地の南麓に達し、第十一中隊の、將に突撃せんとするや、敵兵色動さ、

彼我の死傷
戦利品

銃砲共に火力を減せしを以て、二中隊合撃、以て其陣地を占領せり。此際敵の遺棄せしもの、野砲四門・彈藥若干あり。是に於て第十・十一・十二の三中隊は、追撃の任に當り、第十四中隊は、敵の砲兵陣地に突撃しなければ、敵は西北に向て潰走しぬ。此時再び野砲四門を分捕れり。我軍は尙も敵兵を追撃せんがため、二中隊は憑家窩南方の高地に進み、他の二中隊も亦同地に進み、隊伍を整頓するや、同所の北方揚家屯方向より、西を指して數多の敵兵の敗走するを認めたり。是に於て先づ二中隊を以て側面より追撃せしめんとし、鳳林集に進ましめ、又他の二中隊をも進め、之を射撃しければ、忽ち敵の艦隊より猛烈なる砲撃を受け、遂に其現露するの不利なることを覺り、漸次之を西南に避け、憑家窩に退却せり。時に午前九時三十分あり。此戦三大隊の死者卒二名・傷者卒四名・敵の死者は二名にして、傷者ハ詳かならず。戦利品は、克式野砲八門・彈藥庫三・彈藥若干・小銃彈若干・旗二本なり。是を左翼隊の活動となす。

かくて、第二師團の右翼隊は、山口少將之を率ゐ、同日午前六時頃、温泉場を發す。行く／＼敵を破り、南北虎口村を過ぎ、進で鳳林集東方第一帯の地を占領せり。歩兵第十六聯隊は、温泉場の西北に向て、漸次漸進せしに、多數の敵兵の、山麓と海上との間に散亂しつゝ、威海衛に向て敗走するを認めたり。因て小野木歩兵中隊は、附近の高地に砲列を布き、午前九時十五分より砲撃を始

め、又第一大隊の三中隊も、砲兵陣地の前方なる小高地に散開し、蜘蛛の子の如く散亂せる敵兵を猛射す。此時港内に在りし敵艦の、日本艦隊旗を翻へして、碇泊せるを見る。午前十時三十分頃、敵の歩兵約三百は虎口村の西南高地を占領し、又約百人は、砲兵陣地の前に散開し、防禦甚だ努めたり。是に於て第八中隊（香渡大尉）及び、第七中隊の一小隊（澤田中尉）は、猛射の後、砲兵陣地に向て突入せんとす。敵は克式山砲一門と、數多の彈丸彈藥、并に其屬具を遺棄し、楊家屯に向て退却せり。乃ち第二大隊（第六中隊缺）は、敵を追うて鞍部及び其附近に達し、第八中隊は、前記の砲及、屬品等を捕獲し、且つ砲兵陣地前に在し地雷の導電線を切斷し、尙も敵を追うて前進し、楊家屯に至り、鞏軍前營・鞏軍中營の二兵營を占領し、我國旗を樹つ。時に午前十一時なり。同十一時半頃敵艦約十隻水雷三隻は運動を始め、我國旗を仰し、直に清國旗を掲げ、我諸隊に向て大小砲及、霰發砲を放射せり。大小砲の彈着は、餘り近きに過ぎて命中するものなし、瞬時にして、鳳林集の北部に猛烈なる小銃射撃を蒙る。依て喇叭を吹かしめんとせしも、喇叭の口凍結して吹奏することを得ず。大隊副官の馬も亦傷く、乃ち副官は傳騎を派す、其傳騎は騎兵第二大隊第二中隊一等卒高橋傳吉と云ふ者なり。雨注せる彈丸を冒し、疾驅して鳳林集附近に我軍の進行を停止せり。然るに敵艦の砲彈は、漸く其勢力を逞せり。依て第五中隊（一小隊缺

喇叭凍結して吹奏する能はず

高橋軍曹の功名

彼我の士死傷六師團の死傷

く）、高地の背後に退却し、第一大隊（第一中隊缺）及び、第七中隊の約三分隊は、東北部鳳林集に向て退却し、午後零時三十分、同部落に到着せり。此退却に際し、一等軍曹高橋富藏が、高木大尉の命により、彈丸雨飛の間を駈け抜け、無事に大隊旗を保護して歸着したりしは、天晴の功名と謂ふべし。此日當聯隊に抵抗せし敵兵は、約七百人・砲二門・又遁走せし敵を猛射せしは、約二千にして、敵の死體は百三十三・負傷者三十三名を發見したり。而して我の死傷は、負傷將校一名・下士卒死亡三十八名・負傷者五十名に至る。而して又第六師團に於ける死傷將校の姓名は、即ち左の如し

戰死者

負傷者

- | | |
|----|--------|
| 少將 | 大寺 安純 |
| 中尉 | 守 永直一 |
| 少尉 | 佐 藤 毅 |
| 大尉 | 榊 木 正章 |
| 大尉 | 三 上 徳次 |

中尉 中村 曉
中尉 齋藤 富熊

戦既に終りて、黒木師團長は午後二時三十分の頃占領したる、陸正面砲臺・海岸砲臺及び、兵營に守備兵を差遣し、宿衛の命令を下して、嶺後村、孤山後村、河東村附近に宿營せしむ。當日の戦闘に於て細滑所及び、野戦病院の開設、并に歩兵砲兵彈藥の補充に時機を失せず、尙糧食の分配に於ても、亦其澁滞を見ざりしは、殊に配備の周到を見るに足る。但遺憾なりしは、敵は山面海岸の兩砲臺共、皆精良強大なる砲力を以て、雨の如く我に向て發射するも、我は僅に一大隊の山砲力のみを依頼して、之に酬い、比較的砲力微弱ありしたため、敵の頑固なる楊峯嶺砲臺をして、長時間其抵抗を逞うせしめたるも、又之がため同砲臺に對する歩兵の吶喊、稍其機を躊躇したりとの事、是のみ。然れども僅僅一師團の半部、即ち第六師團の六千兵を以て、一日を出でざるに、手早く清國第二の軍港主要の險要を陥落し、六個の山海砲臺を乗取り、四個の兵營を占領し、威海衛防備の主力を根底より打破したりしは、實に神州男兒固有の勇武を、世界に紹介するに足る。而して此日、軍司令部は、豫定の如く温泉場の西北方なる高地に移る。翌けて三十一日、第二師團は鳳林集・曲阜・野寨に在り、各隊共に偵察に従事せり。又第六師團は

第四旅團
參謀より
の意見書

師團長の
刊命

昨日の地に駐軍し、軍司令部亦同じ、前夜敵艦及び、砲臺は終夜砲撃を續く、此日第二師團長は、孟家村を發し、山を越ゆる楊家村を過ぎ、海濱の一小廟に憩ふ。六花霏々として降る。捕虜の言に依るに、威海衛東方の二營にある敵兵は、盡く威海衛に逃れ、又英人一名・獨人一名は、兵學校教官として、此所に在りしも、昨日皆劉公島に向へりと。此休憩中、第四旅團參謀より、意見の上申書を齎し來れり。曰く、命令の如く、海岸の道路を進まんとすれども、敵の艦隊より砲撃せらるる恐あり、故に危險を避て路を西方に取らんと欲す。更に命令を下さるゝにわらずば、此意見は直に實行すべしと。師團長曰く、此際に於て意見上申とは何事ぞ、戦に臨み、危を避く、將た何をか爲さんや、試に小部隊を出して、實際危險不利ならんには、始めて方向を轉すべきのみ、殊に軍人たるものは、未だ試みざるに、危險をいふべからず、抑文明國の敵軍に對する、此遠慮の如き、亦一理なきにしもあらずと雖も、幾ど兵略の見るべきなく、又勇氣、存するなきの清兵に對して、かばかりの小危険、我に於て何かあらんや、旅團長殿下の尊體を危地に置き奉るべからざるは勿論なりと雖も、又一方には、勉めて其名譽を揚げ奉らんと謀るは、實に其從屬士官の責務にあらざるや、歸りて速に予が言を傳へよ。前命令を實行せざる限りは、予が作戰計畫は、全く水泡に歸すべし、故に勉めて之を斷行せよと、怒氣面に溢ふる。既にして、軍司令官の傳令使來り、曰く、

此事甚だ危し、我兵を危地に置くべからずとは、豫て予が命令なり、急に方向を轉せよと。佐久間將軍聞て默然たること之を久し、終に馬を飛ばして軍司令部に至れり。午後二時師團司令部は、西方一里許の村落に宿營す。此夜亦砲聲の裡にあり、砲の轟く毎に、戸障子皆震ふ。

二月一日、降雪未だ止まず、寒氣亦嚴なり、八時發程す。道滑かにして、少許の傾斜すら容易に歩すべからず、人馬の倒る者比々、十時過前方に當り、砲銃の聲を聞く。午後一時、東陽に着せり。

前衛敵の大兵を聞く

此日我前衛は、僅に二中隊を以て前進中、銃聲突如として前方に起り、雪は降りしきりて、咫尺辨せず、終に銃聲を目標に展開して開戦す。既にして天霽れ、前方を望むに、敵數千高地にありて、發射頻りなり。衆寡敵せず、我兵頗る苦戦す、幸にして我前衛本隊來り合し、戰鬪數時の後、全く敵を擊退したり。此戦や事不意に出で、其勢の敵せざる、我の死傷頗る多く、死者五名、傷者三十五名を生せり、初め斥候の此敵あるを報するや、佐久間師團長は、第四旅團の半ばを分ち、之を驅逐せしめたり。乃ち貞愛親王之に將として、本隊を離れ蘆頭口(威海衛の西南五里)を發し、敵の據守する地點に向て進攻し給ふ。敵の歩兵軍、綏字軍合せて二千五百人、戴宗憲之を率ゐ、克式野砲四門を山上の要害に据ゑて防戦せり。攀登突撃は、凍結滑澤の山運に於て、容易に行ふべからざるのみならず、風雪烈くして、面を向くべからず、然るに我砲兵の勇敢不撓なる、敵の猛

火を意とせず、烈風に逆らひ、能く四門の山砲を適當の位地まで運搬配置し、前面の敵に注射しければ、幾くならずして敵の砲火は撲滅しぬ。然れども敵の歩兵は、踏止りて奮戦せり。親王殿下之を見給ひて、急に突進の命を下し給ふや、我兵奮前、難なく敵を擊破しつ、此際之分捕品は、野砲四門と、多數の彈藥にして、敵は其傷者を荷去りしも、尙遺棄したるもの三十五、其他谷底に顛墜して死したる者亦數ふべからず。二月二日、我斥候隊の偵察報告に依れば、威海衛に屯集する敵兵の大部分は、已に芝罘方面に遁走し、自餘の敵兵も、悉く奔竄し、威海衛全く空虚なりと云ふ。全軍其意外なるに喫驚せり。本日午後佐久間中將は、威海衛に向ひ、薄暮同地に至り、無造作にも威海衛を占領せり。而して此前後に於ける同師團諸隊の報告は、即ち左の如し。

第五聯隊長の報告

青森歩兵第五聯隊長の報告書

(一)二月一日午前七時、曲阜を發し、東陽に至り停止中、聯隊は東陽及び、徐家河に合營すべき命を受く、是に於て第三大隊を徐家河に、第二大隊を東陽に合營せしめんとす。乃ち第三大隊を徐家河に差遣す。時既に東陽の西方に銃聲の頻りあるを聞く、是れ蓋し我左側隊たる第一、第四中隊の、敵と接戦酣なるを知る。

(二)午前十一時頃、銃聲益々劇甚、午後零時十分、師團長の命令に曰く、其聯隊は正に銃聲の方向

に前進し赴援すべしと。依て東陽に在て、今方に宿舎準備に鞅掌せる第二大隊を、羊亭集に進ましめ、又先に徐家河に差遣せる(他の二中隊は敵情偵察の爲め威海衛方面に差遣す)、第三中隊を東陽に招致し、共進せしめんとす、然れども第二大隊遂に追及するを得ず、午後四時半孫家屯に至る。

(三)此戦闘は、第三大隊のみ敵に對して攻撃を爲せり。其進路は、歩兵第十七聯隊の三中隊に左方に展開せり。

(四)午後零時三十分、我大隊は銃聲盛なる方向に前進すべきの命あり、因て東陽を發し、羊亭集西端に至るや、我山砲兵同村西端道路の北側にある高地より射撃を始むるに會ず、是に於て大隊は孫家屯に通ずる道路に従ひ、約五百米突を進むや、第七中隊は第一線とし、第八中隊を第二線に、第五第六中隊を第三線と爲し、前進を繼續す。時に風雪紛々、咫尺辨す可らず、尙進むこと四百米突、此時風雪一時収まる、敵彈飛來頗る烈し、敵は孫家屯西方高地より東郊村に通ずる道路の兩側に亘りて、陣地を占め、其數二千人、是に於て第七中隊は、一小隊を散兵線に加へ、河の左岸に停止し、八百米突の照尺を以て、徐に打掛らしむ。午後一時十五分前進を命じ、且第八中隊を第七中隊の左方に散開せしめ、進むこと約二百米突にして停止す。此時敵の射

撃又烈し、午後一時二十分進で東郊村道路の南方高地を占領す。此高地は、敵の一部隊の占領し居りし所なり。此時敵の榴散彈を蒙る、午後二時十五分、更に進んで東郊村南北に亘る高地の敵を攻撃す、此攻撃に依り、敵は東郊村方向に敗走す、午後二時四十五分、敵の陣地を全く占領す。

(五)我大隊の右翼に、第十七聯隊第三大隊の三中隊前後して前進せり。

(六)是に於て大隊を高地の西斜面に集合し、將に斥候を出さんとするや、騎兵大隊來り會し、敵に尾して前進す。午後七時大隊は、東陽に合營すべき命あり。即ち集合地を發し、午後九時合營地に着す。

此日負傷兵卒五人、關節閃挫三人。

戦闘後土人の言に據れば、敵の總數約五千人、其統領は劉某なりと。

青森歩兵第五聯隊第一中隊長矢野歩兵大尉の報告書

二月一日東陽に於て、左の任務を受く。

羊亭集の敵を驅逐し、孫家屯を占領し、威海衛より、芝罘に通ずる電線を切斷し、前双島より酒館集に涉りて警戒すべし。

矢野大尉
の報告

右の任務を受くるや、直に左の命令を下す。

第一中隊ハ、前面の敵を驅逐し、孫家屯に向て前進せんとす。

第一小隊は、前衛、第二・第三小隊は本隊とす。

前衛小隊は、午前十時四十分、東陽を發し、羊亭集の西端に至るや、倭山庄に通ずる前路、北方の高地より、約二百名の敵兵現出せり。直に前衛小隊は散開して之を射撃す。

午前十一時十分頃、更に第三小隊を左翼に延伸増加し、猛烈の射撃を施すや、敵は倭山庄方向に退却せり。即ち中隊は之を尾撃せんとするや、我左前方に當り、凡二千の敵兵堤道に據り、我に向て射撃す。此に於て、第二小隊を戦線に増加し、擧て以て敵の左翼に迫り、同時に傳令を以て、第四中隊に應援を求む。援隊未だ至らざるに、敵兵我兵の銃射を蒙りて、遂に支ふること能はず、倭山庄西南方にある無名村に退却せり。中隊は、更に前進して、堤道に達し、暫時此地に停止し、同時に傳令を以て、此景況を師團長に報告したり。時に敵は孫家屯北方無名村に據り、激しく我を射撃す、依て中隊は擧げて之に向ひ、突撃を行ひ、該村に達し、戦闘しつゝ、該村の西端に到り、急射を以て、敵の敗兵を驅逐し、又更に小友中尉に電線を切斷すべきを命ず。然る後、中隊は更に孫家屯に向て前進せり、時に西風激しく雪を飛ばし咫尺を辨ずると能

はず、將に孫家屯に達せんとするや、該村北方畑地に敵の歩兵、約八百名の集合しあるを見る。即ち中隊は猛烈なる急射を以て、敵を射撃す。敵兵狼狽散乱して、該村南方高地及び蘆島口方向に敗走せり。是に於て中隊は、全く孫家屯を占領す。同時に小友中尉は、電線を破壊し終り、而して此地に到着せり。依て不取敢一原田少尉をして、師團長閣下に報告せしむ。時に午後二時なり。

午後二時三十分頃に至り、第四中隊、此地に到着し、直に該中隊は、前哨となり、我中隊は前哨後隊となり、此地に於て村落露營を張る。

此日の戦闘に於て、即死一名・負傷六名・敵の負傷詳らかならざれども、我中隊の目に觸れし死者四十名ありたり。

仙台砲兵第二聯隊第三大隊第一中隊報告書

二月一日、當中隊は前兵長（歩兵第十七聯隊長）瀧本大佐の指揮下に屬し、午前八時口子の集落地に集合を命ぜられ、直に出發倭山庄に向つて、歩兵第十七聯隊第三大隊に續行す。

午後零時過、東陽に達するや、西方に銃聲起るを聞く、此時迄小官は、前兵長に隨ひしが、後方を願れば、我砲兵中隊の續行し來らざるに着意し、暫時停止して、待ちしも來らず、（其原因は

中隊長の報告